

「何うするの、其から。」

細い、が透る、力ある音調である。美しい女の其の聲に、此の折から、背後のみ見返られて、雲のひた染みに蔽ひかゝる、棧敷裏とも思ふ町を、影法師の如く漸く人脚の繁く成るのに氣を取られて居た、松崎は、又目を舞臺に引附けられた。

舞臺を見返す瞬間に、むかうから、先刻の編笠を被つた鴉のやうな新粉細工が、ふと身を起して、うそ／＼と出て来るのを認めた。且つ其が、古綿のやうにむく／＼と、雲の白さが一團残つて、底に幽に蒼空の見える……遙かに遠い所から、たとへば、もの一里も離れた前途から、黒雲を背後に曳いて襲ひ来る如く見て取られた。

それ、最う其處に、編笠を深く、舞臺を覗く。

何時の間にか歸つて来て、三人に床几を貸した古女房も交つて立つ。

彼處に置捨てた屋臺車が、主を追うて自ら軋るかと、響が地を敲つて、轟々と雷の音。繪の藤も風に颯と黒い。其の幕の彼方から、紅蓮、大紅蓮の其の聲、舌も赤う、ひらめくと覺えて、めら／＼と饒舌る。……

「まだ後が聞きたうござりますか。お稻は狂死に死ぬるのぢや。や、ぢやが、家眷親屬の餘所で見るとは塵も据らず、色が抜けるほど白いばかり。然まで瘦せもせず、苦患も無しに、家眷息絶ゆるとは見たれども、の、心の裡の苦痛はよな、人の知らぬ苦痛はよな。其の段を芝居で見せるのぢや。」

「そして、後は、」

と美しい女は、白い兩手で、確と紫の襟を壓へた。

「死骸に成つての、空蟬の藻脱けた膚は、人間の手を離れて牛頭馬頭の腕に上下から掴まれる。

や、其處を見せたい。其の娘の假髪ぢや、お稻の髪には念を入れた。……島田が亂れて、絲も切

もかゝらぬ膚を黒く輝く、吾が天女の後光のやうに包むを見さい。末は踵に餘つて曳くぞの。

鼓草の花の散るやうに、娘の身體は幻に消えても、其の黒髪は、金輪、奈落、長く深く残つて

朽ちぬ。百年、千歳、失せず、枯れず、次第に伸びて艶を増す。其の髪千筋一筋づゝ、獸が食へ

ば野の草から、鳥が啄めば峰の花から、同じお稻の、同じ姿容と成つて、一人づゝ世に生れて、

又同一年、同一月に、親兄弟、家眷親屬、己が身勝手な利慾のために、戀をせかれ、情を破ら

れ、縁を断られて、同一思ひで、狂死するわいの。あの、厄年の十九を見され、五人、三人一時

に亡せるぢやらうかの。死ねば思ひが黒髪に残つて其の一筋が又同じ女と生れる、生きかはるわいの。死にかはるわいの。

其の誰もが皆揃うて、親兄弟を恨む、家眷親屬を恨む、人を恨む、世を怨む、人間五常の道亂れて、黒白も分かず、日を蔽ひ、月を塗る……魔道の呪詛ぢや、何と！魔の呪詛を見せますのぢや、其處をよう見さつしやるが可い。

お稻の髪、亂れて靡く處をなう。」

「死んだお稻さんの髪が亂れて……」

と美しい女は、衝と鬢に手を遣つたが、ほつれ毛よりも指が揺いで、

「そして、其からはえ？」

と屹と言ふ。

「此方、親があらば叱らされう。よう、それからと聞きたがるの、根問ひをするのは、愛嬌が無うてようないぞ。女子は分けて、うら問ひ葉問をせぬものぢや。」

雲の暗さが増すと、あたりに黒く艶が映す。

其の中に、美しい女は、聲も白いまで際立つて、

「否、聞きたい。」

二十三

「たつて聞きたくばの、恚うさしやれ。」

幕の蔭で、間を置いて、落着いて、

「お稻の芝居は死骸の黒髪の長いまでぢや。此處では知らぬによつて、後は去んで、二度添どのに聞かつしやれ、二度添ひの女子に聞かつしやれ。」

「二度添とは？何です、二度添とは。」

扱帯を手繰るやうに繰返して問返した。

「か、知らぬか、なう。二度添とは、二度目の妻の事ぢや。男に取替へられた玩弄の女子ぢや。古い手に摘まれた、新しい花の事いの。後妻ぢや、後妻と申しますものぢやわいなう。」

ト一度引か、つたやうに見えたが、ちらりと筵の端を、雲の影に踏んで、美しい女の雪なす足袋は、友染凄く舞臺に乗つた。

目を明かに凝と視て、

「其の後妻とは、二度添とは誰れ、其處に居る人。」と肩を斜め、手を、錆びたが楯の如く、行燈に確と置く。

「お、く、誰や知らぬ、其の二度添と云ふのは、……お稲が望が遂げなんだ、縁の切れた男に、後で枕添と成つた女子の事い。……娑婆はめでたや、蟲の可い、其の男は、我が手で水を向けて、娘の心を誘うて置いて、弓でも矢でも貫かう心はなく、先方の兄者に、たゞ斷り言はれただけで指を銜へて退つたいの、其の上への。

我勝手や。娘がこがれ死をしたと聞けば、おのれが顔をかゞみで見ると、自惚れての。何と、早や懷中に抱いた氣で、お稲は其の身の前妻ぢや。――

との、まだお稲が死なぬ前に、ちやツと祝言した花嫁御寮に向うての、――お主は後妻ぢや、二度目ぢやと思つておくれい、――との。何と蟲が可からうが。其の芋蟲に又早や、臺も蕊も嘗められる、二度添どのもあるわいの。」

と言ふかと思ふ、聲の下で、

「ほ、ほ、ほ、」

と口紅がこぼれたやうに、散つて舞ふよと花やかに笑つた。

あ、膚が透く、心が映る、美しい女の身の震ふ影が限なく衣の柳條に搦んで揺れた。

「歸らう、品子、何をしとる。」

紳士はづかゝと寄つて、

「詰らん、さあ、歸るんです、歸るんだ。」

とせり着くやうに云つたが、身動きもしないのを見て、堪りかねた體で、ぐいと美しい女の肩を取つた。

「歸らんですか、おい、歸らんのか。」

其の手は衝と袖で拂はれた。

「貴方は何です。女の身體に、勝手に手を觸つて可いんですか。他人の癖に、……」

「何だ、他人とは。」

「憤氣に成ると、……」

「舞臺へ、靴で、誰、お前は。」

先刻から、たゞ柳が枝垂れたやうに行燈に凭れて居た、黒紋着の其の雪女が、りんと成つて、兩手で紳士の胸を壓した。

トはつとした體で、よろゝと退つたが、腰も据らず、ひよろついて來て繼るやうに寄つたと思ふと、松崎は、不意にギクと手首を持たれた。

「貴方を、伴侶、伴侶と思ひます。あ、あ、あの、樂屋の中が、探險、……」

紳士は探險と言つた。

「た、た、探險したい。手を貸して下さい。御、御助力が願ひたい。」  
「其はよくない。不可ません。見物は、みだりに芝居の樂屋へ入るものではないんです。」  
「そ、そんなら、妻を——人の見る前、夫が力づくでは見つともない。貴方、連出して下さい、引張出して下さい、願ひます。僕を、他人だなんて僕を、……妻は發狂しました。」

二十四

「否、御心配には及びません。」

松崎は先んじられた……そして美しい女は、淵の測り知るべからざる水底の深き瞳を、鋭く紳士の面に流して、

「私は確です。發狂するなら貴方がなさい、御令妹のお稲さんのために。」

と、爽かに言つた。

「私とは、他人なんです。」

「他人、何だ、何だ。」

と喘ぐ。

「ですが、私に考へがあつて、一寸知己に成つて居ればかりなんです。」

美しい女は、そんなものは、と打棄る風情で、屹と又幕に向つて立直つた。

「其處に居る人……お前さんは不思議に、よく何か知つておいでだね、地獄、魔界の事まで御存じだね。豪いのね。でも悪魔、變化ばかりではない、人間にも神通があります。私が問うたら、

お前さんは、去つて聞けと言ひましたね。

私は即座に、其の二度添、其のうはなり、其の後妻に、今こゝで聞きました。……

お稲さんが亡く成つてから、あとの其の後妻の芝居を、お前さんに聞かせませうか。聞かせませうか。それともお前さんは御存じかい。」

幕の内、

「臙氣ぢや、冥土の霧で臙氣ぢや。はつきりした事を聞きたいなう。」

「え、聞かしてあげませう。——男に取替へられた玩弄は、古い手に摘まれた新しい花は、はじめは何にも知らなかつたんです。清い、美しい、朝露に、旭に向つて咲いたのだと人なみに思つて居ました。ですが、蝶が来て、一所に遊ぶ間もなかつたんです。」

お稲さんの事を聞かされました。玩弄は取替へられたんです、花は古い手に摘まれたんです……男は、潔い白い花を、後妻に成れと言ひました。

贅澤です、生意氣です、行過ぎて居ます。思つた戀を爲遂げないで、引込んだら斷念めれば可

い、其のために戀人が、然うまでにして、生命を棄てたと思つたら、自分も死ねば可いんです。死なねければ、死んだ氣に成つて、お念佛を唱へて居れば可いんです。

力が、男に足りないで、殺させた女を前妻だ、と一人極めにして、其の上に、新妻を後妻に成れ、後妻にする、後妻の氣で居れ、といけ酒亞々々として、髪を光らしながら、鱈髭の生えた口で言ふのは何事でせうね。」

「愈々發狂だ、人の前で見つともない。」

紳士は肩で息をした、其の手は松崎に縋つて居る。……

「え、人の前で、見つともないと云つて、此處には幾人居ます。指を折つて數へるほどもない。夫が私を後妻にしたのは、大勢の前、世間の前、何千人、何萬人の前だか知れませんか。

夫も夫、お稲さんの戀を破つた。其處においでの人他人も他人、皆、女の仇です。

幕の中の人、お聞きなさい。

二度添にされた後妻はね……それから夫の言に、故と喜んで従ひました。

涙を流して同情して、一層、後妻と云ふんなら、お稲さんの妹分に成つて、お稲さんにあやかりませう。其のうまれ代はりに成りませう、と云つて、表向き次手を求めて、お稲さんの實家に行つて、そして私を——其の後妻を——兄さんの妹分にして下さい、と言つたんです。

其處に居る他人は、涙を流して喜びました。尤も、そこに居るやうなハイカラさんは、少い女が、兄さん、とさへ云つて遣れば、何でも彼でも涙を流すに極つて居ます。

私は精々と出入りしました。先方からも毎日のやうに来るんです。そして、兄さん、兄さんと、云ふうちには、屹と袖を引くに極つて居るんです。然も奥さんは永々の病氣の處、私は其が望みでした。」

電が、南辻橋、北の辻橋、菊川橋、撞木橋、川を射て、橋に輝くか、と衝と町を徹つた。

二十五

「其の望みが叶つたんです。」

そして、今日も、夫婦のやうな顔をして、二人づれで、お稲さんの墓参りに來たんです——夫は、私が恚うするのを、お稲さんの靈魂が乗りうつ、たんだと云つて、無性に喜んで居るんです。殺した妹の墓の土もまだ乾かないのに、私と一所に、墓参りをして、御覽なさい、裁下ろしの洋服の襟に、乙女椿の花を挿して、お稲は、恚う云ふ娘だつたと、平氣で言ひます。

其の氣ですからね。」

紳士の身體は靴を刻んで、揺上がるやうだつたが、ト松崎が留めたにも係はらず、くわツと握

拳で耳を壓へて、横なぐれに倒れさうに成つて、忽ち射るが如く町を飛んだ。其の状は、人の見る目に可笑くあるまい、礫の如き大粒の雨。

雨の音で、寂寞する、と雲にむせるやうに息が詰つた。

「幕の内の人、」

美しい女は、吐息して、更めて呼掛けて、

「お前さんが言つた、其の二度添ひの談話は分つたんですか。」

「其から、」

と雨に濡れたやうな聲して言ふ。

「此が知れたら、男二人は何うなります。其の親兄弟は？其の家族は何うなると思ひます。其が幕なのです。」

「扱て、其の後は何う成るのぢや。」

「あら……」

もどかしや。

「お前さんも、根問をするのね。それで可いではありませんか。」

「いや、可うないわいの、まだ肝心な事が残つたぞ。」

「肝心な事つて何です。」

「はて、此方も、」

雨に、つと口を寄せた氣勢で、

「知れた事ぢや……肝心の其の二度添ひのは何うなるいの。」

聞くにも堪へじ、と美しい女の毗が上つた。

「え、廻りくどい！私ですよ。」

と激した状で、衝と行燈を離れて、横ざまに幕の出入口に寄つた。流る、やうな舞臺の姿は、

斜めに電光に颯と送られた。……

「分つて居るがの。」

と鷹揚に言つて、

「扱ぢや、此方の身は果は何う成るのぢや。」

「……………」

ふと黙つて、美しい女は、行燈に、悄乎と残つたお稻の姿に其の毗を返しながら、

「お前さんの方の芝居は？此の女は何う成る幕です。」

「おいの、……や、紛れて聲を掛けなんだぢやで、お稻は殊勝氣に舞臺ぢやつた。——雨に濡れ

うに……折角の御見物ぢや、幕切れだけ、ものを見せうな。」  
と言ふかと思ふと、唐突にどろ／＼と太鼓が鳴つた、音を絢交ぜに波打つ雷鳴る。  
猫が一疋と颯が出た。

ト無慙や、行燈の前に、仰向けに、一個が頭を、一個が白脛を取つて、宙に釣ると、縮ねの緩んだ扱帯が抜けて、紅裏が肩を這つた……雪女は細りとあからさまに成つたと思ふと、すらりと落した、肩などへの手を枕に、がつくりと頸が下つて、目を眠つた。其面影に颯と影、黒髪が丈に亂れて、舞臺より長く敷いたのを、兇悪異變な面二つ、たゞ面の如く行燈より高い所を、するすると引いて、美しい女の前を通る。

幕に、それが消える時、風が擲つが如く、虚空から、——雨交りに、電光の青き中を、朱鷺色が八重に縫ふ乙女椿の花一輪。はたと幕に當つて崩れもせず……お稲の玉なす胸に留まつて、忽ち隠れた。

美しい女は筵に爪立つて身悶えしつゝ、

「お稲さんは、お稲さんは、此から何う成るんです、何う成るんです。」

「む、くどいの、あとは魔界のものぢや。雪女と成つての、三つ目入道、大入道の、酌など伽なとせうぞいの。わは、」

と笑つた。

美しい女は、額を當てて、幕を掴むで、

「生意氣な事お言ひでない。幕の中の人、悪魔、私も女だよ、十九だよ……お稲さんと同じ死骸に成るんだけど、誰が、誰が、酌なんか、……可哀相にお稲さんを——女はね、女はね、そんな弱いものぢやない。私を御覽。」

はた、はた、神。

南無三寶、電光に幕あるのみ。

「あれえ。」と聞えた。

瞬間、松崎は猶豫つたが、棄て置かれぬのは、續いて、編笠した烏と古女房が、衝と幕を揚げて追込んだ事である。

手を掛けると、觸るものなく、篠つく雨の簾が落ちた。

唯見ると、聲のしたものは何も見えない。三つ目入道、狐、狸、猫も颯もごちや／＼と小さく固まつて居たが、松崎の殺進に、氣を打たれたか、ばら／＼と、奥へ遁げる。と果しもなく野原の如く広い中に、塚を崩した空洞と思ふ、穴がぼか／＼と大きく窪んで、蜂の巢を擴げたやうな、其の穴の中へ、すぼん、と一個づつ、飛込んで、ト貝鮓と云ふものめく……頭だけ出して、ケラケ

ラと笑つて失せた。

何等の魔性ぞ。這奴等が群り居た、土間の雨に、引撈られた衣の綾を、驚破や、蹂躪られた美しい女かを見ると、帯ばかり、扱帯ばかり、花片ばかり、葉ばかりぞ亂れたる。

途端に海のやうな、眞晝を見た。

廣場は荒廢して日久しき染物屋らしい。縦横に並んだのは、いづれも繪の具の大瓶である。

あはれ、其の、せめて紫の瓶なれかし。鐵のひゝわれた如き、遠くの壁際の瓶の穴に、美しい女の姿があつた。頭を編笠が抱へた、手も胸も、面影も、しろくくと、あの、舞臺のお稻其のまに見えたが、たゞ既に空洞へ入つて、底から足を曳くものがあらう、美しい女は、半身を上曲げて、腰のあたりは隠れたのである。

雪のやうな胸には、同じ朱鷺色の椿がある。

叫んで、走り懸ると、瓶の區劃に躓いて倒れた手に、はつと留南奇して、ひやくくと、氷の如く觸つたのは、まさしく面影を、垂れた腕にのせながら土間を敷いて、長く其處まで靡くの認め、美しい女の黒髪の末なのであつた。

此の黒髪は二筋三筋指にかゝつて手に残つた。  
海に沈んだか、と目に何も見えぬ。

四ツの壁は、流る、電と輝く雨である。とゞろくと鳴るかみは、大灘の波の唸りである。

「おでんや——おでん。」

戸外を行く、然も女の聲。

我に返つて、這ふやうに、空屋の木戸を出ると、雨上りの星が見えぬ。

後で傳へ聞くと、同一時、同一所から、其の法學士の新夫人の、行方の知れなく成つたのは事實とか。……松崎は實は、うら少い娘の餘り果敢なさに、龜井戸詣の歸途、其の界限に、名譽の巫子を尋ねて、其のくちよせを聞いたのであつた……靈の來つた状態は祕密だから言ふまい。魂の上る時、巫子は、空を探つて、何も無い所から、弦にかゝつた三筋ばかりの、長い黒髪を、お稻の記念ぞとて授けたのを、兎やせむとばかりで迷の巷。  
黒髪は消えなかつた。



葛  
蕪  
本

如月のはじめから三月の末へかけて、まだしつとりと春雨に成らぬ間を、毎日のやうに風が續いた。北も南も吹荒んで、戸障子を煽つ、柱を揺る、屋根を鳴らす、物干棹を刎飛ばす——荒磯や、奥山家、都會離れた國々では、尤も熊を射た、鯨を突いた、祟りの吹雪に戸を鎖して、冬籠る頃ながら——東京もまた砂埃の戦を避けて、家毎に穴籠りする思ひ。

意気な小家に流連の朝の手水にも、砂利を含んで、じり、とする。

羽目も天井も乾いて燥いで、煤の引火奴に礫が飛ぶと、其のま、チリ／＼と火の粉に成つて燃出しさうな物騒さ。下町、山の手、晝夜の火沙汰で、時の鐘ほどジャン／＼打つける、其處も彼處も、放火だ／＼、と取り騒いで、夜廻りの拍子木が、枕に響く町々に、寝心の扱て安からざりし年とかや。

三月の中の七日、珍しく朝風ぎして、其のま、穩かに一日暮れて……空はどんよりと曇つたが、底に雨氣を持つたのさへ、頃日の埃には、もの和かに視められる……じと／＼とした雲一面、星はなけれど宵月の、朧々の大路小路。辻には長唄の流しも聞えた。

此の七の日は、番町の大銀杏とともに名高い、二七の不動尊の縁日で、月六齋。かしの二日

は大粒の雨が、丁ど夜店の出盛る頃に、ぱら／＼と生暖い風に吹きつけたために——其の癖すぐに晴れたけれども——丸潰れと成つた。……以來、打續いた風ツ吹きで、銀杏の梢も大童に亂れて蓬々しかつた、其の今夜は、霞に夕化粧で薄あかりにすらりと立つ。

堂とは一町ばかり間をおいた、此の樹の許から、櫻草、堇、山吹、植木屋の路を開き初めて、長閑に春めく蝶々簪、娘たちの宵出の姿。酸漿屋の店から灯が點れて、繪草紙屋、小間物店の、夜の錦に、紅を織り込む賑と成つた。……

が、引續いた火沙汰のために、何となく、心々のあわたゞしさ、見附の火の見櫓が遠霞で露店の灯の映るのも、花の使と視めあへず、遠火で焙らる、思ひがしよう、九時と云ふのに屋敷町の塀に人が消えて、御堂の前も寂寞としたのである。

提灯もやがて消えた。

ひた／＼と木の葉から滴る音して、汲かへし、掬ひかへた、柄杓の柄を漏る雫が聞える。其の暗く成つた手水鉢の背後に、古井戸が一つある。……番町で古井戸と言ふと、びしよ濡れで血だらけの婦が、皿を持つて出さうだけれども、別に仔細はない。……参詣の散つた夜更には、人目を避けて、素膚に水垢離を取るのが時々あるから、唯思ふと或は其かも知れぬ。

今境内は人氣勢もせぬ時、其の井戸の片隅、分けても暗い中に、恰も水から引上げられた體に、

悄乎と立つた影法師が、本堂の正面に二三本燃え残つた蠟燭の、横曇りした、七星の数の切れたやうに、たよらない明に幽に映つた。

びしや／＼……水だらけの濕っぽい井戸端を、草履か、跣足か、沈んで踏んで、陰氣に手水鉢の柱に縋つて、其處で息を吐く、肩を一つ揺つたが、敷石の上へ、蹠踏々々。

口を開いて、唇赤く、パツと蠟の火を吸つた形の、正面の鰐口の下へ、髯のもぢや／＼と生えた蒼い顔を出したのは、頬のこけた男であつた。

内へ引く、勢の無い咳をすると、眉を擧めたが、窪んだ目で、御堂の裡を俯向いて、覗いて、「お蠟を。」

二

然う云つて、綻びて、袂の尖で漸つと繋がる、ぐたりと下へ襲ねた、どく／＼重さうな白緋の浴衣の溢出す、汚れて萎えた綿入のだらけた袖口へ、右の手を、手首を曲げて、肩を落して突込んだのは、賽銭を探つたらしい。

が、チャリ、ともせぬ。時に、本堂へむくりと立つた、大きな頭の眞黒なのが、海坊主のやうに映つて、上から三寶へ

伸懸ると、手が燈明に映つて、新しい蠟燭を取らうとする。

一ツ狭い間を措いた、障子の裡には、燈があか／＼として、二三人居残つた講中らしい影が映したが、御本尊の前には此の雇和尚唯一人。最う腰衣ばかり袈裟もはづして、早やお扉を閉める處。此の、しよびたれた参詣人が、びしよ／＼と賽銭箱の前へ立つた時は、ばたり、ばたりと、團扇にしては物寂しい、大な蛾の音を立てて、沖の暗夜の不知火が、ひら／＼と縦に燃える残んの灯を、廣い掌で煽ぎ／＼、二三挺順に消して居たのである。

「え、」と其の男が壓へて、低い聲で継るやうに言つた。

「濟みませんがね、もし、私持合せがございません。え、新しいお蠟燭は御遠慮を申し上げます。え、」

「はあ。」と云ふ、和尚が聲の幅は押被せるばかり。鼻も大きければ、口も大きい、額の黒子も大入道、眉をもぢや／＼と動かして聞返す。

此がために、寢れた男は言漉つて、「で、ございますから、何うぞ蠟燭はお點し下さいませんやうに。」

「然やうか。」

と、も一つ押被せたが、其のまゝ、遣放しにも出来ないのは、彼が尙だ何か言ひたさうに、もぢもぢとしたからで。

和尙は、まじりと見て居たが、果しがないから、大な耳を引傾げ状に、ト掌を當てて、燈明の前へ、其の黒子を明らさまに出した體は、耳が遠いからと云ふ仕方に似たが、此の際、判然分るやうに物を言へ、と催促をしたのである。

「えゝ。」

と又云ふ、男は口を利くのも呼吸だはしさうに肩を揺る、……

「就きましては、眞に申兼ねましたが、其の蠟燭でございます。」

「蠟燭は分つたであす。」

小鼻に皺を寄せて、黒子に網の目の筋を刻み、

「御都合ぢやからお蠟は上げぬやうにと言ふのぢや。御隨意であす。何か、代物を所持なさらんで、一挺、お蠟が借りたいとでも言はるゝ事か、其も御隨意であす。ぢやが、最う時分も遅いな。」

「否。」

「はい、」と、もどかしさうな鼻息を吹く。

「何でございます、其の、然やうな次第ではございません。其でございますから、申しにくいのでございますが、思召を持ちまして、お蠟を一挺、お貸し下さる事には成りますまいでございますか。」

「ぢやから、ぢやから御隨意であす。ぢやが時刻も遅いでな、……見なさる通り、燈明をしめて居るが、それともに點けるであすか。」

「其がでございます。」

と疲れた状に、ぐたりと賽錢箱の縁に兩手を支いて、兩の耳に、すく／＼と毛のかぶさつた、小さな頭をがつくりと下げながら、

「一挺お貸し下さいまし、……と申しますが、御神前に備へるではございません。私、頂いて歸りたいのでございます。」

「お蠟を持つて行くであすか。ふうむ、」と大きく鼻を鳴す。

「其も、一度お供へに成りました、燃えさしが願ひたいのでございまして。」  
いや、時節から物騒千萬。

「待て、待て、一寸……」

往來留の提灯は最う消したが、一筋、兩側の家の戸を鎖した、寂しい町の真中に、六道の辻の通するべに、鬼が植ゑた鐵棒の如く標の残つた、縁日果てた番町通。なだれに帯坂へ下りようとする角の處で、頬被した半纏着が一人、右側の廂が下つた小家の軒下暗い中から、ひた／＼と草履で出た。

聲も立てず、往來留の其の杵に並んで、ひしと足を留めたのは、あの、古井戸の陰から、よろりと出て、和尙に蠟燭の燃えさしをねだつた、何故、其の手水鉢の柄杓を盗まなかつたらうと思ふ、船幽靈のやうな、蒼しよびれた男である。

半纏着は、肩を斜つかひに、つか／＼と寄つて、

「待てつたら、待て。」とドス聲を流かすめて、一つしやくつて、頬被りから突出す頤に凄味を見せた。が、一向に張合なし……對手は待てと云はれたまゝ、破れた暖簾に、ソヨとの風も無いやうに、ぶら下つた體に立停つて待つのであるから。

「何處へ行く、」

黙つて、じろりと顔を見る。

「何處へ行くかい。」

「え、宅へ歸りますでございます。」

「家は何處だ。」

「市ヶ谷田町でございます。」

「名は何てんだ、……」

と調子を低めて、すつと摺寄り、

「恠う言ふとな、大概生意氣な奴は、名を聞くんなら、自分から名告れと、手数を掛けるのがお極りだ。……俺はな、お前の名を聞いても、自分で名告るには及ばない身分のもんだ、可いか。

其の筋の刑事だ。分つたか。」

「え、旦那で在らつしやいますか。」

と、破れ布子の上から見ても骨の觸つて痛さうな、瘦せた胸に、ぎしと組んだ手を解いて叩頭をして、

「御苦勞様でございます。」

「む、御苦勞様か。……だがな、餘計な事を言はんでも可い。名を言はんかい。何てんだ、と聞いているんぢやないか。」

「進藤延」と申します。」

「何だ、進藤延一、へい、變に學問をしたやうな、ハイカラな名ぢやねえか。」

と言葉じりもしどろに成つて、頤を引込めたと思ふと、をかしく悄氣たも道理こそ。刑事と威した半纏着は、其の實町内の若いもの、下塗の欣八と云ふ。此は又學問をしなうな兄哥が、二七講の景氣づけに、縁日の夜は縁起を祝つて、御堂一室處で、三寶を据ゑて、頼母子を營む、…世話方で居残ると…お燈明の消々時、フト魔が魅したやうな、髮蓬に、骨齡なりとあるのが、鰐口の下に立顯れ、ものにも事を缺いた、斷るにも一寸口實の見當らない、蠟燭の燃えさしを授けて貰つて、消えるが如く門を出たのを、ト伸上つて見て居た奴。

「棄てては置かれませんかよ、申戯ぢやねえ。あの、魔ものめ。御本尊にあやかつて、めらくと背中火を背負つて歸つたのが見えませんか。以來、下町は火事だ。僥倖と、山の手は静かだつたが最後、直ぐに番町は黒焦さね。私が一番生捕つて、御覽じろ、火事の卵を硝子の中へ泳がせて、追付け金魚の看板をお目に懸ける。……」

「眞個、懸念無量ぢやよ。」と、當御堂の住職も、梓眼鏡を揺ぶらるゝ。  
講親が、

「欣八、抜かるな。」

「合點だ。」

四

「あゝ、旨いな。」

煙草の煙を、すばくと吹く。溝石の上に腰を落して、打坐りさうに蹲みながら、銜へた煙管の吸口が、カチ／＼と齒に當つて、歪みなりの帽子が、ふらくと成る。……

夜は更けたが、寒さに震へるのではない、骨まで、ぐなぐに酔つて居るので、唯もすると倒りさうに成るのを、路傍の電信柱の根に縋つて、片手喫しに立續ける。

「旦那、大分いけますねえ。」

膝掛を引抱いて、せめて其にでも暖りたさうな車夫は、値が極つて此から乗らうとする酔客が、一寸一服で、提灯の灯で吸ふのを待つ間、氷の如く堅く成つて、催促がましく脚と脚を、霜柱に摺合せた。

「何？大分いけますね……とおいでなさると、お酌が附いて飲んでるやうだが、酒は最う澤山だ。此の上は女さね。えゝ、何うだい、生酔本性違はずで、間違の無い事を言ふだらう。」

「何ならお供をいたしませう、えゝ、旦那。」

「お供だ？ 何處へ。」

「お馴染様でございませあね。」

「馬鹿にするない、見附で外濠へ乗替へようと云ふのを、ぐつすり寐込んで居て、眞直ぐに運ばれてよ、閻魔だ、と怒鳴られて驚いて飛出したんだ。お供もないもんだ。此處を何處だと思つてゐる。」

「電車が無いから、御意の通り、高い車賃を、恐入つて乗らうと云ふんだ。家數四五軒も轉がして、はい、然やうならば阿漕だらう。」

口を曲げて、看板の灯で苦笑して、

「先づ、……極めつけたものよ。當人慙う見えて、其の實方が分りません。一體、右側か左側か。」と、とろりとして星を仰ぐ。

「大木戸から向つて左側でございませ、へい。」

「扱は電車路を突切つたな。其のまゝ引返せば可いものを、何の氣で渡つた知らん。」と眞に成つて打傾く。

「車夫、車夫ツて、私をお呼びなさりながら、横なぐれにおいでなさいました。」

「……夢中だ。餘程まるつたらしい。素敵に長い、ぐらくする橋を渡るんだと思つたつけ。あ

あ、酔つた。しかし可い心持だ。」とぐつたり俯向く。

「旦那、旦那、さあ、もう召して下さい、……申戲ぢやない。」

と半分呟いて、石に置いた看板を、ト乗掛つて、ひよいと取る。

鼻の前を、其の燈が、暗がりにはスツと上ると、ハツ噓、醉漢は、細い籬の嵌つた、どんより黄色な魂を、口から拔出されたやうに、ぼかんと仰向けに目を明けた。

「あゝ、待つたり。」

「燃えます、旦那、提灯を亂暴しちや不可ません。」

「貸しなよ、最う一服吸附けるんだ。」

「燐寸を上げませあね。」

「味が違ひます……酔覺めの煙草は蠟燭の火で喫むと極つたもんだ。……だが……心意氣があるなら、鼻紙を引裂いて、行燈の火を燃して取つて、長羅字でつけてくれるか。」

と中腰に立つて、煙管を突込む、雁首が、ぼつと大きく映つたが、吸取るやうに、ばつたりと紙に成る。

「消した、お前さん。」

内證で舌打。

霜夜に芬と香が立つて、薄い煙が濛と立つ。  
「車夫。」

「何ですえ。」

「……宿に、桔梗屋と云ふのがあるかい、——何處だね。」

「ですから、お供を願ひたいんで、へい、直き其處だつて旦那、御冥加だ。御祝儀と思召して一つ暖まらしておくんないまし、寒くつて遣切れませんや。」と故とらしく、がちく。

「雲助め。」

と笑ひながら、

「市ヶ谷まで雇つたんだ、賃錢は遣るよ、……車は要らない。其のかはり、蠟燭の燃えさしを貰つて行く。……」

五

さて酔漢は、山鳥の巢に騒見く、梟と云ふ形で、最一度線路を渡越した、宿の中ほどを格子摺れに伸しながら、染色も同じ、桔梗屋、と描いて、風情は過ぎた、月明りの裏打をしたやうに、横店の電燈が映る、暖簾をさらりと、肩で分けた。よし此處とても武藏野の草に花咲く名所とて、

廂の霜も薄化粧、夜半の凄さも狐火に溶けて、情の露と成りやせむ。

「若い衆、」

「入しやい！」

「遊ぶぜ。」

「難有う様で、へい、と前掛の腰を屈める、揉手の肱に、ピンと刎ねた、博多帯の結目は、赤坂奴の髻と見た。

「振らないのを頼みます。雨具を持たないお客だよ。」

「丁とな、」

と唐棧の胸を劃つて、

「胸三寸。……へ、へ、へ、お古い處、お馴染効でございます、へ、へ、へ、お上んなはるよ。」

帳場から、

「お客様ア。」

満更でない蹺音で、丁々と踏む梯子段。

「入らつしやい。」と……水へ投げて海津を掬ふ、潑刺とした聲なら可いが、海綿に染む泡波の如く、投げた齒に舌のねばり、どろんとした調子を上げた、遣手部屋のお媼さんと云ふのが、茶漉



に蕎麥切を搦ませた、遣放しな立膝で、お下りを這曳いたらしい、さめた饅頭を、くちやくと啜る處——

横手の衝立が稻塚で、火鉢の茶釜は竹の子笠、唯見ると暖麵蚯蚓の如し。惟れば嘴の尖つた白面の狐が、古蓑を裯襦で、尻尾の棲を取つて顯れさう。

時しも颯と夜嵐して、家中穴だらけの障子の紙が、はらくくと鳴る、霰の音。

勢 辟易せざるを得ずで、客人ぎよつとした體で、足が窘んで、其のまゝ欄干に凭懸ると、一小間抜けたのが、おもしろに打たれて、ぐらくくと震動に及ぶ。

「わあ、助けてくれ。」

「お前さん、可い御機嫌で。」

とニヤリと口を開けた、お媼さんの齒の黄色さ。横に小楊枝を使ふのが、つぶくと入る。

若い衆飛んで来て、腰を極めて、爪先で、つい、

「一寸、此方へ。」

と古疊八疊敷、狸を想ふ真中へ、性の抜けた、べろくの赤毛氈。四角でもなし、圓でもなし、

眞鍮の獅噛火鉢は、古寺の書院めいて、何と、灰に刺したは杉の割箸。

此奴を杖と云ふ體で、容は、箸を割つて、腕を張り、擬勢を示して大胡坐に控と成る。

「え、。」

と早口の尻上りで、若いものは敷居際に、梯子段見通しの中腰。

「お馴染様は、何方様で……へ、つ、つい、お見外れ申しましてございまして、へい。」

「馴染はないよ。」

「御申戯を。」

「真個だ。」

「では、其の、へ、つ、つ、」

「何が可笑しい。」

「否、其の、お古い處を……お馴染効でございまして、一寸お見立てなさいまし。」

彼は胸を張つて顔を上げた。

「其奴は嫌ひだ。」

「もし、野暮なやうだが、またお慰み。日比谷で見合と申すのではございませぬ。」

「飛んだ見違へだぜ、氣取るものか。一ツ大野暮に我輩、此家のおいらんに望みがある。」

「お名ざしで？」

「悪いか。」

「結構ですとも、お古い處を、お馴染効でございまして。……」

六

對方は白露と極つた……桔梗屋の白露、お職と言ふ。……遣手部屋の蚯蚓を思へば、什麼か、狐塚の女郎花。

で、此の名ざしをするのに、客は妙な事を言つた。

「若い衆、註文と云ふのは、お照しだよ。」

「へい。」

「内に、居るだらう。」

「お照しが居りますえ？」

と解せない顔色。

「そりや、無いことはございませんが、」

「祕すな、尋常に顯せる。」と眞赤な目で睨んで言つた。

「何も祕します事はございせん、ですが御覽の通り、當場所も疾の以前から、恚やうに電燈に成りました。……ひきつけの遊君にお見違へはございせん。別して、貴客様など、お目が高く

つて在らつしやいます、へい、えッへ、。尤も、其の、些と彼方へ、と成りまして、お望みとありますれば、」

「だから、望みだから、お照しを出せよ。」

「其は、お照しなり、行燈なり、如何やうともいたしますんで、兎に角、……夜も更けて居ります事、遊君の處を、お早く、何うぞ。」

と、ちらりと遣手部屋へ目を遣つて、此奴、お荷物だ、と仕方で見せた。

「分らないな。」

と煙管を突込んで、ばつたり置くと、赤毛氈に、ぶくくして、擬印傳の煙草入は古池を泳ぐ體也。

「女は蠟燭だと云つてるんだ。」

お媼さんが突掛け草履で、片手を懐に、小楊枝を襟先へ挿しながら、いけぞんざいに炭取を跨いで出て、敷居越に立つたなり、汚點のある額越しに、じろりと視て、

「遊君が綺麗で柔順しくつて持てさいすりや言種はないんぢやないか。遅いや、ね、お前さん。」

と一ツ叱つて、客が這奴言はうで擡げた頭を、しやくつた頤で、無言で壓着けて、

「お勝どん、」と空を呼ぶ。

「へーい。」

途端に、がらくと鼠が騒いだ。……天井裏で聲がして、十五六の當の婢は、何處から顯れたか、煤を繋いで、其の天井から振下げたやうに、二階の廊下を、凡そ眠いと云つた佛頂面で、ちよろりと來た。

「白露さん、……お初會だよ。」

「へーい。」

夢が裏返つた如く、くるりと向うむきに成つて、又ちよろり。

「旦那此方へ、……丁どお座敷がございます。」

「待て、」

と云つたが、遣手の劍幕に七分の恐怖で、煙草入を取つて、やツと立つと、……まだ酔つて居る片膝がぐたりとのめる。

「蠟燭は何うしたんだ。」

「何も御會計と御相談さ。」と、ずつきり言ふ。

……彼は、苦い顔で立上つて、勿論廣くはない廊下、左右の障子へ突懸るやうに、若い衆の背中を睨んで、不服らしくすんく通つた。

か、部屋へ入ると、廊下を背後にして、長火鉢を前に、客を待つ氣構への、優しく白い手を、しなやかに鐵瓶の蔓に掛けて、見るとも見ないともなく、ト繪本の讀みさしを膝に置いて、膚薄さうな縮緬。撫肩の懷手、すらりと襟を迂らした、紅の襦袢の袖に片手を包んだ頤深く、清らかな耳許すつきりと、湯上りの紅絹の糠袋を皓齒に嚙んだ趣して、頬も白々と差俯向いた、黒縞子冷たき雪なす頸、此が白露かと、一目見ると、後姿でゾツとする。――

「河、原、と書くんだ、河原千平。」

やがて、帳面を持つて出直した時、若いものは、軸で、一寸耳を搔いて、へ、へ、と笑つた。

「貴客、眞個の名を聞かして下さいませ。」

犬を料理さうな卓子臺の陰ながら、膝に置かれた手は白し、凝と視られた瞳は濃し……

思はず情が五體に響いて、其の時言つた。

「進藤延……造兵の……技師だ。」

七

本蕪葛

「慙う云ふ事をお話し申した處で、眞個にはなさりますまい。第一そんな安店に、容色と云ひ氣質と云ひ、名も白露で果敢ないが、色の白い、美しい婦人居ると云つては、それからが嘘らしく

聞えるでございませう。

其の上、癡言を吐け、とお叱りを受けようと思ひますのは、娼妓で居て、宛然、其の婦が素地の處女らしいのでございます。え、他の仁には先づ兎に角、私だけには眞個でございました。

尙ほ怪しいでございませう……分けて、旦那方は御職掌で、人一倍、疑り深く在らつしやいませから。」

一言づつ、呼吸を吐くと、骨だらけな胸がびくびく動く、其處へ節くれだつた、爪の黒い掌を岸破と當てて、上下に、調子を取つて、聲を揉出す。

佐内坂の崖下、大溝通りを折込んだ細路地の裏長屋、棟割で四軒だちの尖端で……崖うらの畝畝坂が引窓から雪隠れ込みさうな掘立一室。何にも無い、疊の摺割けたのがじめくくと、蒸れ濕つた其の斑が、陰と明るみに、黄色に鼠に、雑多の蟲虻の湧いて出た形に見える。葉鐵落しの灰の濡れた箱火鉢の縁に、じりりと燃える陰氣な蠟燭を、舌のやうになめらかして、悄乎と蒼ざめた、髪の毛の蓬なのが、此の小屋の……ぬしと言ひたい、墓から出た状の進藤延一。がつしと又胸を絞つて、

「であります、餘りお疑ひ深いのも罪なものでございます。」  
と、もの言ふ都度、肩から暗く成つて、蠟燭の灯に目ばかりが希代に光る。

「疑ふのが職業だつて、そんな、お前、狐の性ぢやあるまいし、第一、僕は其のね、何も本職と云ふわけぢやないんだよ。」

と何故か弱い音を吹いた……差向ひをすり下つて、割膝で畏つた半纏着の欣八刑事、風受けの可い勢に乗じて、土蜘蛛の穴へ深入り及んだ列卒の形で、肩ばかり聳やかして弱身を見せじと、擬勢は示すが、川柳に曰く、鍔塗りの形に動く雲の峰で、蠟燭の影に蟠る魔物の目から、身體を遮りたさうに、下塗の本體、頻に手を振る。……

「可いかね、一寸岡引つて、身輕な、小意氣な處を勤めるんだ。此のお前、しつきりなし火沙汰の中さ。お前、焼跡で引火奴を捜すやうな、變な事をするから、一つ素引いて見たまでのもんさね。直ぐにも打縛りでもするやうに、お前、眞劍に成つて、明白を立てる……ッて言はあ。勿論、何だ、御用だなんて威かしたには威しましたさ、そりや發奮と云ふもんだ。

明白を立てます立てますッて、此處まで連れて來るから、途中で小用も出來ずさね、早い話が、隣家は空屋だと云ふし、……」

と、頬被のまゝで、後を見た、肩を引いて、

「一軒隣は按摩だと云ふぢやねえか。取附きの相角がおでん屋だつて、くわつと飲んだやうに一景氣附いたと思や、夫婦で夜なしに出て、留守は小兒の番をする下性の悪い爺さんだと言はあ。」

早い話がぢや、此の一棟四軒長屋の眞暗な圖體の中に、……」

と鏝を塗つて、  
「まあ、可やね、お前、別にお前、怪しいたツて、何も、ねえ、まあ、お互に人間に變りはねえんだから、すぐに然やうならにしようと思つた。だけれど、話の口明が、宿の女郎だ。おまけに別嬪と来たから、早い話が。」

「でまあ、其の何だ、私も素人ぢやねえもんだから、」

と目潰しの灰の氣さ。

「一ツ詮索をして歸らう、と居坐つたがね、……氣にしなさんな。別にお前の身體を裏返しにし、綺麗に洗ひだてをしようと思ふんぢやねえ。可いから、」

と云ふ中にも、じろりと視る、そりや光るわ、で鏝を塗つて、

「大目に見て遣ら。ね、早い話が。僕は歸るよ、氣にしなさんな。」

「え、否、私の方で、氣にしない次第には參りません。」

欣八、ぎよつとして、

「然うかね、……はてね。……トオカミ、エミタメはどんなものだ。」と字は孔明、琴を弾く。

「で、其の初會の晩なぞは、見得に技師だつて言ひました。が、私は其の頃、小石川へ勤めました鐵砲組でございませうが、」

「あ、造兵かね、私の友達にも四五人居るよ。中の一人は、今夜もお不動様で一所だけ。然うかい、其奴は頼母しいや。」と欣八聊か色を直す。

「見なさいます通りで、我ながら早や恚やうに頼母しくなさ過ぎます。尤も、車夫の看板を引抜いて、肩で暖簾を分けながら、遊ぶぜ、なぞと酔つた晩は、そりや威勢が可うがした。」

と投首しつ、又吐息。ちつと灯を瞻つたが、  
「處で、肝心の其の燃えさしの蠟燭の事でございませう。」

嘘か、眞かは分りませせん。豫て、牛鍋のじわゝ酒に、夥間の友だちが話しました事を、——其の大木戸向うで、蠟燭の香を、芬と醉爛れた、此處へ、其の腦へ差込まれましたために、ふと好みな心が、火取蟲と云つた形で、熱く羽ばたきをしたのでございませう。

内には柔しい女房もございませう。別に不足と云ふでもなし、……宿へ入つたと云ふものは、唯蠟燭の事ばかり。でございませうから、壓附けに、勝手な婦を取持たれました時は、馬鹿々々し

いと思ひましたが、因果と其の婦の美しさ。  
成程、桔梗屋の白露か、玉の露でも可い位。

けれども、樓なり、場所柄なり、……餘り綺麗なので、初手は物凄かつたのでございます。が如何にも、其の病氣があるために、——此の容色、三絃も一寸響く腕で——蹴ころ同然な掃溜へ落ちて居ると分りますと、一夜妻の此の美しいのが……と思ふ嬉しさに、……今の身で、恥も外聞もございませぬ。筋も骨もとろくと蕩けさうに成りました。……

枕頭の行燈の影で、え、其の婦が、二階廻しの手にも投遣らないで、寝巻に着換へました私の結城木綿か何か、ごつくしたのを、絹物のやうに優しく扱つて、袖疊にして居たのでございます。

部屋着の腰の巻帯には、破れた行燈の穴の影も、蝶々のやうに見えて、ぞくりとする肩を小夜具で包んで、恍惚と視て居ますと、疊んだ袖を、一つ、スーと扱いた時、袂の端で、指尖を留めましたがな。

横顔がほんのりと、濡れたやうな目に、柔かな眉が見えて、

貴方は御存じね——

延一は続け状に三つばかり、しやがれた咳して、

「私に、残らず自分の事を知つて居て来たのだらうと申しまして、——頂かして下さいな、手を入れますよ、大事ござんせんか——」

と念を押して、其の袂から、抜いて取つたのが、右の蠟燭でございます。」

「へい、」と欣八は這身に乗り出す。

「が、其の美人。で、玉で刻んだ獨鈷か何ぞ、尊いものを持つたやうに見えました。遣手も心得た、成りたけは隠す事、それと言はずに逢はせた、と慥う私は思ふ。……」

——何方の御蠟でございますの——

又、然う訊くのがお極りだと申します。……三度のもの、湯水より、蠟燭でさへあれば、と云ふ中にも、其の婦は、新のより、燃えさしの、其の燃えさしの香が、何とも言へず快い。

其の燃えさしもでございます。

一度、神佛の前に供へたのだ、と持つ手もわななく、體を震はして喜ぶんだ、と豫て聞いて居りましたものでございますから、其の晩は、友達と銀座の松喜で牛肉をした、か遣りました、其の口で、

——水天宮様のだ、人形町の——

と申したでございます。電車の方角で、フト思ひ付きました。銀座には地藏様もございしますが、

一言で、誰も分るのをと思ひましてな。え、……」  
とじろくくと四邊を眇す。

欣八は同じやうに、きよろくと頭を振る。

九

「お聞き下さい。」

と瘦せた膝を痛さうに、延一は居直つて、

「豫て噂を聞いたから、おいらんの土産にしようと思つて、水天宮様の御蠟の燃えさしを頂いて来たんだよ、と申しますと、端然と居坐を直して、其のふつくりした乳房へ響くまで、身に染みて、鳩尾へはつと呼吸を引いて、

——まあ、嬉しい——

と丁と取つて、蠟燭を頂くと、然も其の尊さに、生際の曇つた白い額から、品物は輝いて後光が射すやうに思はれる、と申すものは、婦の氣の入れ方でございまして。

何うでございませう。此が直き近所の車夫の看板から、今しがた煙草を吸つて、酒粘りの唾を吐いた火の着いて居た奴ぢやございませうまいか。

なんぼでも、然うまで真に成つて嬉しがられては、灰吹を叩いて、舌を出すわけには参りませぬ。

實は、と其の趣を陳べて、堪忍しな、出來心だ。其のかはり、今度は成田までもわざく出向くから、と申しますと、婦が莞爾して言ふんでございませう。

此ほどまでに、生命がけで好きなんですもの、何處の、何うした蠟燭だか、大概は分ります。

一度燃えたのですから、其の香で、消えてから何のくらの経つたかが知れますと、伺つた路順で、

下谷だが浅草だが推量が付くんです。唯今下すつたのは、手に取ると、すぐに直き近い處だとは

思ひました、……では、大宗寺様のかと存じましたが、召上つた煙草の粉が附着いて居ますし、

御縁日ではなし、かたぐ悪戯に、お欺ぎだとは知つたんですが、お初會の方に、お怨みを言ふ

のも、我儘と存じて遠慮しました。今度ツからは、たとひ私をお誑しでも、蠟燭の嘘を仰有ると

眞個に怨みますよ、と優しい含聲で、ひそくと申すんで。

最う、實際嘘は吐くまい、と思つたくらるでございませう。

部屋着を脱ぐと、緋の襦袢で、素足がちらりとすると、ふツ、と行燈を消しました。……底に

温味を持つたヒヤリとするのが、酒の湧く胸へ、今にもいゝ薫で颯と絡はるかと思ふと、然うでないのです。——

カタ／＼と暗がりて簞笥の抽斗を開けましたかな。

——水天宮様のお目に掛けませう——

然う云つて、柔らかな膝の衣摺れの音がしますと、燐寸を燈と摺つた。

「はあ、」

と欣八は、其の燈とした……瞬きする。

「で、朱塗の行燈の臺へ、蠟燭を一挺、燃えさしに火を點して立てたのでございます。」

と熟と瞻る、と此處の蠟燭が眞直に、細りと灯が据つた。

「寂然として居りますので、尋常のぢやない、何となく其の暗い灯に、白い影があるらしく見えました。」

此は、下谷の、此は虎の門の、飛んで雜司ヶ谷のだ、いや、つい大木戸のだと申して、油皿の中まで、十四五挺、一ツづ、消しちや頂いて、それで一ツづ、生々とした香の、煙……と申して不思議にな、一つ色ではございません。稻荷様のは狐色と申すではないけれども、大黒天のは黒く立ちます……氣がいたすのでございます。少し茶色のだの、薄黄色だの、曇つた淺黄がございましたり。

其の燃えさしの香の立つ處を、睫毛を濃く、眉を開いて、目を恍惚と、何と、香を散らすまい、

煙を亂すまいとするやうに、掌で蔽つて餘さず嗅ぐ。

此が藥なら、身體中、一筋づ、黒髪の尖まで、血と一所に遍く膚を繞つた、と思ふと、くすぶりもせずに尙ほ冴える、其の白い二の腕を、緋の袖で包みもせずに、……」

「時に……」

と延一は、ギクリと胸を折つて、抱へた腕なりに我が膝に突伏して、カツ／＼と咳をした。

十

其の臉に朱を灌ぐ……汗の流るゝ額を拭つて、

「……時に、其の枕頭に行燈に、一挺消さない蠟燭があつて、寂然と間を照して居りますんでな。

——彼は——

——水天宮様のお蠟燭です——

と二つ並んだ其の顔が申すんでございます。灯の影には何が映るとお思ひなさる、……氣に成ること夥しい。

——消さないかい——



——堪忍して——

是非と言へば、さめくと、名の白露が姿を散らして消えるばかりに泣きますが。推量して下  
さいまし、愛想盡しと思ふがまよ、鬼だか蛇だか知らない男と一つ處……せめて、神佛の前で  
輝いた、あの、光一ツ暗に無うては恐怖くて死んで了ふのですもの。もし、氣に成つたら、貴方  
ばかり目をお瞑りなさいまし。——と自分は水晶のやうな黒目勝のを、すつきり睜つて、——晝  
さへ遊ぶ人がござんすよ、と云ふ。

可し、神佛もあれば、夫婦もある。蠟燭が何の、と思ふ。其の蠟燭が滑々と手に觸る、……扱  
帯の下に五六本、襟の裏にも、乳の下にも、幾本となく忍ばしてあるので、ぎよつとしました。  
残らず、一度は神佛の目の前で燃え輝いたのでございませう、……中には、口にするのも憚る、  
荒神も少くはありません。

ばかりでない。果ては、其の中から、別に、綺麗な繪の蠟燭を一挺抜くと、其へ火を移して、  
銀簪の耳に透す。先づ何うするとお思ひなさる、……後で聞くと此の蠟燭の繪は、其の婦が、  
隙さへあれば、自分で割青のやうに縫針で彫つて、彩色をするんださうで。其は見事でございま  
す。

又髪は、何十度逢つても、姿こそ服装こそ變りますが、何時も人柄に似合はない、あの、仰向

けに結んで、緋や、淺黄や、絞の鹿の子の手絡を組んで、黒髪で卷いた芍薬の苔のやうに、真中  
へ簪をぐいと挿す、何轉進とか申すのにはかり結ぶ。

何と繪蠟燭を燃したのを、簪で、其の鬚の真中へすくりと立てて、烏羽玉の黒髪に、ひらく  
と篝火のひらめくなり、右にも成れば左にも成る、寝返りもするのでございます。

——恚うして可愛がつて下さいますなら、私や死んでも本望です——

と此で見えるくらの又、白露の其の美しさと云つてはない。が、如何な事にも、心を鬼に、爪を  
鷲に、狼の牙を嚙鳴らしても、森で丑の時參詣なればまだしも、あらたかな拜殿で、巫女の美女  
を虐殺しにするやうで、笑醫に指も觸れないで、冷汗を流しました。……

それから惱亂。

因果と思切れません……が、

——まあ嬉しい——

と云ふ、あの、容子ばかりも、見て生命が續けたさに、實際、成田へも中山へも、池上、堀の  
内は申すに及ばず。——根も精も續く限り、蠟燭の燃えさしを持つては通ひ、持つては通ひ、身  
も裂き、骨も削りました。

昏んだ目は、晝遊びにさへ、其の燈に眩しいので。——

手足の指を我と折つて、頭髮を掴んで身悶えしても、婦は寝るのに蠟燭を消しません。度かさなるに従つて、數を増し、燈を殖して、部屋中、三十九本まで、一度に、神々の名を誦かして、そして、黒髮に繪蠟燭の、五色の簪を燃して寝る。

其の媚かしさと申すものは、暖かに流れる蠟燭より前に、見るものの身が泥に成つて、熔けるのでございます。忘れません。

因果と業と、早や此の體に成りましたれば、揚代處か、宿までは、杖に縫つても呼吸が切れるのでございませう。所詮の事に、今も、婦に遣はします氣で、近い處の縁日だけ、蠟燭の燃えさを御合力に預ります。即ち此でございませう。」

と袂を探つたのは、こゝに灯したのは別に、先刻の二七の其であつた。

犬の頻に吠ゆる時――

「で、扱此を何にいたすとお思ひなさいませ。懺悔だ、お目に掛けるものがある。」

「大變だ、大變だ。何だつて和尚さん、奴も其までに成つたんだ。氣の毒だと思つて其の女かくれたんだらうね、緋の長襦袢を何うだらう、押入の中へ人形のやうに坐らせた。胴へは何を入れたかね、手も足もないんでさ。顔がと云ふと、やがて人ぐらゐの大きさに、何十挺だか蠟燭を固めて、つるりと矢張蠟燭を塗つて、細工をしたんで。そら、燃えさしの處が上に成つてるから、ぼ

ちぼち黒く、女鳴神ツて頭でさ。色は白いよ、凄いよ、お前さん、蠟燭なもの。

私あ反つたねえ、押入の中で、ぼうとして見えた時は、――其をね、しなくと引出して、膝へ横抱きにする……と何うです。

缺火鉢からもぎ取つて、其の散髪見たいな、蠟燭の心へ、火を移す、ちろくと燃えるぢやねえかね。

ト舌は赤いよ、口に締りをなくして、奴め、ニヤくとしながら、又一挺、最う一本、だんだんと火を移すと、幾筋も、幾筋も、ひよろくと燃えるのが、揃み合つて、空へ立つ、と火尖が伸びる……恚う成ると可恐しい、長い髪の毛の眞赤なのを見るやうですぜ。

見るく、お前さん、人前も構ふ事か、長襦袢の肩を兩脇へ卷込んで、汝が着るやうに、胸にも脛にも揃みつけたわ、裾がするくと疊へ曳く。

自然とほてりがうつるんだつてね、火の燃える蠟燭は、女のぬくみだツさ、奴が言ふ、……可うがすかい。

頬邊を窪ますばかり、齒を吸込んで附着けるんだ、串戯ぢやねえ。

や、少時、魂が遠く成つたやうに、靜として居ると思ふと、襦袢の緋が颯と冴えて、揺れて、靡いて、蠟に紅い影が透つて、口惜いか、悲いか、可哀なんだか、ちらくと白露を散らして泣

く、そら、とろ／＼と煮えるんだね。嗅ぐさ、お前さん、べろ／＼と舐める。目から蠟燭の涙を垂らして、鼻へ傳はらせて、口へ垂らすと、せい／＼肩で呼吸をする内に、ぶる／＼と五體を震はす、と思ふとね、横倒れに成つたんだ。さあ、七顛八倒、で沼見たいな六疊どろ／＼の部屋を轉摺り廻る……炎が擽んで、青蜥蜴の腕打つやうだ。  
私あ夢中で逃出した。——突然見附へ駈着けて、火の見へ駈上らうと思つたがね、まだ田町から火事も出さずさ。

何しろ馬鹿だね、馬鹿も通越して居るんだね。」

お不動様の御堂を敲いて、夜中に此の話をした、下塗の欣八が、

「だが、いゝ女らしいね。」

と、後へ附加へた了簡が悪かつた。

「欣八、氣を附けねえ。」

「顔色が變だぜ。」

友達が注意するのを、アハ、と笑消して、

「女がボーッと來た、下町ア火事だい。」と威勢よく云つて居た。が、ものの三月と經たぬ中に此のべらぼう、唯一人の女房の、寝顔の白い、緋手絡の圓鬚に、蠟燭を突刺して、じり／＼と燃し

て火傷をさした、其から發狂した。

但し進藤とは違ふ。陰氣でない。縁日とさへあれば何處へでも押掛けて、鍍塗の變な手つきで、來た／＼と踊りながら、

「蠟燭をくんねえか。」

怪むべし、其の友達が、續いて——また一人……

參宮日記

森の俚謡 吃研屋 柳の井 申入れ候 巢籠 小天狗 銀  
 砂子 蛇身の妖婦 一張羅 女郎花 朝霧 三年前 粉蝶  
 黄蜂 かるた 土塀の首 暎の雨 紅茸

森の俚謡

一

「……一志五兵衛どの、もし五兵衛どの……京へござらば言託しよに……か。自然室町絹屋の其處で、其處で絹布の買ひよがござる。白い綸子に孔雀の鳥よ……」

記日宮參

雑木林を奥へ入つた處、伊勢の此の度會郡鼓ヶ嶽の裾に成る、一箇處四五十坪を新しく伐拓いて、山田の物持大福屋宅兵衛——此處が自分の所有地で、志す事があり、一堂を建立する。……まだ半作事で、通りの田圃道から立樹の中を透かすと、恰も小春の時節柄、茸狩に割籠吸筒を開く棧敷でも掛出したやうに見える。組んだまの四方の足代が、や、色を染めた木の葉の、黄色薄紅に彩られて、やがて成就すべき堂の結構を思はせる。

三千枝が太く悄れ返つて、

「實は、……すつと以前ですが、奈良へ修業に行つた事があります。其の時ですがね、毎日、旅

二

で、怠惰けるのかと思ふと然うでもない。一體は何某町に閑靜にしつらへた、大福の控家、一寸別荘づくりに住んで居るので、植木、飛石、石燈籠なども、故と成らず手を入れた、其處の離座敷あたりに籠つても仕事は出来さうな處を、先生、此の雜木林の中が勝手とあつて、堂の柱建が濟んだ頃から、はじめは土間の上へ其の薄縁。——大工、石屋の手間が進んで、床板が張れると、床下から、木材と一所に白木の舞臺へ羅上つたやうな次第。

時間に多少遅速はあつても、毎日別荘から、途中大分の路も厭はないで缺かさず朝の内に、其の鼓ヶ嶽の裾にある森の中へ出張に及ぶ。

これは、恐縮、と大福屋宅兵衛が敬意を表して、取懸り兩三日は、成たけ近い處の然るべき料理茶屋から——却つて迷惑、其の儀は平に、で、三千枝が斷つて辭退するのも肯かないで——晝食の分を仕出して、一寸髪を撫着けて一枚着換へた女中に持たせて、岡持で、膳部を仕事場へ運ばせ、給仕を爲せたものであつた。

其の時は本堂に成る、眞中の床板の上に薄縁を二三枚、……芬と木の香の高い中に、目鼻立ちのきり、とした、色の淺黒い、三十ぐらゐるな男が一人、背廣の上衣を脱いでほか／＼逆上せるほどな午過ぎの日當りに、些と暑いかして、襦衣をぐいと腕捲り、短衣筒服もかなぐり取つた、土方に——皮鯁鮓の粉をまぶしたやうな妙な装で、白地の手拭を一ツ捻つて向う顛巻にした處は、突然駈出すかと忙しさうなが、何が扱て、二見ヶ浦の雲を見るやうな恍惚した顔色して、繪に描いた漣と云ふ形の、くる／＼と捲いた鉤屑に胸を洗はせて長々とした腹這。

片手を頬杖に支いた枕頭に、三尺まはり高さ五尺ばかり、丸火桶に落銅のないやうな、桐のすんど切が、のこんとして据つたのは、是なむ此の男の手練の小刀に刻まれて、御堂の本尊に成らうと云ふ木材である。

木彫家の此の先生、姓は大矢、名を三千枝と云ふ、字で見ると可恐く強さうで、聲で聞くと甚だ優しい。……

至つて懐中の乏しいのが、東京から例の拔參り同様の體で參宮した序、件の大福屋宅兵衛に引留められて、其の客分となつて逗留。夏の末頃から本尊の彫刻に取掛つた。が、掛つたと云ふ名ばかりで、それ、寢轉んだ枕頭に差置いて、御覽の通りで、小刀どころか、まだ荒削りの一すき相鑿の刃も入れず……木は切出したばかり也。

籠屋から、或寺へ通つて、些と自分の仕事をして居ました。

處が、あと五七日も掛らないと、遣掛けた事が濟まないのに、懷中が極めて怪しい。其まで逗留した入費から、残る日数を内々胸算用で、宿の勘定を見積つて、毎日晝間一餉だけ以來抜きにするつもりです。

大分、仕事に忙しいから、晝飯は食ひに歸らないよ、と宿へ言置いて出たは可いが、時分時に成ると何うです、……暢氣さも暢氣な土地で——門前二町餘りも離れた寺へ、宿の女中がお膳を据ゑて、本堂へ運んで來たらうではありませんか。

ぎよツとした、私は。……其ばかりか、あの、森閑とした薄暗い中に、ヅラリと並んで、今にも、ものを言ひさうな繪やら、木像やら、目の光も輝くやうに見て居らるゝ眞中です。しらす干にしたつて腥いものを突つく譯には行きません。仕方なしに門番の爺に頼んで、山門の蔭へ縁臺を出して貰つて、其奴に跨がつて食べたんですが、……勘定が胸に突掛つて、御飯を縦に呑んでも咽喉へ支へた。

其の時の事を思出すので、仕事場へ運んで頂くお膳を見ると悚然とします。眞個お見合せを願ひたい。」

と眞顔で云ふ。

大宅挨拶に困つて、苦笑して、

「奇談やな。」

何もお心任せ、と其から辨當。別荘からは、鶏卵焼に青味などを大に氣取つて、一切綺麗事にして持たせて出すが、當人途中の煮染屋から竹の皮包みを自辨で提げて來て、時々蛸の足の輪切が出る。上衣の衣兜から四合入の饅が顯れて、職人徒輩と車座で、茶漉の着いた五郎八茶碗で冷酒を煽る始末。

始のうちは、何しろ、お旦那大宅が許の賓客。東京から見えた先生とあつて、一所に働いて居る大工、左官、石工なども、三千枝が朝から仕事場に控へるのを、其處に御堂の本尊が活きてましますやうな氣がして、窮屈がつて、憚つて、對坐には割膝で畏つたものであつたが、近頃は其の氣心にも人柄にも隔を置かず親んで、串戯も云へば洒落も言ふ。

「先生、昨夜は。」

などと、ニヤ／＼と笑ふ少いものが居るやうに成つた。

時に、三千枝は、其の木材を前に据ゑて、薄縁の上にごろんと成つて、柄長にスツとした、が、頭に、づんと重みのある、手に撓ふやうな、玄翁で、コト／＼と拍子を取つて。

「……自然、室町絹屋の其處で、ト其處で絹布の買ひ様がござる、白い綸子に孔雀の鳥よ。」

と又俚語を繰返しながら、廻縁の上下に、四五人で、のんきに働く職人徒に呼掛けて、  
 「おい、誰か、間の山の唄と云ふのを知らないかい。」  
 御堂はめきくと抄が行くのに、肝心の御本尊が、木彫の先生の胎に宿つたまゝ、此の様子では十月経つても覺束なささうな處から、何事も承知で居る、わけ知りの宅兵衛。三千枝に催促をせぬは無論の事、餘り一方を抄取らせるのは、何となく三千枝の心を急立てる、仕事をあせらせるに當つて悪い、と云ふ慮り、此の頃は職人の數も少く、小春日の森の中に、石工の鑿の音も、鳥の聲より閑である。

三

「間の山の唄つて、何でござります、先生。」  
 と、正面階の下に蹲んで、五分板に荒削りを掛けて居た木代造と云ふ若いものが、ついと立つた。

「お杉お玉と云ふ名物があるぢやないか。チャンチャラチャンチャラと三味線を弾いて、見物が錢を投げると撥の先でカチリと受ける。昔から評判の伊勢の別嬪よ。黙つてチャンチャラチャンチャラではなからう。何か唄つて居たらうぢやあるまいか。其の唄さ。」と三千枝が聞く。

「然うだねえ、お杉お玉の唄と云つて、別に極つたのは聞かないでござりますね。第一何ですよ、先生、小屋ばかりは矢張り間の山にござりますけれども、近頃では一向興行もしませんで、偶に遣れば演劇の眞似事をしますでなあ。」

「當地でも矢張り然うかい。去年だつて、東京の九段の招魂祭に出る見世物の小屋の中に、例の眞白に塗つたのが、びら／＼の花簪、緋縮緬の蹴出し、赤い緒の雪駄で、並んで腰を掛けて、ばらばら銀貨銅貨の飛んでる繪看板を揚げて、麗々とお杉お玉としたのがあるぢやないか。」

昔から名ばかり聞く。一度見たい見たい、と思つた處へ其れだらう。……名所圖繪に魂が入つて、目の前に拔出したやうに嬉しく成つて、……暗の晩さ。晃々としたアセチリン瓦斯の臭い中を、直ぐに木戸口の幕を潜ると、早く見たいので氣は急ぐし、せつかちと來て居るから、急いで正面へ廻らうと思ふと、いや、つるりと迂つた、……雨上りでな。

又招魂社の祭禮と云ふと希代に降る。……下駄や足駄で泥濘のころもを掛けたやうな勾配の急な床張だから堪りません、此の背廣の圖體で見事に轉んだ。

見物は見物、舞臺に出て居た、怪しげな婦どもまで、一齊に哄と笑ふのよ。  
 其でも、此方は病氣差起りと云ふ、澄ました苦い顔をして、少時立つて居たが、何だらう、詰らない、桂川連理柵が何か遣つて、年増の頬被りをした奴が、娘を負つて、所作ツてら。些と



面當がましくもある……ね、先方の知つた事ぢやないけれども。

何うしたツて名所圖繪のお約束通りには行きさうもないから、匆匆遁出した、尤も眞ものぢやなからうが、何かね、當地でも此の節は芝居の眞似かね。」

「其も偶でなければ遣りませんよ。でもなあ、近い頃までは、三味線を弾いて、其の芝居の間々には、お定りの投銭を撥で受けたものでござります。」

「其の時の唄さ、何を唄ふ。」

と三千枝は向替つて頬杖を支直す。

「土地のものはね、先生。」

と傍から石工が一人、口を出して、

「お杉お玉だと云つて、別に、間の山へ見物に行くものも、土地には小兒だつて居ませんで。然し通りがかりに三味線を聞かない事もござりませんが、唄は何でも、其の時其の時でござりますなあ、(サノサ)が流行ればさのさでな。」

「お前たちは知らねえよ。」

と六右衛門と云ふ爺様が、墨壺の絲を、くるくると捲込みながら、腰の煙草入に、うしろ狀に皺手を掛けて、

「ゆふべ朝の鐘の聲……と云ふ、行基菩薩がおつくりなされた、難有い唄を従前は唄つたものよ。

……先生、一ツござりますよ。」と額の皺で、木の葉を仰ぐ。

「何と云ふ、其は。」と三千枝が半ば起きた。

六右衛門半眼に成つて、

「え。」

と云つて、

「夕、朝の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人ぞなき。花は散りても春は咲く、」と六右衛門、少し氣取つて可哀な聲。

四

唇を嘗めて、ト引結んで、半白の眉の太いのを、もちやくと揺りながら、

「……鳥は古巢へ歸れども、行きて返らぬ死出の旅、野邊の彼方の友とは、金剛界の曼陀羅と、胎藏界の曼陀羅に、血脈一ツに珠數一連……」

木葉が二三枚ひらくと、薄暗に梢から明白の白木の堂の前へ。……三千枝は熟として聞いて居た。

「お難有うござります。」と石工は鑿の手も留めないで、石の粉で白い胸をフツ、と吹きつつ笑つた。

「御明上げられませう……親仁さんうまいもんだ。」

と木代造が茶にして拜む。

左右を、六右衛門じろりと視て、

「此奴等、血氣ぢやに因つて馬鹿にするが、違え事ねえだぞよ。……其處の道理を言うたものぢや。それ、夕、朝の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人ぞなき。……の、お前たちは驚くまいが、もう此れ、私ぐらゐるな年紀に成つて見さつせえ。鐘の音を聞きたびに、早や寂滅と胸へ響く。……」

と胸を掌で壓して六右衛門、からびたる咳をなす。

「狸親仁め。」

と木代造、頭から嚙むやうに、

「先生、化かされては成りませんで。夜さり新道裏を一廻せん事には足が冷えて寝られぬと云ふ寂滅でなあ。此の間も何を嗅出して來たやら、此の頃は是非にお供をして行く事があるだ。何でも先生に引導を渡して貰うて、往生して、寢棺へ大の字に寝てこまそと……」

「これ、これ！」

と親仁苦い顔で、鬚卷を上へ抜く。額に汗が出たのであらう。

「なあ、先生、決して油斷なさりますな。」

「御注意、難有う。」

と三千枝は無造作に頷いて、

「油斷もしないが、覺えはないのさ。」

「覺えあらつしやるまい。何、先生が、新道にお氣に入りなどがあるもので。……私かて、そないな事云ふ、覺え、ほつてもない。」

と六右衛門、片頬ニヤ／＼、と笑を含みながら、片面、可恐しく木代造を横目に掛けて、

「此のよたくれものが、だめばかりこきやあがる。は、は、いや、串戲は退けて、先生今の唄は、はい、間違はござりません。行基様、作ぢやげな、……」

其の行基菩薩と云へば、先生、矢張りお前様のやうに、木彫を上手になされたげで、國々寺々に尊い御木像が多え事あると聞きます。

「いづれ今の、それ唄の心で衆生をお導きなさる、ぢや。……のいた中ではござりませぬ。先生がお刻みなさりますは、何様のお像でござりますかね。……私等、恚うやつて御堂を建てるもの

の身に成りますると、お住居なさります、御本尊は誰方やらと、つい伺ひたうござりますが。大宅の旦那に聞いても、先生に任せたに因つて、一向此の方は心得ぬと言はれます。私等が差出て尋ねまするも、如何なやうなが、豫て思つて居りますのが、ふいと口へ出ましたでな。

先生、お前様お構ひなさりませすば、御本尊が何様で在らつしやりますか、一寸聞かせて下さりやし。此奴等徒も、寄ると觸ると、蔭では其の風説でござりますよ、はい。……」

六右衛門、眞顔に成つて重くるしい。  
三千枝は、俯向いて、額を壓へて聞いて居たが、犇々身に應へたさうで、むツくと起きた。本堂正面の床板へ、しやんと胡坐で開き直つた様子が、物語らむ、と身構へた形に見える。

五

成程、六右衛門が云つた通り、豫て各自が、此の堂の本尊には、佛が成るか、鬼が成るか、其の儀を知らうと心掛けて居たと覺しく、齊しく三千枝を瞻つた。

ト困つたやうな顔をして、  
「さあ、其處だがね。」

と尤らしく打傾いて、腕組をしたは可いが、

「私にも一向分らん。」

と澄まして云つた。

いや、氣のない事は夥しい。

六右衛門、長刀豆の如き指の肚で、粉煙草を捻つて、

「其たが先生、神様だか、佛様だか、何か其の目論見のねえ事はござりますまい。私等働いて居

りますものも、目當の御本尊様がござらつしやると、仕事に張合と云ふが付きますでなあ。」

「其奴は困つたよ。」と又頭を引傾げるのに、顛巻があるので一層張合が抜ける。

「観音、勢至、普賢像、と彫むのに極りが付けば、まあね、半分は、仕事に懸つたも同様なんだ

が、まだ一向に當りがないんだ。眞個、弱つたよ。」

と如何にも洒落ではなく、弱つたらしい口振で、

「初手に大宅が私に誂へる時に、何とか極りを付けてくれると可かつたが、思つた通りのものを

と言ふ、……分つた話だ。此方に一切任かせるのは愉快だと、乗氣に成つて引受けたが、さあ、

慥う、いざと成つて見ると頼る處が些ともない。

凡そ何でも可いと成つた日には、空は都率天から、水には龍宮まである……事も廣大です。其

の纏りの付かない事と云つたら、譬にも云ふ、水の上へ字を書くか、雲を掴へて星に目鼻をつけるやうなものだね。

今更困つたから、何か望んで貰ひたいと、大宅にも泣付かれず……勿論其となく兜を脱いで見せるけれども、餅屋は。

と云ふ。大福は山田に聞えた、赤福餅の本店で、道中、引きも切らぬ参宮道者が草鞋穿で腰を掛ける、且つ御休處で。日毎の繁昌、座敷の奥まで客に明渡す家業なれば、主人が息やすめに別荘がある、三千枝は其處に逗留する。

「……依然として、上座に直して、何なりとも御意次第と来て、まあ、そんな事よりと、盞を獻す。此方も、つい、それ、飲む。

一向、急ぎませぬ、お氣永に、と云ふが、果しがない。氣樂に遊んで居て、催促をされない上に、可い加減お手當があるんだが、何うして、なか／＼頃日ぢや、恚う見えて、此で東京の三十日より餘程苦しい。」

「言ひなさらぬと木代造が笑ふ。

「いや、申戲ではない。實際の處、夜もおち／＼寐ないんだが、何うだらう、君たち何か此は、と云ふ、思ひ付いたものはあるまいか、爺さん年紀の功だが、何うだい。」

六右衛門、ぱツ／＼と蒼く、日向に吹かして、

「大宅の旦那さへ、先生に任せられたものを、眞面目の相談を打たつせえまして、お前様さへ思案に餘るだに、愚味な私等に、へい、何う分別が付きますだ。

此奴等に分るものか、差出て何を聞く、はぐらかして遣れと云ふ了簡で、申戲に言はつしやるなら、私等、一つ此を刻んで見させえまし、と云ふものがあつただけれどもな。」と、こくりと頷きながら、じり／＼と脂を鳴らした。

此を聞くと、三千枝が居直つて、

「む、其の申戲なら、何を刻む。」

「へ、へ、とニヤ／＼。」

「いや、聞かせたよ。おい、爺さん。」

「そんじよ、ものさの、辨天様何うでござりますな。」

### 吃研屋

其でも三千枝は一向眞面目で、

「ぢや、何か、爺さんは辨財天が可いと云ふのか。」と眞に成つて聞返す。

はぐらかした見當が、思懸けない圖に當つて、六右衛門一寸狼狽へ、

「なあ、可からうと思ふが、何うぢやい。」と木代造の顔を眩しさうに見て、眉を動かす。

「然ればなあ。」

「木代造、君は何う思ふ。」と三千枝は又若いものを見向いた。

「へい、……だけれどもなあ、爺さん。」

と六右衛門の方へ返事をすらしして、

「何うだかな、お前の前だが、あれは何だよ、辨天様と云ふ柄では無えねえ……其だと、同じ美

しさは美しさでも、上品で氣高くつて、神々しく、尊くなくちやならないぜ。

些と違ふねえ。慙う、小粹で、婀娜ッぽくつて、凄味がすつと鼻筋から目許へかゝつた處は、

……鬼神のお松だ。」

三千枝が驚いた。

「何だ、鬼神のお松だ。……女盜賊を堂へ祭るか、何か、此の土地ぢや願掛けが叶ふか、禁厭に

でも成るか。」

と間の抜けたほど生眞面目なので、木代造クツクツと肩で笑ひ、

「へい、もし、其さへ出來ますれば大願成就でござります。」

「何だか知らんが、盜賊は氣がないよ。」

「其とも姐己のお百かねえ、質は同じでございます。」

「何の事だい、一體。」

「新道の御眞辰でござります。」と六右衛門、年効のないお爺で、ト手庇で三千枝を仰ぐ。

「あ、馬鹿な。」

と不意を打たれた處を、

「東屋の、お玉さん、先生。」と、木代造が横薙をすかりと入れる。

居合すものが哄と笑つた。

「此奴等、皆な知つて居やがる。」

と三千枝は、凡そ擦つたい、と云つた苦笑ひをして、くるりと背後向きにごろんと寝轉ぶ。と

胸に添つて向うへ投出す手の撓に、握つて持った件の鐵槌で、床板を礎と打つたが、薄べり越の

上、木屑を下敷に敲いたから、ボンと氣の抜けた鈍な音。

「夕、朝の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども聞いて驚く人ぞなき。」

と六右衛門、おふみ様の節で一才唸つて、鼻膏を鋸の柄にぐい、と引き、刃尖を今引いた準墨の目へびたりと當てて、

「さあ、少いもの、些と精出せ、急がぬ仕事でも冥利が悪いぞ……花は散れども春は咲き、鳥は時へ歸れども、——先生は又、晩に新道の時だべいよ。」

三千枝は聞かぬ振して小さな聲で、

「……いろは子供衆は伊勢々々參る、伊勢の長者の茶の木の下で、七ツ小女郎が八ツ兒を産んで、産むにや産れず、おろすにや下りず、……其處どころぢやない。」

とフト口へ出した聲が歎息に成つて、切なさうに、眞俯向に額を壓へて、ぐったり倒れた。

枝が鳴つて、ひらくと小鳥が飛ぶ。

森の外から遙に響いて、

「庖、庖、庖、庖、ン、先づ、ン、ン、カツ、鉋！」

と胸を抉つて血を絞るやうな苦しい聲。

此を聞くと、恰も病人のやうに突伏して居た三千枝が、むくと起きた。暢氣さうに人目には見えながら、氣が苛々して、靜としては居られぬらしい。

「研屋だなあ。」

「え、吃の」と木代造が云つた。

「別荘の邊も時々通るから、私も知つてるが、聞いちや居られん、氣の毒で。」

「すらりと行つとも、庖、鉋、鉋とばかりな其を、先づツ、と突込んで、ん、ん、んと腕いて、

庖、庖、庖、と急つて、庖、庖、カツ鉋——と絞り出す、と鉋は大概消えて、全身に膏汗を流す、吃研屋の彌太八、と云ふ頑固な親仁。」

七

聞くものの胸も支へて、咽喉も塞がりさうに、

「う、うむ、先づ、庖、庖、庖、カツ鉋、鉋！」と叫んで行く。

が、慥うしたなどは、まだ上出来の方で、庖、庖までで行詰つたり、カツカツと唯石塊でも吐出しさうに叫んで、あとは唯、うむ、うむ、と苦しげに唸きながら、其のまゝ一町通過する事がある。

皺噎れた聲を聞いただけでも、大概年紀のほどは想はれる、彌太八は最う六十二三、浮世の鹽の辛いのを人一倍苦く嘗めた、額も頬も皺だらけで、其の皺が堅く成つて突張る。ト口を引結んで、砥石と盥を振分けの荷の、然まででない天秤棒も、瘦せた身體にはめりく應へる。……蚊

脛はしやつきりと外枠に踏張りながら、腰を突飛ばされた如く、ひよこくと小刻みに、檻籠ど  
んつくの背屈みになつて、秋風白き、案山子の夕暮。  
町も、場末の村近な、宮川の岸に添ふ、昔の櫻の渡の邊であらう、寒風の里に屋根暗き、小家  
をさして立歸る。……

貧しき町とて燈を急がす……路地から水へ、——吹くからに尙ほ寒風の里人は、馴れてもさす  
が袖濡らすらし。

古歌の姿の見ゆるぞや。

足を洗ぐに裏へ廻る、背戸へ小半町と云ふ處で、向うから來て、ばつたりと出會頭に、

「やあ、親仁か。」

と聲を掛けたは、背のづんぐりした、大柄の肥體で、色の淺黒い、四十五六。一癖ありさうな、  
目のぎよろりとした漢……黒の中山高を目深に、俗にこのしろと云ふ絲織、悪く光る奴をぞろ  
りと二枚、鐵無地の羽織に、黄金の環の羽織の長紐、白縮緬の前廣帯が、其の重量で弛む……金  
鎖するくで、黄金の指輪を兩方へ分けて四ツまで嵌めた。手の指が其の逞しい身體に相應はず、  
婦の如くすらりとして、可厭に生白くて細いのが、金齒を露顯に、ひたりと尻上りのする、滑に  
して且つ鋭い辯舌。

「今歸るのか、遅いな、欲張るぜ、儲るか。」とからかひ面に、早口で曇み掛ける。

ト吃の彌太八、カッと急いで、日に焼けた面を澁を刷いた如く眞赤になし、目を睜つて、片拳  
犇と握つて、

「う、う、うん、先ヅ、」と息せい張る。

「先づ儲るか。結構だ、結構だ。結構にも何も、お前、羨しいくらなるもんだぜ。」

親仁はがたくと震へるやうに頭を振つて、

「う、ん、う、ん、先ヅ駄目で。」

「何だ、醫師が見離したやうな事を云ふぜ。其奴は大變だ、何の病氣だ、誰が煩つた。」とまくし  
掛ける。

かツかツと愈々急いで、込上げく、

「ん、ん、先ヅ。」とばかりで、額にたらくと汗を流す。

「先づも何もねえ。誰が病氣だよ。匙を投げちや大事だぜ。」

「申、申、申戲……旦、旦、旦、旦那樣。」と漸と云つて吻と呼吸を吐く。

「いや、時に親仁。」

で、キラリと指環を正的に見せて、頤を横撫でにしながら、何か、ゆつくりと言はうとする。

彌太八、此の體を据眼で屹と見ると、天秤をがたりと置いて、地面に蹲み、袂に有つた皺だらけの紙を伸して、古風に腰にさした矢立を抜いた。

八

彌太八、其の鼻紙へ、トヤツた處は、五段目の與一兵衛が千崎に代つた形で、「一」と其へ認むる。

「われら、此の、因果で甚だの吃をば、娘に聞かせ候と、大事なものに吃の言葉がうつつては成らぬゆゑ、遠方からでも聲の聞える處では、口を利き申さず候也。旦那様入り候話なれば、もつと彼方へ。」

と苦い顔して、舊來た辻の方を指しながら、

「然でなければ、お話の模様、成程と思へば合點々々する。違へば頭を振るばかりに願ひたてまつり候。」

とにじり書きに、一字づゝぼつゝ書く。

金齒の漢、上からぎろく〜と目で拾つて、思遣りもない面色で噴飯したが、

「あゝ、此奴は俺が悪かつた。……むゝ、大事な娘が、成程な。あれだけの別嬪を吃にしては事

壞した。いや、分つたよ、親仁。

何、別の事ぢやない、……此の間頼んで置いた短刀の研だが、お前、上手だ、と云ふから、得て然う云ふ連中に限つてな、兎角仕事を怠けて不可い、俺は其の錢金に絲目は着けぬ代りには、又一つ願を撫でて、

「てきばき、もの事が運ばないと了簡の出来ない性分だ。約束には、それ四五日も後れたりよ。今日は是が非でも一番居催促をするつもりで先刻出掛けたがな。仔細なし……丁と出來て居て、仕上げも、ずんと氣に入つた。早速娘が渡してくれてな、此處へ。」

と、めりやすの胸を開けて、懷を大きく、袖を拂つて、一ツ敲き、

「受取つた……其も可しよ。時に研賃は、と聞くと、親仁が留守で分らぬと云はあ。俺が見積りで、一枚擱出して置いて來たがな、お前の勘定より多かつたら、構はねえ、可いか、多かつたら其のまんま取つて置きな。」

彌太八、肩を怒らして固く成つて、先刻から一ツ二ツ面倒らしく領いたが、此の時、じりゝと眉根を寄せて、むづかしい顔して頭を揮つた。

「いんやよ、多分だつて幾干がもんでもない。恚う、決して遠慮しなさんな。又……もしか不足だつたら、可いか、幾干でも、幾何でも言つて來ねえ、右から左り猿が餅だぜ。な、其の話によ



つたらな、望次第よ、可いか、褒美は遣はず、望め、と云ふのだ。……心意氣は五分だつて透かねえが、金子の方は大まかなものよ……大名業だ。

此の邊少く低聲で、襟にさした爪楊枝を抜いて、前歯をせりながら饒舌つたが、ト持直して其の楊枝の尖を見てニヤリとして、

「勿體ねえ、誰が御臺所に内職なんかさせるものだ。親仁、お前にだつて天秤は擔がせねえよ、——分つたか。」

と耳のはたへ、俯向けに口を持つて来た時、怪しからず芬と酒の香がしたので、彌太八ぶるぶると肩を揺つた。

「話しに来ねえ、其の節飲まず、と云つた處で、やた一で、鱈の煮浸だと思ひなはんよ。お茶屋の奥座敷、金屏風の立つた中で、灘の一本木に鯛魚の活きた奴をお魚軒でよ、ちよつぱり山葵を利せて遣らあ。五臟六腑を抉らせるぜ。來なよ……親仁。はッはッはッ、頭を掉つてら。何、可厭なものか、はッはッはッ。見ねえ、まあ、聞いたばかりで嬉しさに震へてけつかる、不便な奴だ。」

いや、又逢はうぜ、親仁、あばよ、休みねえ。」  
奥齒をチヨツと、啣へ楊枝。懐手でつかくと別れ際に、何か後髪を引かれたさうで、肩越に

捻向く。と、むかうへ離れた小店から……父親の歸りを待つて、柳は散つても黒髪長く、此方を見越す娘の顔が、黄昏にほんのり見えた。

トすると、差覗いた其の軒の蜘蛛の巣を拂ふやうに、はらりと蔽うた袴の片袖。  
男に屏風の隔てして、親を招いて靡いたのである。

### 柳の井

#### 九

娘が優しい目迎へに、研屋の彌太八は皺の中で莞爾して、肩も軽さうに、ふら／＼荷を振つて小店の前。

其處に釣した賣り物の草鞋も、小廂から差覗く其の黄昏の佛に、夕顔の實の風情あり。

彌太八は、黙々と唯機嫌よく領いて、何にも言はず、すぐ其の店の傍を我家の羽目板。路地とは云ふが、場末で家並びも齒の抜けたやうな、風のスウ／＼通る、狭い空地を裏口へ廻つて、溝板兼帯板流しを、ぢやば／＼と踏むと、こぼれた瘦せた葉が草鞋に翹まる、一本の柳の許に、吹上げの水、これはまた、五十鈴川の流をチロ／＼、玉の音に立て、揺りこぼす……此のためにこ

そ透通る娘の色の清らかさよ、と頷かる。月も花も手で搦ぶべき井戸がある。  
 吹井の水は、ちよろ／＼小川。すぐに田畝で、見通しに暮れかゝる、が、時に灯の影も釣人の笠もない、堤の櫻がすらく／＼と一ならび、霧に墨繪を描いた向うは、其ぞ、宮川、流れの一瀬で、櫻の渡の跡とかや……此の里の名の寒風に、葉も散り果てて、うら寂しい。  
 井戸端に一人足洗ふ老の形は、ものあはれな、茫とした田と、大川の堤防に對して、いとゞ瘦せて。細い釣棹。振分の荷は宛然餌箱の風情がある。

「うむ。」

と唸るほどの掛聲で、片手桶ざぶりと汲んでは、ぢやぶ……ぢやぶ。  
 其處へ薄暗い水口から、ト髪の艶やかな、鼻筋の通つた、眉の優しい顔を見せた、……名をお米と云ふ——娘は、お納戸と紺のよろけ縞らしい双子か何ぞ木綿物に黒縞子の半襟で、格子の前垂掛、唐縮緬の帯、どれも水を潜つたらしいのが、しつとりと枝振の萩の白い花に露を添へたる趣なり。衣の色も月が映すやう、目と口許に、品威がある。

此の姿にさしむかふ、彌太八の状はまた、鯨に乗つて、宮川の淵に沈んで、水の都に途惑ひした如く、吹上げの其の井戸は、更に龍宮街道の一里塚にも似たるかな。  
 お米は、端緒の弛んだ塗下駄に、爪先を屈めると、土から掘出したと見える、古足駄を片手に

揃へて、井戸端へ持つて出て、親仁の懐中に入りたさうに、胸へ共の房りした手束ねの銀杏返を俯向けて、足許へ丁と直す。  
 此のもの優しい懐かし氣な様子を見ると、目も鼻も一ツに寄せて、

「うむ。」

と云ふのが返事でない。嬉しさと可愛さが下腹へ詰つたので。……氣が入ると、足もしやんと、足駄で天秤を引擔いで、荷箱をがた／＼、彌太八は臺所へ。

お米は脱棄てた草鞋を拾つて、緒と緒を揃めて一扱き、小指を反した結びぶり。此の手にかゝる縁ならば、と見る人あらば羨むべし。

相合傘も何にもない、壁の落ちた羽目板の釘へ、草鞋を干した後姿。さら／＼と湧く玉の井に、二葉三葉柳が散つた。

十

燻つた吊洋燈の下に、娘と取膳で差向ふと、彌太八よつちりと胡坐に成つたが、小皿盛の總茶より、お米の方を嬉しさうに視めて、豫て備附けの紙石盤を、火鉢へ斜違にして書いて見せる。  
 「今日はお前に話して聞かせる土産話がござ候。處で私にも土産がある。是はお前には詰らぬも

のなれども、私には命から二番目のものぢや。……」

と遣つて、股引を脱放した膝頭に、武士の魂、流儀の一腰、引きつけた四合入、半分ぐらゐる残つた酒を、罎ごと平手でポンと敲く。

「まあ、お父さん、いゝものを。」

お米は、膳越しに睫毛濃く、

「何處へ隠して入らした？」

彌太八は同じく石筆にて、

「いや、隠しも何うもせず、口を繩からげにして荷に着けて持つて歸つた。甘いものでないに因つて、お前は目にとめず、鼻でも嗅ぎつけなんたものであらう。」

「はなでもかぎつけぬ。……」

お米は清い目で、白い假名を辿つたが、石盤の縁を向越に、一寸軽く壓へて、

「可厭ねえ、お父さん。」

「はッはッはッ。」と彌太八は干魚が裂けたやうな皺の中で、口を開いて乾干びた笑聲。

「然る處、私は早や戸の外から嗅ぎつけた。」ふん／＼と小鼻を刻み、

「家中、酒の香が芬とするわ此は何うぢやい。お前を私が抱いて寝る頃せびられては語り候、大

江山ではなけれども、鬼が歸つて、人臭いぞ、人臭いぞ、と云ふ處ぢや。何と、山伏、修行者な

んどを、押入の中に隠しては置かぬかの。」

と、些と心にかゝつて、聞かうと思ふが詰るに當つて、娘が氣を傷めては、と先繰りの老の情

で、故と串戯に滑けまじり。

「ふん、ふん、人臭いぞ、いや、酒臭いぞ。」

「意地が汚いわね。」

とお米は何の氣もなう微笑みながら、

「先刻、お爛を付けたんでございますわ。」

「や、爛をしたと申され候や。」と字も四角張つて眉を擡めた。

「あの、私かね、今お店から覗いて居ましたら、お父さん、ぢき其處でお逢ひなすつたでせう。」

「うむ／＼、とだけは地聲で應ける。

「此の間、短刀の研を誂へて行きましたわね。二三度催促に來ましたけれど、お父さんの方で、

未だ出來なかつたでせう。」

「うむ／＼。」

「それだもんですからね、今日は、お店へ來ると、いきなり此間へ上り込んだんですよ。……そ

してね、お父さんの研は、評判の上手だから、然う云ふ人に限つて、昔から、よく仕事を怠ける。悪く思ふのではないのだけれど、屹と研げて居はしなからうから、今日は居催促のつもりで来た。唯居るのは退屈だから、一杯飲みながら待たうと思つて、一本提げて来たつて、然う云ひましてね。

風呂敷から饅頭のお酒を出しましたの。とてもものに、お燗をしてくれ、と云ふんでせう。何ですかね、氣心の知れない人。それだし……あの、だつて、私、困るんですもの。」と袂を引張つて、しなやかに、袖を見る。

申入れ候

十一

お米は仇氣なく、彌太八の顔に、袂から腫を返して、

「お父さんが留守ですから、私、お父さんに聞かなくては、何うして可いんですか分りませんもの。然う言つたんですがね。此の戸棚にござんす、徳利をじろく見て、金齒を出して、ニヤク

笑ひながら、自分で臺所へ持つて行つて、ざあく濯いで来て、そして、自分でお燗を注いで、猪口を出せの、お香の物を刻めのツて言ふんですよ。」

「あの金齒が、うむ。」と呻つて、  
「沙汰の限りな畜生めぢや。」とごしく石筆に力を入れて、其の金齒の畜生へ、田樂刺に棒を入れる。

「仕方がないんですもの、それは出して遣りました。……種々な事を云ふんですよ。此處で生れたのかことの、お母さんは何うしたの、晩のお菜は何だのつて、——私ね、お父さん、可い加減に返事をして、お仕事を、  
と言ふ……内職の臺の上に、楊枝の削りかけが小刀と一所に乗つて、木屑は散らさず、下敷の古新聞に、此の爪紅の手業とて、小浪淡く寄つたやう、——まだ片附けずにあるのを見れば、晩飯が済むと夜業らしい。引窓から吹き込んだか、薄り三日月の射すやうに、一葉青く、楊枝の中へ柳が散つて居て可哀である。

「忙しさうにね、お仕事をして居たんですよ。然うすると、お酌をしてくれと言出したんです。」  
「うむ……鱧の金齒めが、當事もござらぬわ。お前はすつぱりと斷つたぢやな。」

「否、お父さん。」  
腕を張つて、固く成つた彌太八の趣には似ず、もの柔かに、  
「むづかしくね、引搦んだ事を云つて、餘計面倒ですから、二ツ三ツ注いで済まして置きましたわ。」

「や、と抜歯を漏れる、力の無い驚駭の聲を上げると、ホタリと石筆を落したが、腕を鯨子張らせつつ、引握つて、押取つて、

「怪しからぬ事かな、これやい、然うでなうて、からがぢや。近所合壁私の面を見て、お前の噂をするものは、何奴もく、お前に人の酌をさせいと吐す。親の口から言ふではなけれど、地體こなたの其の容色が、今の恚うした所帯から見ると、人の酌をせねば成らぬ人相があつて弱り候。私は其が心配ぢや。」

さて貧乏をすればするほど、こなたの其の人相に、餘計に影がさし候、たとひ此の上、私が煩うて薬一服のまいでも、舌を嚙切つて死んでもぢや、決してく此方に人の慰みの酌はさせぬわい。

處で、晩のめしに酒の爛は爲て貰うても、親の私さへ酌をさせた覚えござなく候につき、向後も其のつもりで、人が何と言はうとも、必ず以て、さやうな事なさるまじく、此の段屹と申入れ

候。うむ、

と又唸つた。

「え、」

と頷いて俯目に悄れて、

「御免なさい。私も困つたんですけれど、何でせう、あの人の顔を見ると、すぐに最う研げて居ますツて渡しました、白鞆があるでせう！ 男がこんなに頼んでも、酌を一つしてくれる事は出来ないので。恥を掻かせたな、と搦むんです。」

尤も、笑ひくですけれどもね。

男にだつて、女にだつて、恥を掻かされては、黙つて引込んで居られない。其のために研がせて持つ、己の魂だつて、然う云つて、あの、短刀をキラリ、

「あッ、あッ、危え。」

と思はず吃る……

「其のね、お父さん、」

お米は今のキラリの時、うつかり氣色ばんで、抜く眞似で、親仁を驚かしたのを極り悪さうに、優しい嬌態。

「研ぎたてのドギ／＼したのを捻くつて見せるんですもの。嚙着かないつて事は分つて居ても、何ですか、針箱の上に守宮が芻ねてるやうで氣味が悪くつて、……それですから密として、逆らはないで、出て去つて貰はうと思つて、つい、あの、私、お酌をして……」

「分つた、分つた。」

と書きながら、癩持らしく、ぶる／＼と頭を掉つて、

「お前が好きで酌をしたとは初手から思ひ申さず候。うむ、氣障な事をする、癩な奴めが、其の様子では、ものに託けて又來うも分らぬわい。何うしてくれう。」

と砂利を嚙んだ體に、乾からびた口を、うむと結んで、お米の顔から始めて、洋燈の灯を山形に家中を舐したが、

「うむ、思ひつけた。三十六計遁げるのが上分別と、大阪方の大軍師、眞田どのも申された。以來、お前一人で留守する時に、あの鱒の金齒が來たら、大手にせい、搦手にせい、其の影ちらりでも見えるを合圖に、城を明渡して遁げるとせい。」

石盤一面一杯に成ると、挫折るやうに拇指でギクリと返して、

「我と我が家を、恚う云ふではなけれども、押入にあるお前が母親の戒名かいた位牌のほか、人に奪られて惜いものは何にもない。」

かきかけた指がぶる／＼と震へると、お米も熟と見たが、ほろりとして背けた顔、露を含んだ菊白く、燭清きばかりなり。

ふと顔を見合せた。

「喃、然うせい、然うせい。さア、いざござは此でサラリ。」

一度、石盤を、ぐいと押退け、手で件の四合燗を指して、黙々……ごま鹽髻の瘦せた顚を動かすと、お米は唯々と云ふ目遣の、肩も撓つた頷きやう。

やがて、土瓶に納つて、途中振られて來た酒も、草臥抜けの湯加減と成る。

樂みさうに横に視めて、彌太八は又石盤を引寄せた。

「處での、お前に約束した土産と云ふのを見せるに付いて、私が此の酒の事を、辛抱して先へお聞きなされるべく、これまでも四五度話いたし候が、今日の晝過ぎ、又、例の上の町へ行く途中、しばらく暇にて人家を離れた、それ、鼓ヶ嶽の下な、あの森の前を通りかゝり候と、古市の餅屋の總本家、大福屋宅兵衛どの新に建立さる、處の御堂にござらつしやる、少い先生様に呼込まれて、鑿を三挺ばかり研いで進めた。」

何が、御自分持料の道具を、梅雨の頃なればとて、錆びさせて置かつしやる、人體ではおはさぬぞ。

此の蒼空の雲白く、砥石も冴えれば、秋の水も澄渡る、鋼鐵に曇りなけれども、私の足を唯留めるも氣の毒と云ふ先生様お心遣ひに候なり。

扱て、何か土地處の話をしながら、私が磨ぐのを見て居ました。

鑿のおもて刃をするくと砥石にかけて、と其の石筆に左手を添へてお米を上目に、ものの發奮んだ體に仕方を見せた。

巢籠

十三

「却説。」

熟と一つ石筆を撓めて見ながら、

「腕を鍛へた小手先ぢや、其の鑿の裏刃を砥で返して、すいと曳かうといたし候へば、うつかり見てござつた先生様、あつと云はしやると飛上るほど吃驚なされ、やあ裏を研がれては大變、と

申され候。

豫々聞いて知る事よ。彫刻師が心を籠めた鑿や鑿は、表こそ兎にも角にも、裏刃は一分一厘たりとも、他人の研には掛けさせぬものぢやとの。心得ぬではなけれども、うかと、仕事に氣に乗つて釣込まれた私は私ぢやが、其の先生様の、まだ年少ぢやに、睫毛一本の狂ひにさへ、刀で斬られたまで押魂消さつしやつた用心のほどが頼母しい。

下凡ではないわ、然るものぢやての、うむ。」

唸りさまに獨りて領き、恰も爛のついた酒を、目を塞いで、頂いて莞爾と一口。

「あッあ、甘露ぢや。銘酒、上爛。」

と膝で手を拍つて、舌をひたく。

「いや、此れゆるゑに讃めるでは決してないがの。……何時は先生様、冷酒の残りを、茶碗で一杯と云ふお振舞が、今日は、口になづんで一向に飲めなんだと申されて、すきと半分、罎毎恸うして遣はされた。

因つて土産ものをお前に見せながら、ゆるりと内で頂く氣で、罎をふらくと視め、酔はぬ前から千鳥足で歸つて候。

處で、前々觸込みの其の土産ぢやがの、懷中にある、うむ、此處にある。」

と搔開かつた胸の下、成程、ふつくりと一物の存する上を、俯向いて顎で壓へて上目づかひ。ものと、膳の猪口と、お米の鼻とを、一文字に故とじろくと盗み覗いて、

「當てて見さつしやい、何ぢやるの、何ぢやるの。」と又笑ふ。

「お父さん、お肴でせう。」

「先づさ、く。」

「鮎の足なんでせう。」

と云つた。……時にお米の此の答は、天井から不意に藤の花が下つたやうに、警拔なものであつた。

彌太八はきよとんとする。

お米は楊弓を取つて柳の葉を射つたと云ふ澄ました目色。

親仁は石筆に力味をくれて、

「あられもない姫御前が、酢鮎、いや、鹽うでにせい、何にせい、鮎の脚とは何事ぢやい。」と眼を睜る。

「だつて、お父さん、森にいらつしやる其のお方は、鮎の脚で御酒をめしあがるつてお話しぢやありませんか。」

「ですから、其の御配分を、あの……」

「はて、其を云ふないやい。ぢかつけに、鮎の脚で冷酒を呷るお方ぢやと云うて見い。御仁體が棄り果るわ、伊勢中搜いて嫁に成る女ごぞなく候。」

たとへて言はう成らば、な、お米よ。お前のことを他人に話すに、一夏の間食べまする唐茄子の数は凡そ、

「知らないわ、お父さん。」

トはたとぞ蔽へる、石盤の字よりも白い手。

彌太八は其のま、引込ませた拳を懐中へ突込んで、がさくと言はせたは新しい新聞包。颯と薫るは留南奇にあらず、月の桂を折る其れか、爽かな木の香。

十四

彌太八は故と鼻をひこつかせ、巖乗な指に勿體をつけて、胡坐の上で、もそくと其の包みを開く。

と朱鷺色に白を交ぜた、……腕の冴は見えながら、削つた手の優しさが思はれる、其のま、手絡にも結ばれさうな、柔かな鉤屑で、すらくと巻込んだ、其の中に尙ほ物がある。



處々、縷り掛けて、綺麗な色糸をあしらつた素の手鞠を見るやうに、然うした鉤屑の玉の中か  
ら、彼方此方、藍や、萌黄や、紅や、胡粉も際立つて、ちら／＼透く。

燻つた三分心の洋燈の濛い影、はげた能代の膳の鹽辛い限ながら、明白ならぬ、しつとりとし  
た蔽を其の上へほんのりと掛けた風情を、唯見ると、紅茸、露地茸、初茸、美しい茸を木の葉の  
苞にしたやうでもあるし、色鳥の彩ある雛兒を、巢ごと抱へ出したやうでもあつた。

が、實際一つ／＼膳の上へ並べた處は、手觸りもふつくりと、幽に、其の雛兒ぐるらるは呼吸も  
通ふらしく視めらるゝ、木彫に彩色した、小町、遍照、業平、若衆、藤娘、櫻、橘、梅、柳、六  
歌仙と大津繪を選んで刻める小人形。……

須磨、明石の浦ならねども、大宮人と上臈の、寒風の里の侘住居に、狩の日暮れし趣あり。  
「まあ、お父さん。」

とばかり言ふ、美人には遠慮のある……女郎花の僧正一人、頸を窘めて彼方向きで、彌太八と  
睨め競。あとの四個の人は、齊しく娘と面を見合つた。

「何うしたら可いでせう、可愛らしい。」

と胸を抱いた手の白さ。引緊めるまで身に染みて熟と視た。

「そりや、何うぢや。」と云ふ顔色で彌太八はまた石盤に、

「即ち。」

と一つ氣取つて記す。

「森の御堂の先生様小刀にて候わ。處での、私は土産のつもりで、預つて歸つたなれど、これは  
此のまゝ、お前のものにする」と云ふわけには成らぬ。濟まぬ事ぢやが、目の保養するだけの土産ぢ  
やとお思ひなさるべく。」

「え、結構ですわ。……でも持つて見ても大事な印ですか。」

「舐めさへせねば其の上は抱いて寝ようとも御勝手ぢや。先生様は、私に、お前と言ふ娘のあ  
る事は話さぬによつて御存じはない。また知つてであれば、此の中の一つや二つ、屹とお前にと  
云うて下されうと思ふにつけても遠慮して申さず候。」

「そして、お父さん、何處かへお届けなさるお使ひを頼まれたの。それだと私が持つて行きます。  
ねえ、私にお使ひをさして下さいな。」

「うんや、望み人があるなら賣つてくれまいか、と頼まれた。内々での。」

と何か大事さうに小さな字で、其の——内々で……の。

「恥かしい事ぢやが、小遣に困ると恚う申される。森の堂の仕事をする職人たちは大勢居るが、  
其の人々に相談すると、筒抜けに大福屋宅兵衛どのの耳に入る。やあ、不自由はさせませぬと、

右から左へ金子をよこす、又然うしては濟まぬ義理があるぢやとの。  
處で、私に頼まされた。若いお人が旅空かけて、嘸心細う、便ない事であらうと、私は其がお  
最惜しい。」

「ねえ、お父さん。」  
と目の優しさ。

### 小天狗

#### 十五

新道の廓の秋よ。茜さし入る暖簾の影、まだ灯さぬ行燈より、夕化粧した顔白く、軒に戀待つ  
花薄、風に靡いて立つ姿、出女めくさへ可懐しい。流連した燕、宵出の雁の、中の静止間の鐘が  
鳴る。

按摩の影はまだ見えす、喇叭が馴染の豆腐屋が、出口の柳を離れて行く。

ト平日一時寂寞する。……續いて鐘が鳴る此の夕暮を、如何な事、祭禮のやうな人通り。

花車が其處で据つたかと、町の中に人垣造つて、紅い日あしに、長い影。頸も手も染めながら、

眞黒に成つて押合ふのは、櫻の枝の短冊に扇亭と染暖簾。以前は、松茸から始まつて、二見ヶ浦  
の喜見城、大蛤が館を吐くと、遊君が羅出しに成るまで、浮世見物の五十段。吹矢の機關であつ  
たのが、時勢に連れて、赤達磨と裸骸のおかめを、大小順にすらりと並べた、即ち射的店の前  
で、店の正面、竹の埦を渡して緋の毛氈を折掛けた、客の座を前に控へて、二見の景色の背後  
幕。

あの、夫婦岩の眞中あたりへ、すつと圓髻の艶を見せて、目鼻立すつきりと面長に、凛とした  
眉の婀娜な、目にや、嶮のある、生際は聊か薄いが、髪は水の垂るばかり、襟つきの媚めかしい、  
……六か七と云ふ中年増が、無地かと思ふ黒勝の質實なお召の一枚小袖、藍と薄黄色のはつとし  
た、渡りものらしく見て取る、更紗がたの丸帯。白に淺黄の麻の葉絞りの伊達巻を、葛の葉  
の裏見る状に、はらりと結んで端を散らした、胸や、低く寛きながら、亂れぬ襟附しやんとして、  
裳を安らかにすらりと捌いて、達磨と、おかめを左右に拂つた、眞中に。

急拵への床几らしい、性は知れぬ……友染の座蒲團を掛けた踏臺に腰を掛けて、襖を落した疊  
の白足袋。

驚破、何ものぞ其の姿。不斷の招聘の高島田、此の扇亭の姐さんは、呆れた顔して、座を退つ  
て、店と戸外を等分にきよろしく見て居る。

たゞ此だけでも、新道に不意に落ちた瀧の如く、人を驚かして餘りあるのに、あれ／＼、向う側の商賣家、——一寸、よし原の五十間あたりであらうと云ふ、——雜貨並びに官營煙草のお定り小綺麗な店の軒下に、蟻螂の如く、ト及び腰で、左右の腕を上下に突張らせた、仁王を草書の張脰で。

や！あの、婀娜たる年増の、艶麗な身のまはり、まだ灯を置かぬ黄昏の町筋の夕日を隔てて、其の黒髪に影を籠めた白蠟の如き面を狙つて、擲んで擲んず拳にもものあり。

此の無名氏、年壯に三十左右、緋の羽織に緋の衣、掌で拂いた如き絞放しの兵兒帯を締めて、太鼻緒の薩摩下駄。釜底形の挫げ帽子を、ぐしやりと冠つた、鐔の奥に、一目の光人を射て、一眼漆の如く、ひたと盲ひたり。

時に此の偏目は、宛然其の美人を狙はんが爲に、不思議の因縁に依つて、爾く盲ひたるが如く見て取られた。

的に成つたは、お玉と云ふ、此の新道の、さかり店、東屋の名取である。

十六

仔細は——

此の二三日、時刻は違ふが、點燈頭また夜の八九時頃、強くも酔はぬが、素面でもなく、何處から糺出すか廓の内へ、ぬい、と懐手で顯れてつか／＼と射的に入る……一目盲ひた件の無名氏。物をも言はず、毛氈掛けた店前の埒へ、片脰を突掛けると、招きの女を片目で見るのが睨むやう。すぐ袂へ手を突込んで、かさ／＼と言はせると、五圓紙幣……遊戯の射的彈は凡そ五六百發射の分を、一時に擲出して、黙つて女の前へ突付ける。

處で、彈丸箱は五ツ七ツ、手の届く左右に有合せのを、残さず脇腰へ引攬つて、猶豫はずちヤリンと填め、きり、と掛けて鼻筋の透つた片頬づけ、脰がきちんと極る。びしりと射る。カチリと當る。達磨が素斛斗でボンと飛ぶ、緋禪のおかめが、一呼吸に續いて仰向けにくしやりと落ちる。

「いよ、當り。」

「素人ぢやないわねえ。」

店の女が、諸聲に噓すのを、耳にも留めず、聞えたと云ふ顔色もしないで、矢繼早にカチリ、トン。

響に應じて大小の的は、二見ヶ浦のうしろ幕、海原に翻つて飛魚の刎ねるが如し。中には落ちもせず射當てられて、ぶるツと身震ひして窘むもあり。

「當ります！」

「よう、豪い。」

先づ此は可矣。處が、偏目の其の客が思ふさま的を射て、カタリと銃を取つて投出して、同じく默然で、店の兩方、棚充滿に、葎と飾立てた景物を、鋭い一目で屹と見据ゑた時に及んで、島田と廂髪——其の廂髪の方は年上が、ぎよつとして顔を見合つた。

其の筈の事。

懸賞に應ずる偏目の客が、金銀的をはじめ射當てた點は、……何を隠さう……殆ど滿點であつたから。

第一等、お召縮緬一反の賞に値して尙ほ剩る。

然も其の一眼たるや、氣の所爲かして、脱からず、件の縮緬にぎよろりとして据つたれば、止むことを得ず、廂髪の方が、開店以來手を着けた覺えのない大切なりける代物を棚から下して、ふツ／＼埃を吹きながら恭しく持出して客の前に密と置いた。

「可い柄ですわねえ、旦那さん。」

此處らが、をとりの働き處と、島田が緋唐縮緬の膝を崩して、べたりと横坐りに成るまで袖を景品の壓にして、

「持つてお歸り遊ばすの。」と云ふ。

黙つて頷く。

「嘘、嘘。持つてお歸り遊ばすものかね、お前。いつれ、其處等の誰かさんにお土産になさるんだわ。ねえ、貴客。」と、廂髪のが流眄をじわりと行る。

「まあ、口惜い。」

と島田が事も仰山な様子をして、

「御細君にお土産に遊ばすなら可いけれど、可厭だわ、私。ねえ、姐さん、私頂いて置くわ。可いでせう、え、旦那。」

「此の娘にお遣り遊ばせよ、屹と御恩に被ますとさ。」

「眞個よ。然うすりや何でも肯くわ、おつしやること。私、こんな好い柄のを着た事はないんですもの。」

と半ば憐愍を乞うて、反物を抱占める。

「馬鹿を言ふな。」  
と大音に喚く。

大聲一喝をしたかと思ふと、其ツ切り木で刻んだ如く、偏目の無名氏はぎろりと睨む。  
 世を嘗め、人を食つた射的店の女二人も、黙つて睨むのに返すべき言葉もないから、急に雨に  
 逢つた體に悄氣返つて、即ち件の景品を新聞紙に包まうとする。  
 「邪魔だ。」

「はあ。」

「置いて行くから預り證を認める。一札書け。」

「預り證でございますか。」

と廂が此は希有な顔色。

「書け。」と言ふ口より先に、例の片目が判を据ゑてギロリとする。

此の睨睨、鐵砲彈より可恐く利くのであるから、言はるゝまゝに、卷紙へ、墨のかすれた、刎  
 ねた字で——お召縮緬一反也。右正にお預り……云々と認めて、目の見當を伺ひ、膝で延上  
 つて差出すと、鷲掴みにぐいと取る。  
 手が痺れるやう、力に打たれて廂髪は、くたりと坐る。

但し店へ突掛つた時、眇が其處へ投出した五圓紙幣一枚は、バリ／＼としたまゝ洋鐵にも變ぜ  
 ずで、損は僅少だ、と女どもは胸算用。……

「難有う存じます。」

「旦那さん、又來て下さいね。」

と女學生めいた言が交つて、追出しの胡麻を掛ける。

ビクとも動かさず、其の時無名氏、大眼を話と開いて、五圓紙幣をハタと睨む。……註に及ばず、

速に剩錢を寄越せである。

斷念めたのは女どもで、勘定をすると約二百發。指環ほどの銀貨一つにも成らぬ、殘餘を勘定。  
 情なささうに盆で出すと、引攫つてザクリ右の預り證を一所に袂へ突落しに押込んで、あばよ、  
 とも言はず横のしにフィと出た。

軒に風あり、さら／＼と鳴つて、毛氈に散る柳の葉。

「何だい、まあ。……」と廂髪は呆氣に取られる。

「天狗様でせうよ、姐さん。」

「でも、木の葉らしいわねえ。」

と、それでも年増の方は負惜みを云つた。客が瘦せて居たからで、もしか肥つた外套を被つて

居たら、僧正坊だと思つたらう。——翌晩又來た。

「おや。」

「入らつしやい。」

三日目の晩も、づかくと入つた。

「おや。」

「おや。……」

おや。女ども二人は顔を見合せた切、聲を掛けないのであつた。

其の前夜、又今宵も、偏目の客の、此の射的店に於て爲せる舉動は、殆ど判で押すと言つても可い。

例の斜違に突掛つて、袂から擲出して前錢を極める格が屹と五圓。で、彈丸箱の明いただけ引付けると、カタンと彈充填に及んで、おつと狙ふ。と最う女どもは悚然とする。

カチリ即ち達磨とおかめが、ちゃんぽんに空に躍る。やがて、ドンと其の銃を投げると、それ言はぬことか、ぎろりと景品を睨む。

で、其の身上莫大な景品を、故らに一度目の前へ持つて來させて、又睨む。更に睨んで、預り證を認めさせると、も一度睨むのが剩錢の催促。

重みのか、つた袂を拂つて、見返りもせず、づいと出て行く。

十八

場所は道町の廓でも、霜枯で客のない射的店へ、天から顯れた此の小天狗、女どもは其のづいと出て行くのを、消えたと思ふ。あとで毛氈の落葉に交つて、犬に似た足の跡でもありさうに沙汰をする。

最う三晩續いて……四日めあたりから、居廻り近所の若いものが、隙な女まじりに、射的の店を取巻いて、其の無名氏を、それよ、あれよ、と指し、目配せ、囁き合ふ。

いや又、偏目の自若たる事、人が寄らうが、集らうが、ものの數ともすればこそ。黙つて、紙幣を出して、黙つて狙つて、黙つて射て、睨んで景品を持出させて、睨んで預り證を認めさせて、睨んで剩錢を取つてフィと歸る。

却説、其の五日目の今日は、天氣も可し、日の暮れぬうち、づかくと來た眇の姿を、向越に店から覗くと、廂髪が震出して、

「私は隠れるよ、頼むよ、お前。」

「困るわ、私かつて、姉さん。」

と島田もベソを掻く。

「後生だ、をがむから。」と少なからず、あの、睨むのが氣に成つて、夢を見て魔されると、うしろ幕の陰へ隠れた。

「最一匹の獸ア何うした。」

例と違ひ、睨む前に口を利いたは可けれども、自分が狐やら狸やら分らぬ癖に、人を人らしくも言ふ事か。剩へ、言ツ放して返事も待たないで袂から件の預り書を引出して突附けた。

それ、睨む。……申すまでもなく、數を合せて揃へろ、と云ふのである。

拒むべき分ではないから、最初のお召縮緬一反をはじめとして、博多の男帯、手巾、手袋の類。中には品七つで景一等の代りと成る敷島一箱、手巾一ダアス、フレンチの襟巻一掛、手袋一具、鳥打帽一個、外に二點。メてかけがへのない縮緬一反の分、と云ふのが十組にも餘つて堆い。

扇亭の身上、目星い處は、山の林を切拂つた體に、後幕もぼかんと薄く、島田の白粉も霜げ果てて、唯ぼちちと隣りするのみ。

「どえらい事や。」

「此處な店は引越すかいな。」

取巻いた見物は、口々にぼやく。

時に、偏目が大な聲で、

「姉え、おい、姉え。」

「はい。」と縮殺されさうな可哀な返事で、島田は積上げた景品の蔭へ逡巡した。

「没落に及んだな、平家。貴様の店はこれぢや鐵砲をくらはす張合がない。しみたれめえ。」

何うだ姉え、貴様、達磨のかはりに正面へ突立たんか、動目標と云ふのよ、的だ。」

「え、。」と驚く。

「慌てるな、鐵砲で打ちやせん。面を狙つて銀貨を放す。貴様受けるなら勝手に受ける。受けられんけりや勝手だ、チクリと痛いおもひをしる。打着ただけは、其處らが白く成るほど興れて遣ら。酔つぱらつた奴は交ぜやせんぞ。」

と兩方の袂を、ざくざくと鳴らして、

「やい、お杉、——お玉か何だ、……貴様、伊勢の名物を背負つて立て。然うすりや、褒美だぜ。まだ其の上に、己が取つた其の景品を残らず遣らい。」

——何うだ、諸君。」

と大音を揚げて、唐突に磔と左右を視めた。

不意を啖つて、立合の見物は、酔漢が、一刀引抜いたと云ふ騒ぎで、はつと退いた。が、氣が

付くと、さて各自に極が悪さう。

「へへへへ。」

「えへへへ。」

偏目の客は此を見て、呵々と高笑ひ。

### 銀砂子

#### 十九

「何だ、何だ、喧嘩か、酔漢か。」

丁ど、今其の射的店の見物が、小兒まじりにばらばらと退いた處へ、出口の柳の黄昏を抜けて、夕霧の神路山、風白き朝熊山を彼方の空に、友染媚めく片棲端折、わがねて頸に置手拭。手に籠を提げたるなど、わざと野がけの風情を見せた、藝妓が四五人、風采も容色も、中に背丈も、すらりと立勝つた、こゝに其の東家のお玉も共に、客が二人、男は其切の同勢七人、茸狩の歸途が來合せた。

「喧嘩か、何だ。」

眞先に顔を出した、黒の中山高、さやく絹裏の音のする、紺の外套、ぞろりと着流した尻を端折つて、鐵色甲斐絹の股引を裾に見せたは、――

寒風の里なる、伏屋のお米が楊枝店に、四合壺を持込んで、研ぎたての短刀を懐に、申戯か、知らず、洒落か、眞剣か、男が魂に掛けた、と號して推しつけに酌をさせた、トロ酔機嫌で門を出て、辻で行逢つた彌太八親仁に、たゞみ掛けて饒舌りつけ、ぐつぐつと吃の目を白く黒く、咽喉を詰らせて、アハ、と笑ひ、戸田屋の金襖で、一本木の上爛で、魚軒に山葵まで利かせた上、錢金に絲目は着けぬ、自ら殿様だ、と名告つた金齒の漢で。

此は、服部銅三郎と云ふ、――生れ土地、氏、素性はまだ分らぬ――ホテルに滞在の、曰く實業家と云ふのであつた。

「はい、何、喧嘩ではござりまへんで。」と返事を買つて出て、知己でもないのに、對手の風采を見て、世辭半分に、口を利くものが、此處にも居た。

「然やうか。」

と銅三郎、至極鷹揚。で、人を分けて外套で大きく出て、其の癖、お忍びと云ふ風で、襟を高く、帽子の廂を深く、射的店をじろりと視ながら、

「一つ當てますかな。」



と、其の連の男を見返つて、聲を掛けてから、店前へのそく寄つたが、島田は現在、小天狗に掴まれた最中で、鳥の囀る聲さへ立たず、依然として瞬くばかり。

で銅三郎も、のつそりと立つて見る。

傍には目もくれず、小天狗は談判す。

「何うだ、さあ、姉え、二見ヶ浦の渚ぐらるに、銀貨の波を打たして遣らい。おい、面を貸せい、動目標、目を塞いでりや。」

と云つたが、フト苦い顔して、

「潰れつこありやせん。鼻は原ツから挫げて居ら。額は出とる。一ツも残らず當つた處で、其の上造作の崩れやうはない。貴様は原價だ。うむと言へい。さあ、何うだ。」

返事さへ出来ないさうで、島田は中腰に立つて奥を覗いて、

「姉さん……一寸、姉さん、來らつしやいよ、旦那さんが、あんな事。」

と連に呼ぶが、餘程怯えたさうで、寂寞として、幕も二見も末枯也。

「人を呼ぶより貴様が立て、足がないか。お杉の達磨、——おい！……おかめのお玉も出て來んか。」

「……あ、私の事ぢやないけれど。」

と見物の中で、其のお玉が、最う一人の男に言つた。

茸狩歸りの一行、銅三郎と連らしい、其の男と云ふのは、憚るかして、襟巻で半ば顔を包んだ

が、くたびれた背廣の服も、清い目も、見紛ふ方なし、森の堂の彫刻家、大矢三千枝である。

二十

「え、私の事ぢやありませんとも。ですけれども、」

と並んで其處に立つた三千枝に云ふ時、お玉は早やかに成る心構への手にした洋傘を、傍に居

た年の少い藝妓に黙つて預けたのであつた。預けながら、尙ほ三千枝に囁くやうに、

「お聞きなさいな。顔を狙ふのを受けさへすりや、銀貨の浪を打たせるツて、あれ、威張るんぢやありませんか。寶の山と云ふのは此の事ですわね。……一寸、頂戴しなくツて何うするのさ。」

「止せ。馬鹿な、申戯ぢやない。——人も見て居る、……止せと云ふに。」

眞顔で留めるさへ人前で大人氣なしで、三千枝は苦笑しつ、襟巻を目深にした。たゞ眉を擡

めて目で壓へる。

「まあ、貴方も苦勞性だ。お座敷で床の間の隅から、お猪口を投げるのを受けさせられる氣障か

ら見りや、餘程これは洒落れてるよ。……第一、こんな事でもなくつちや、貴方のやうな、工面

の悪い情人は達引けないぢやありませんか。」

と皓齒で……唇は、燃るが如し。

爲に目潰しを啖つた體に、ハタと掌で額を蔽うて、三千枝は身を躲はして、たじくと成る。

ト一所に、藝妓二人、三千枝に引添うて、あとへ退つた。が、他の二人は、其のまゝ、人混みを分けてスツと出るお玉について、つかくと進む。

店頭で、お玉は其の艶やかな薄手な圓鬘に襟白く、黒縮緬の紋着羽織、すらりとして立ち直つ

て、

「旦那、……旦那。」

と言つた。

一人、水際立つた、然も質實なつくりで、新道の藝妓とよりは、浮世小路の圍ひものと云つた其の風采は、こゝに、取巻いた見物の目に、同じ連、と云ふ中に、三千枝の馴染のやうでもあり、銅三郎に自由に成つて居るとも見えて、何とも判断が着き兼ねたらう。

仔細は、やがて知れる。……

「あゝ。」

今の、旦那々々、とお玉が呼んだのに、先刻から、其處に突立つた、大外套の銅三郎が、のみ

込んだと云ふ、太い聲で應ずると、それと殆ど同時であつた。

「やあ。」

偏目の無名氏も、齊しく一眼を見向けたのである。

お玉の眈は、時に著しく偏目の方に向いて居た。

「眞個でせうねえ。」

「何が、」

とぐつと腰を捻ぢて、紺足袋の白い裏、引傾がつた薩摩下駄の片足を、蹴上ぐる如く遣放しに膝に上げると、お玉の顔を下から覗いて、

「何が眞個だい。」

「寶船の一件さ、……貴方、銀貨の波をお打たせ遊ばす其の事ですよ。」

「此だ、ざくり。」

と口で云つて、袂から一摺み、雪の如く白銀を。

早や半ば、肩に迄つて、媚かしく裏を蹴した紋着の羽織は、又黙つて一人の少い藝妓の手に渡

る。

忽ち、銅三郎が横目に掛ける外套の背後を抜けて、すつと通つて、一廻りして、土間から店へ、

と白足袋がちらりとかゝるや、かつ散る紅、裳をはらりと、帶腰靡く襖捌き。  
いや、見物が騒ぐまいか。

蛇身の妖婦

二十一

「姉さん、お扇子を拜借な。」

とお玉は澄まして、其處に積んだ——眇の客に引攫はれる筈の——景品の陰に、二見ヶ浦の幕の前、蓬萊に潜んだ霜の鼠の體なる島田鬘に、差向ひに軽く膝を支いた。

島田は例の、目をぱちくり、目をぱちくり。

「あ、」と云ふ、お玉は婀娜な口許、眉鮮麗に瞳を流して、

「此處にある、此を借りても可いでせう。」

「え、御新造さん。」

左袂の往還り、名も容色も知つた顔を、慌てて御新造と云つた、射的の姐は、大分轉倒したもののらしい。

「其の扇は、あの、矢張り、旦那さんが景物にお取り遊ばしたので、もう私どもではないのでございませよ、御新造さん。」

お玉が見向く間も待たなかつた。

「や、皆使へ、何本でも構やしない。」

言の下に、箱から封の扇子を抜いた。

「旦那、此處からぢや近過ぎますわね。」

「勿論。」

と、眇は其の上胡坐に組違へた足を下ろすと、衝と軒を離れて、向う側へ、其の煙草屋の軒前へ——

此の眇の動くに連れて、取巻いた人数どやくと雪崩を打つ。其に交つて、銅三郎も、三千枝も、連の藝妓たちも人中に紛れたのである。

煙草屋の亭主の、縞の前垂を外して、驚いて、ひよいと立つ時、隣家の菓子屋から女房が半纏の襟を扱いて駈けて出る。

出口も町も廓中の人走り。——夕日の影は此なのであつた。  
時に、お玉は二ツ三ツ、扇子で軽く膝を叩いて、島田の娘に一寸言を交したと見ると、幕のう

しろに隠れて居たのが……其の心を得たものらしい、一個踏臺を提げて出て、其の時廂髪を顯した。

座蒲團掛けて、町を挟んで、眇の眞正面に据ゑたのに、お玉はびたりと構へて、片手を添へると、胸へ斜に、パチリ扇子のせめを切る。

「投げるぞッ。」

「あい。」

と頷く。

驚破狙ふ。

一つ星一つ、晃乎として、眇の拳が颯と開く。ト青柳の眉を掠めて、前髪に丁と白羽の矢、ツトさ、つたは右手の扇子で、銀貨は親骨にカチリと當つて、毛氈にぱらりと落ちる。途端に扇子を衝と流して、面を肩にハツと伏せると、末廣下りに肘を胸。身を曲らして丁と受けるや、銀貨は要に當つて散つた。

と同時である。

唇紅く、皓齒を當てて、雪の頸の撓つたま、肩で啣へて、一呼吸に、キリキリと開いた面で、第三の銀の礫を拂つた。向き直らうとする鼻筋へ、隙間あらせず、ひようと來ると、袖口を

翻したま、掌で左へ刎ねて、右手の扇子で膝を敲く、と思はずらしい。

「は。」

と媚かしい掛聲した。

が、息吐くためか、両手で取つて袴と面を蔽うた白扇、大なる蝶の翼に、ぱちちと音を立てて少時は、たゞ玉露ほとばしる。

間もなく、扇子を上へ開いて、花笠の如く翳すと見れば、……

二十二

小手鞠など扱ふやうに、ひらくと其の眉に翳した扇子を煽つて、ばらばらと擲つ銀貨を、搗いて落とす……搗いて落とす。

腕に覚えあるかなんぞのやうに、手鍊は人の目を驚かした。

が、瞬く間もない。眇が鋭き礫。お玉は激しき身動きに、ひらめく扇子の骨を覗いて、はらはらと亂れかゝる鬢のもつれは、横雲かゝる月かと思ゆ。……生際に軽い汗、目脛に薄い色を颯と染めると、扱ひながら、受留めながら、胸を斜めに肩を靡かし、袖口へ衝と手首を引いて、白羽二重の裏を迂る、小袖の片膚すらりと脱ぐ。二の腕の肉を刻んだ、龍も炎も無かつたけれども、

もの凄き淵の色の蒼く染まる、襦袢の袖裏、淺黄縮緬、おもては辨慶の紺と白。

雨白く風添ふばかり、礫を砕く扇の亂れに、おくれ毛黒く雲を動かし、衣紋崩れて、しろく  
と、ほのめく乳房、露顯な胸は、卯の花緞や鎧へる風情。

長襦袢の辨慶は、散りかゝる銀貨の數に、一枚々々青く輝く、鱗の如く、さらりと音を立て  
て、蛇身の美女の裳を曳いて中空に狂ひ舞ふよ、と凄しく又艶麗であつた。

ズドンと一發。

幻は、バツト消えた。

銀貨の礫ハタと留んで、群集は氣勢に寂然した時、縞の羽織の袖を張つて、眇の無名氏の、手  
に屹と取直したものの有るよと思ふと、あはやと見る間に、ドンと響いた。

短銃であらう、薄い煙が牡丹に開けて、煙硝の臭氣が芬と立つ。

ト黒雲から落ちたる如く、臺を這つて、トンと膝に扇を支いたり、圓鬚を衝と眞俯向。

お玉はたゞ、長襦袢の片膚脱いだ、姿の亂れた、尋常、婀娜な年増であつた。

此の一撃がなかつたら、世を離れた、あの、凄艶なる蛇體の妖婦は、其のまゝ、興に乗じて、射  
的場の破風を抜けて、朝熊の天へ飛んだかも計られぬ。

さて見物の仰天さ。

「きやあ、」と腰を抜いた藝妓もある。

喚く、叫ぶ、大勢の人聲の、宛然銃の音の筈を返して、次第に高く轟くが如き中に、呵々と高

笑ひする無名氏の聲が響いた。

大音に、

「から鐵砲だ、から鐵砲だ。わは、は、は、」

と笑ひ棄てると、湧立ち、入交ふ群集に紛れて、出口の柳の霧隠れ。――

あちこち、ちらほらと行燈に灯の入るのが、何故か、一つ一つ却つて消えるやうに、呆れた人  
人の目に映つた。

眇は影もない。

が、其の隠れたのは、たとへば盤石を探つて、大沼に沈めて、そして見えなく成つたと同一で  
ある。

其の夜のうちに、噂は渦を卷いて擴がつた。

それ、最う廓を離れた、とある裏町の居酒屋で此沙汰也。

「あゝ、吃驚した、……私アまた、眞個に其の、何だ、むつちり見えたツて、膚を脱いだ、へい、  
其のおつぱいの處を抉つたかと思つた。」

と土方體の半纏着が、茶色の硝子杯を密と置く。

一 張 羅

二十三

差向ひに、色の黒い年配な按摩が一人。小皿もりに二合の上爛と云ふ禿げた塗膳を控へて、框へ腰を掛けた奴。口を前へ開けて、仰向いて、蒟蒻の一切を、寛政の年間、空から降つたお札と云ふ形に挟んだ處。

「對手が魔物だと云つて、お前あん、然う無暗に人命を絶つと云ふ事は此でござせん。其處は佛方便でげす。」

と首め、天地いまだ開けずして渾沌たる事蒟蒻の如き舌を吐いて、あぐりと頬張り、咽喉佛を大きく揺つてゴクと呑む。此の按摩、妙見町の裏路地に生れて、古市、新町を跨に掛け、杖を相の山に立てて、旗竿の如く、宇治山田を睥睨し、廓の内と外とを論せず、何事がござらうとも、何うだ、と問へば、然うだ、と答へて、凡て鶉でげす、で、空嘯く。

恰も可、性を宇野と云ふ處から、綽名を呼んで、(鶉のさん)である。が、當人何の市とも言はれないで、氏を以つて通ずるのは、豪さうなのを悦喜なし、其處は鶉のさんだ、と自ら名告つて、納まり返る名物である。

半纏着は味噌をべろり。

「まさかね、然うだらうとは思つたが、恚う見えて私ア、銃の音が嫌ひさ、蟲が嫌ふんだ。西洋手品の短銃でさへ餘りどつとしねえんだから、ずどんと来た時はヒヤリとしたい。で、何かね、魔物だと云ふ、其の男は、其の藝妓衆に興味遺恨でもあつて度膽を抜いたものだらうかね。」

「風説に聞けば、随分遺恨は受けさうな女だよ。あの、お玉さんと來ては評判で。と、ごましほ頭の律義らしい亭主は、横向きに爐縁に坐る。……納戸で、嫁は添乳を託けに最う寐て居て、時々其の孫のぐづくと泣くのが聞える。體裁斯の如くんば、餘り繁昌な飲食店でない。

悴は車を曳くさうな。

鶉の按摩は猪口を取つて、引傾つて分量を考へ、

「然うだとも、そりや然うだとも。お玉さんは不意にお前あん、茸狩の歸りがけに、來合せて、負けない氣だから面白づくにぶつかつたんで、それを目的に仕組んだ悪戯ではござせんや、あ、射的の姉ツ子の生肝を抜いて茶請にしようと云ふ了簡だ。魔物でがさ。」

「鵜のさん、魔物だ〜ッて、別に尻尾が裂けた、耳が動くと云ふ筋ぢやあるまいね。」  
と半纏着は、足りなさうに硝子杯を覗く。

「言は、形容でございませう。」と亭主は眞面目に合點顔。

鵜の按摩は大きく頭を掉つた。が、未だ注がず、徳利の胴をぐるぐると、しつこらしく撫廻して、

「うんや、耳は當世の帽子、尻尾も兵子帯と云ふので狐狸——即ち狐狸ぢやね、そんな其の獣臭い處は更にながせんけれども、續いて射的店へ五日來た。往還何處のものだか、空を睨んでも星が着かぬ……餘人は知らず、口廣いやうですが、宇治山田なり、分けて、廓中の出入りに、私が分らん、と云ふは恐らくない。其の私に何とも見當の着かぬ人間なら、即ち人間離れをした、恐らく魔物に相違がせん、はあ。」

と口を開いて、唇とともに、聞くものを舐めるが如し。

「處で、其の撒いた金子の一件だ。」

と半纏着はへこんだ井を撫でながら、

「あとで蛙にも木の葉にもならずいかね。」

「されば、肝心な事や。鵜のさん、何うでや。」

と亭主も唾を呑む。

二十四

「正のもの、炫耀なものでげす。豫て下心があつて兩替をしたと見えて、銀貨で揃へて、打着けました、いや、撒いたねえ、ばらッ、ばらッ。」

と鵜の按摩、兩の掌を開いて、指をぶる〜と動かしながら、自分が撒いたやうに意氣頗る昂つて、

「雨、霞だ、雲や氷と隔つれど、落つれば光る、稻妻でげす。大薩摩ではなけれども、もの凄くも又さね。お玉さんの身の周圍へ糞と積つて四五十兩、烏も白く成つたてな。」と拳を握つて氣競つて呑む。

「見て來たやうだね。」

と半纏着は硝子杯の底をコト〜と突いて言ふ。

「皮肉だね、あは、」

と白い口で、

「（見て來たやうだ。）は皮肉でがせう。」

「いんね、話のやうだと云ふ事で。」

と爐邊の亭主は藥罐を撫でた。

「話でなし、實説だ。……世間ではよく話のやうだと云ふが、私の話に限つちや凡そ實説だと思ひなさい。然も其の金子は、射的店から、煎餅の袋か何か借込んで、ざくりと口を締めて、お玉さんが自分ですん／＼引提げて歸つたから鬼の首だ、呆氣に取られぬものなしさ。見物の徒はズドンにも腰を抜いたが、引提げてすん／＼にも敗亡したて。

おまけに何と——こんな時にでも儲けなくつては、お前さんを達引けませんよ——なんてね、同伴の男に面と饒舌つて、的に立つたと云ふから驚きませう。」

「可い度胸だ……」

爐邊の亭主も向直つて、

「い、度胸も可い度胸。よく、其の投附けるのを、手際よく扱つたもんでや。素人ではなささうぢや、と云うて、藝妓にも違ひないのぢやが、其の今の、かはす、受ける、拂ふ、薙ぐと云ふ離れ業だてや。」

「其處だて、御亭主、」

と鶉の按摩は、二本倒した額を敲き、

「素性の知れない婦でね、私は新道に掛けちや御存じの鶉だけれども、鶉だと云つて、これ、無い魚は呑めぬ道理。一通り證書面の外は、肝心抱主の東家の主人も、何にも知んなさらぬと云ふ渡りもんだ。

あの、容色で、あの腕でおまけに中年増、それで居てまだ丸抱へと云ふ曰くづきだ、尤も土地へ出てからずぶ三年には成らぬがね。それにした處で、接木にも實の生る頃を、……いや又無理もがあせんかい。

田舎出の大盡でも、悪く、さしむかひに成らうものなら、聞きなさい。……あの、別嬪が自分で手を叩いて女中を呼んでね、此の容は口が臭くつて頭痛がするから楊枝を使はしておくれ、次に手に湯殿へ連れて行つて脂肪を濯ぎ出して來てもらひたいね——は何うでがすえ。

身に染みた客人まるでなし。  
不斷着の着換へも持たぬ、出も座敷も主人持ただわ、可いわ、とあつて、酔ふと泥濘をずるずる引摺る……酒は又浴びるとね。

部屋に居りや大概裸さ、素膚で搔卷にくるまつて、腹這ひの長煙管で番煙草をすぼ／＼吹かして、下婢を呼んぢや、二日酔いの唾をためた灰吹を棄てさせる。  
どれ、一風呂と云ふのが、内湯を嫌つて、雪の膚だが私や鯨さ、と廓の温泉へ泳出す、と成つ



てお前あん。此の寒空に一張羅、膝腰の抜けた素袷に伊達巻の遺放した。借りるよ、と云ふと會釋も無いやね、羽織なり、寝寝子なり、朋輩がぢみちに霧を吹いて疊んでおく奴をボンと羽織つてからんく、後齒の下駄が抜けようが、微塵以つてお構ひなし、矢張り自分のぢやがあせんや。」

「いや、悉しいもんだ。」

と硝子杯を氣張つて、聲が冴える。

「其處は鶉でげす。」

と大きく咽喉ぼとけを動かして呑込んだ。が、盲の悲しさに、誰だか知るまい。——今は看板のやうに見える、店頭釜に突込んだ白鳥を、内へ引込めて半ば鎖した、——向うの隅の縁臺に、背後向きに成つて、故と註文と云ふので、……其白鳥から、どぶりと注いでは茶碗で傾けて黙つて控へた、可笑な風體、帽子の上から豆絞りを、スットコ被りの男がある。……

二十五

「お湯屋の附合ひと成つて見ると、女同士でも裸さね。」  
と鶉の按摩口を曲めて、異變に莞爾つき、

「へ、へ、其處で、かけかまひの無い別懇を取結んで、直ぐに手拭で結びつたまを拵へて、湯歸りのお前あん、東京蕎麥を賭けようと云ふ風だ。御神燈のお長屋なみ、其から其へ、四絶の縛だ、いぬしかてふだとそれ。」

鼻を壓へて、フンと鳴らして、

「此でげす。……高い聲では言はれぬがね。(白浪のお玉。)とでも言ひさうな身持だと御覽じろ。悪い事は染り易い、續いて(皮剥のお杉。)だの、(こんくのお紺。)だのが顯れ兼ねない様子だもんだで、傍の抱主、親方徒から沙汰を東家へ持込んだ。

腕は冴えたわ、面は美眩い、と來た處で、行狀が如件で、東家の御亭も苦切つたて。

脂を嘗めるやうな、下げ煙管で、長火鉢の前へ、雑と早や、……禪ばかりと云ふ女を呼んで、さて、言ふまでの事はない、住替へをして貰はうか、と額で睨んだと思ひなさい。

や、其の時のお玉のふてくされ加減と來たら、そりやお目に懸けたうがしたぜ。」

「見たかつたねえ、お前の前だが、」

と半纏着も大分酔ふ。

「皮肉を言ふまい、はッはッはッ。ねえ、御亭、私も若年の時、師匠の代理に葬式に立つとつて、借着の羽織袴をころして、けんのみを食つた處で、此の腸を洗ひます、と布子を曲げて又飲酒で、

裸で宮川へ入つた奴さ。尤も土用さ、お前あん。

いや、それ處かい、お玉の姉。

こんな身體を、ほかに抱へ人はございやせん……と来た。……可しかね、……お内に置かれな  
いとおつしやるなら、證文を巻いて下さいましな、ひめ糊を賣つて歩きますから。

此にて、ぎやふん。」

と仰向けに目をぎろりと遣つて、

「ね、それだ、お前あん。

何處を渡つて、何をして来たか、射的場で銀貨を受けた手際では、それこそ、露西亞か天竺の  
見世物小屋で、正のものの、相の山（お杉、お玉）をお目に掛けた代物かも知らないてね。」

「大きにさ、そんな事かも知れんてや、何しろ、した、かな鐵拐ぢやな。」

と亭主年を取つたものである。

「其の情人ツてのは何だらう。」

と半纏着は首を掉つた。

「こゝ、一番聞きどころ、とお來でなすつたかい、はッはッはッ。肝心事さね、聞かせませう、  
其處は鶉でげす。」

と抜衣紋に襟を扱き。

「近頃、浮名にも立ち、素振にも露れたのは、東京から來て逗留して居る、何か彫刻師の先生と  
やら、少い人で、此が精々と通ひもすりや、又呼出しもしようと云ふのだ。

けれども、——情人を達引くには——などとそれ人中で面と向つて言はうと云ふ、腹の知れな  
い一件だて、少い人はぞくぞく嬉しがりさうな事だが、私のやうな鶉と來ると、こりや一步退い  
て而して惟るてね。

婦も一座で、一所に成つて、右の彫刻師の先生が、遊びづきあひで懇意にする、——ホテルに  
陣取つた、親分と云ふ手觸りの大商人が一人あるて。……私も呼ばれて肩につかまつた事があり  
ます。それ手觸りが堅氣でがあせん。

おまけに、其時、外に誰も居らなんだと思ひなさい。夜分遅くだ、お前あん。友達の馴染と云  
ふ格で、お玉さんが來て居たのだがね、何うも尋常つい通り、川端の花見と云ふ中では無ささう  
に思はれる。却つて此の方が眞ものかも知らぬてね、其處等は鶉でげす。私が睨んだ。」

「其の目でかね。」

「又言ふかい、はッはッはッ。」

から笑ひのあとが、一寸寂然。……で、豆絞りのスットコ被りの白鳥を注ぐ音タツタツタツ。

「萬事が駒の朝走りか。……色事に掛ると、若いものは初手に赫と氣競つた處は鮮明なものだがね、草臥れた時分、泊と成つて、駄賃は他人に占められる。」

いや、乗つて走る野郎より、手綱を取る馬士の方が、自由に馬をこなすだて。馬乗袴で鞭を擧げて、見た處の立派な戀は、腹が空いて目が廻る。馬小屋で水を汲んで、秣草を飼ふ奴の方が、爺でも馬には命だ。

老功にや叶はねえ。……また皮肉を云ふまい。私が目では、若い先生の方が野駈けの鞭で、年配の商人と云ふ奴が、馬小屋の秣草桶だね。あ、と一人で頷いて、  
「其の癖、くひものに成るのは鞭の方だ。」

「鶉のさん。」  
と半纏着は大きにふらつき、  
「婦が達引くと云つて、畜生め、銀貨の的に立つたつて……餘りくひものに成さうな野郎でもないぢやないか。」  
「ふん、話も然う身を入れて聞いてくれないでは……此處の亭のやうに坐眠は怨みだ。」

「何、降つて来た、川の音ぢやがな。」とむつくりと顔を擡げる。

くすくすと二人は笑つた。……  
豆絞りのストコ被りも、こみ上げさうに、背後むきに肩を揺つたのである。

「いや、神風の音でがせう、はッはッはッ。ねえ、お前あん、五十鈴川見通しの鶉だ。……其の先生は素寒貧だけれども、其處には、山田のそれ、宅兵衛旦那、大福屋と云ふのが、金箱を積んで先生に附いてござる。」

「伯父さんかね。」

「これは、鸞鷹だ。」と頭を撫でる。

「え。」

「いえさ、鶉の先潛をするからさね。金を持つて附いて居ると言へば、(伯父さんか)は氣が早い。先生と云ふのは、地體大宅の客人でね、妙見町のホテル近所の、あの高臺にある大宅の別荘に逗留して居て、鼓ヶ嶽の森の中へ、仕事に通つて居ようと云ふのだ。」

「按摩、按摩。」

と此時、唐突に、見向きもしないで豆絞りが聲を掛けた。

「あッ、」

と吃驚した體に、鶉の按摩は頬邊暗く横ざまに口を開けて、其の思ひがけない聲を、煤の中か  
ら呑込まんと欲する如く、

「はあ、はあ。」とばくく遣る。

「按摩、」

と、最一つ曇みかけて、

「貴様は、もの知だ。」

「はあ、」

「俺が聞きたい事がある、何うだ聞かしてくれるか。」

「……………」

「鶉のさん、お前に何か聞きたいとよ。」と半纏着は、むくれて黙然の按摩に取次ぐ。

「おい、此頃、途中を歩行くと、時々見掛ける、……鼓をトンくと拍つて通る、二十許りの別  
嬪があるが、足駄の齒入ぢやない、ありや何だ。」

「知らないね。」

と鶉の按摩突慳貪。

「貴様はパイ〜だ、先はトン〜よ、稼業ぐらゐ知つてる筈だぜ。」

「知りませぬ。いえさ、知らないね。杉山流の免許取、宇野萬吉は知つて居ても、(按摩々々のお  
い貴様)は、一向に知らぬてね。」

### 女郎花

二十七

「聞かせろよ、面倒だ。」

と、ものを問ふのに、尻を向けて見向きもしない。それ、慥くの如きは人間として盲であるよ  
り、大に間違つて居るのである。

のみならず、何方が面倒だか分らない事夥しい。……鶉の按摩納まるものか!

「私は盲だが此方あ聾か。知りませぬ、む、知らぬと云ふのだ。杉山流の免許取、宇野萬吉は  
知つて居ても、(按摩々々のおい貴様)は、一向に知らぬてね。」

と眞仰向けに空嘯く。

「勘定は置いたぞ。」

と豆絞はづいと立つたが、ハタと袂を拂ふと見た。

「ぢや此の音を知つてゐるか。」

と穩かに沈んだ聲して、言ふが遅し、ズドンと一發、キリ／＼キリ、煙硝の匂が土龍と成つて、土間を渦に駈廻る。

や、足を取られて、ずりりと落ちた半纏着が、つと爪先を揃へて突出して、ぐたりと成つたは然る事ながら、發奮は妙で、わつと叫んだ按摩の體は、框を離れて飛上つて、ぴたりと宙へ引つ架つて白眼を睨いたと見る目怪し、仰向けに見事に轉る。

亭主は懐手のま、爐縁へ棒立。

子を負つた嫁が、トタンに奥から、胸はだけの半裸體でひよいと出て、土間を跣足でぐるりぐるり。

地響がドウと發つて、小家の屋根は震動す。

時に希有だつたのは、忽然として口から湯氣を噴いた大藥罐の其ではない。客が空にした白鳥で、此の鳥の如きものは、淡い煙の中に、胸を白く、ふら／＼と翼が如くに見えた。

餘りの騒動に、却つて呆氣に取られて茫然とした、あれ……見よ、眇の無名氏は、打窘める如く、其の豆絞を頭から顛へ兩手で扱いて、

「空鐵砲、空鐵砲。」

と眩くと齊しく、すぽんと門を抜けて、すた／＼。……吃驚も未だ足腰の働いて戶外へ出合ふ隙もあらず、兩隣、向う三軒、立籠めたまゝの夜霧に紛れた。

彼は此を訊ねたのである。

鼓を打つて行く美女――

眇は此を、鶉の按摩に訊ねたのであつた。

鼓を打つて行く美女。

けれども、此の時は、肩に掛けず、腕にせず、……燃ゆるが霧に不知火の、燃ゆるが霧に不知火の紅の調の緒を取つて、右手をしなやかに、引メめた、繻子の帯の小脇に鼓。左の袖を徐と掛けて、合せた胸を包ましく、着流しの帯腰なやかに、肩に染む夜寒の風。さつと渡る軒づたひに、とある町の溝のふちを、小刻の足白く、星の光も辿々しく、ちら／＼兩側の灯も見え隠れに行くのであつた。

ト背後から見たのは、飲食店を遁出して來た眇で。

二三間……霧を拂つた酒機嫌で、其の不知火の調の緒と、浮出でた頸の雪と、したゝる如き黒髪が、少時して聲を掛けた。

「姉え、おい、姉え。」  
「はい。」

とすぐに立留つて、迎ふるが如く、恥づるが如く、身を斜めに——見返つた。淺黄の襟が霧の中に、月の光さし添ふよ、と美しく氣高いのである。

二十八

向合つて、雙方面は合ひながら、霧があつて、一重此の放縦な男から、色香を包むものの如くに見えた。

「私でございますか。」

と判然云ふ。

「君だ。」

と眇は例の掛構ひ無い言ひしたが、餘り間近で、女が続いて云ふ、其の言葉が、顔に支へて出憎からう、と思つたらしく、横ざまに、少し身を開いて、

「君は何かい、按摩を知つてるかい。」と唐突な事を、然も些と慌しい聲して云ふ。  
女の方がもの靜に、

「按摩でございますつて。」

「あ、鶉だとか言ふが、目の白い、面は烏のやうな奴だ。」

「はい、誰方でございますか、存じませんでございます。」

「知らないか、あ、然うだらう、知らないだらう。勿論な、別に知つてるわけではない筈だが、

實は俺ら君の事を其の按摩に聞いたんだ。……」

「何を、お聞きなすつたのでございます。」

眇は何故か、ふらくとして踏留つた。

「まあ……君、行け。知己でもないのに、呼留めたりなんかして、溝端に立たしといちや濟まん。

構はず歩行いてくれ。」

「然やうでございますか。」

呼留めれば、其處にイみ、行けと云へば彼處に行く。……言ひなり次第柔順なのが、曲らぬ女

郎花の凛として、露は落さぬ姿である。

「では、失禮をいたします。」

爪尖白く小腰を屈める、袖にちらめく調の紅。

眇は柄にも似ないで、胸の躍る風情であつた。……

「まあ、待て……いや、構はず行つてくれ、立たしといちや濟まんから遠慮するんだ。歩行きながら話をしよう……」

「はい、」

と女は逆らはず、小急ぎに歩を運ぶ。背後から、

「おい、俺が跟いて歩行くと云つて驚くな。狼ではないぞ。」

「いゝえ。」

「但し轉ぶと食つて遣る。」

女は、すたく。

「あは、は、」

罪のない笑聲で、ふらくとしながら、却つて、隔りの間を開いた。

「貴方、お先へ。」

「少し待たんか。」

づいと寄りつつ、

「俺は酔つてる。然う急くな。呼吸が切れる。串戯云つたつて驚くない……自分で狼だと名告る

くらるだ、約束は違へない、欺しやせん、口へ出して言つた事は必ず間違へん！」

と誓ふが如く、雄々しい聲。尤も酒があつて、他愛もなささう。……

「虎、狼と云ふ悪獣だ。目を輝かし、牙を剥き、爪を研いで、瘦ッ腹の胴骨のぶる／＼震ふまで、肉に飢ゑ、血に渴いた畜生だ。」

おまけに、濁つた酒が、暴風雨のやうに五臟六腑に浪を打たせる。

鬢の薫が佳いな。

おい、慌てるな。其處が約束よ。飢ゑても渴ゑても、轉ばなけりや食はんと云ふのだ。が、轉

べば食ふぞ。は、は、おなじ事を幾度も……俺は酔つてるかな。」

と何故か弱い聲。

二十九

「一體、何處へ行くんだ。」

と改めて問掛けた。

女の顔は、辻燈に白んで見えつつ、向うむきの後れ毛、颯と吹く風に、そよ／＼。

「内へ……寒風へ歸りますんです。」

と云つた。彌太八の娘のお米であるのは云ふまでもない。

「寒風へ、然うか、場末だな、寂しい處だ。」

と云ふ、神路山の秋の音信が軒を渡る、此の町筋も早や寂しい  
眇は前後を眇したが、睨むが如く一眼が輝いて、

「按摩にも聞いたんだ。」

と取留めのない話を戻した。

「君は何をする人だね。下駄の齒入ぢやないと云ふんだ、俺は。あん畜生め。問ひやうが悪いと云つて、人を嘲弄しやがつて——按摩なら按摩で可からう。……癩に障つて仕様がな。おい、言つて聞かせろよ。俺は問ふ事はへただ。」

が、言つたつて可からう。君は何をするんだね。」

眇が持つて廻つた念入りの問ひに似もつかず、女は造作なく、霧の中に蒼を開いた。

「あの、お叱を被りますやうでございましたら、御見許し下さいまし。」

「馬鹿云へ。」

と其の時、強ひないのに、女が又立留まつてくれたので、勇氣を盛返した様子であつた。

「俺は探偵や巡查ぢやないんだ。」

「私はそんな風に、お見受け申しはしませんでしたが、なほ安心でございます。私は、あの……内證で商賣をいたします。」

「……内證で商賣をするか。」

「はい。」

と云ふ。

「賣るか、難有いぞ。」

と満面に莞爾した。笑を隠すやうに、はつと頬げたに手を當てて、

「俺も然うだらうと思つた。當りは着いて居たぜ。鼓を打つて知らせるのは貴様バンカラのハイカラだい。」

と調子が碎ける、酔も出たか、身構を崩しながら、

「其癖わけがわからなくつて、可恐くもの言ひ憎い女ぢやないか。」

薄暗がりて横を向いて居れば、自分の眇も隠せるものを、餘計な按摩まで引合ひに出して、詰らなく、容色を下げちまつた。

然うか。賣るのか。何だ、馬鹿な。」

「不可ませんでございますか。」



「然う、きちん／＼と極まるな。貴様、妙に気が詰まるぜ。ざつくばらん遣れ。何が不可いものか。相談をしないで何うするか、馬鹿。」  
と又笑ふ。

「では、御覽なすつて下さいましな。」

「あんな事を云つてやがる、見たよ、馬鹿。見たぢやないか。しかし何だ。鼓の緒の紅いを見ろ、それから思ひ着いたんだから、同じ狼でも毛並の可い獣だと思つて我慢しろ。……で。」

「で、いよく賣るか。」

「はい、それではお求め下さいますか。」

「勿論。」

とハタと手を拍つ。

「まあ、難有う存じます。」

と、はじめて解いた胸なる手首。燻きしめざるにおのづから床しき袖の香、はつとする、右手に小さな風呂敷包。

朝霧

三十

「彼處に見えまするのでござりますか。はい／＼、あれは、もし、中學校にござりましてな。」

「然うらしい、何うも見當が然うだらうと思つた。」

其の學校の蒼い壁が、樹立の中に透徹つて、蔦の葉のはら／＼と覗く、破壁の窓から見える、

……町はづれの餅屋兼帯御休茶屋に、うら枯れの背戸も見えて、腰を掛けたのは三千枝である。

「お婆さん、最う一つ茶をおくれ。」

「はい／＼、お粗末な事でござります。」

「感心に早くから店を開けるぢやないか。」

「いえ、最う年を取りますと、目敏くはなりますが、何事も不精がち、一向に埒はあきませぬ。

けれども、悴や嫁が、時間極めて稼ぎに出ますによつて、餘所様より、もし、あの勉強、とやら

でござります。」

と穩に莞爾々々しながら、

「旦那様は又大層お早く、どちらから。」

「妙見町の方から、ぶら／＼さ、膝栗毛が戸惑ひをしたやうだ。」

と苦笑ひした、が、其の新道の朝歸りである事は、寢の足りない顔色でも知れる。……目のふちが、ぼつとして、額髪も亂れた。色も蒼白い。

媼は膝に手を組んで、

「何處ぞ、此の邊にお尋ねなさります處でもあらつしやりますかの。」

「唯、散歩だよ。……夜が寝られないもんだから。」

借問す、遊子、君が寝られないのは心からであらう。

「お旅籠が込合ひましてお騒々しうござりましたか。唯今は御參宮も一年中の隙明で、第一寂然した時節でござりますにの。」

「然やう、お婆さん、旅籠が籠んで、馬鹿に癩に障つたよ。」

扱は昨夜は不首尾であつた。

人のいゝ媼は何氣なく、

「最う、貴郎様な、隣の間が騒々しいほど、お氣むづかしいものはござりませぬよ。」

「其の癖、寂しいのさ。寢返りをしても蟋蟀、……あゝ、身に染みる聲で鳴いてやがる。」

と朝月映る水田を見遣つた。三千枝は注ぎたての澁茶の熱いのを、可懐さうに手に取りつつ、

「何だか、寂しい處だな。」

「御參宮のお方様など、めつたにお出で遊ばす處ではござりませぬ。白子の街道口でござりましたの。澤山は土地の人も參りませぬよ。」

「何と云ふ處だい。」

「五十鈴田と申すでござります。」

「あゝ、朝月がちら／＼と水に揺れて、蟲が鈴をふるやうだね。雲は白し、露草は青し、蓼は赤し……嫁菜も咲いたな、」

と恍惚と顔を上げて、神路、朝熊の薄もみぢ、紫淡き霧を仰いだ。

が、がツくりと俯向いて、

「何うです、お婆さん、養子の口は無からうかね。」

「貴方、何をおつしやるやら。」

と蕎麥の枯れたる齒の根なり。

「いや、申戲ではない。不首尾で國へは歸られず、……人間、杓を振つて飛込むのは、此の伊勢だ。其處も方々散々で居た、まらないと成つた日にや、遣切りたもんぢやない。」

と半ば獨言を云つて、顔を背けて、  
「お婆さん、二人とも酒を斷つて、汗粉屋でも出さうと云つたつけ。」  
とうっかり氣拔けをしたらしい。はつとした様子で、顔を見て笑ひながら、  
「こゝに寝ころんで餅でも賣らうか。」

三十一

餅屋の媼は、賣ものの餅が、客の咽喉に支へたを、背後から擦りさうな手附なり。  
「何を、まあ仰有りますやら。新町新道、北町邊ならばの。また何うでござりませうやら。こんな處に、旦那様を御養子に出來ますやうな家は、何程探いたとてある事ではござりませぬで。」  
と串戯らしく眞顔で云ふ。  
「お媼さんこそ何を云ふんだ。  
眞面目に養子口を探すと云ふに、廓でなけりや相談が出来ないは些と酷からう。  
勿論な、……二人で酒を斷つて、屋臺店で餅でも賣らうと云ふ口の下から、そしたら色を着けて、看板の餅をお刻みなさい。大きく五錢どりで、人が撮んで浮かり頬張りさうなのを一番、お前さん腕を見せて、と御意遊ばす。」

あゝ、子を見る事親に如かずだ、お玉の畜生。……止んぬる哉。」  
と引摺むやうに腕を組んだが、がくりと俯向いたまゝで居る。  
「成程、お止めでござりますかの。」  
と媼さんは唯打領く。  
「否、養子を留めると云ふんぢやない。が廓は弱ると云ふんだよ。何處か此邊に有るまいかね。」  
「はい、其は折角でござりますかの。」  
と笑ひながら、氣の好い媼さんは串戯と知つた顔。それでもはぐらかさうともしなかつた。  
「御覽じまし、こんな町端れの場末でござります。貴客様など、一夜、お泊め申されさうな家も見當りませぬ。」  
それともの、もし、彼に見えますあの大なお邸に、妙齡のお姫様でもござりますなら、又格別御養子の其の相談、出來ませうも知れませぬがの。」  
と背屈みをして、三千枝の顔を覗きながら店越に戸外の方へ、西を拜むやうな殊勝な目遣。  
其處に大樹の柳が一本、枝が街道の空を包み、しつとり朝霧の中に靡く。風情は朧夜の簾に似たが、ちりくりに亂れた葉は、搦んで、切れ切れに色褪せたる幾條の房の、秋の山々を遙かに巻いて、錦を透かした趣がある。

柳の蔭に、びたりと鎖した潛門の、一面盤石の如きが見えて、壁の崩れた灰色の土塀が、つらりと向側を取廻して長く連る大構の邸のあるのが、古御所の築地の體也。

店頭に出て通に向へば、ぢき其の裏門に相對ふ。が、二日酔のあからめた顔を露出しは氣が射したか、三千枝は、横に切れた土間深く、媼の居る火鉢の前に身體を揉込んだ形なれば、柳は中學の屋根とともに、窓に描かれた景色であつた。

けれども、三千枝は其の邸を知つて居た。……目を遣る媼に連れられつつ覗きもしないで、

「あゝ。」

と云つて、それでも思出した状に目を舉げて、

「……邸は？お媼さん、あれは誰の住居だい。實はね、彼處へ用があつて來たんだが、申戲は退けて。」

と更つたやうに訊く。

三十二

「はい、あのお住居は、少し仔細がござりまして、強う寂れてござりますが、大藤様、喃、と一ツ合點ませるやうに頷いて見せて、

「御近所な舊藩主様のお控邸でござりますが、貴客様は、あれへ御用向きでお越しぢやとおつしやつて？」

と解せない様子。

「然うかい、大藤さんの。いや何うして、そんな御大名に直接用のある御仁體ではないのだよ。

……あの、何だね、裏門の角に橋があるね。」

「ござりますよ、はい、御存じでござりませうが、表門は、櫻堤、宮川の岸に向うてござります。

今お話の橋も同じ流の別れなれども、あの柳がござります所爲かして、小柳橋と申しますでな。」

「小柳橋か、

と鸚鵡返して、

「あゝ、いゝ名だ。」

と又俯く。橋の袂は、友染の路邊の蓼の花、露草の露を分けて、欄干の帯長く、裾を對岸の薄に曳きつつ、朝ぼらけの雲に入るよと、眼前さへ遙々と行方知らぬも旅である。

驛路の鈴は聞えぬが、恠くて、名におへる橋の上に、朝月の影が薄く渡つた。

三千枝の太く感じたのを見る、媼は氣が入つて。

「おゝ、佳い名でござりますの、それ故でござりませうぞ。お邸も表門の櫻とも、宮川とも申さ

いで、柳御殿と……はい、此の邊では申すのでござります。裏門の名を附けましてな。」

「其のね、お嬢さん。」

と口は軽い、三千枝は尙ほ深く物思ふ風情で云つた。

「私は裏門の處へ用があつて來たんだよ。」

「へい。」

とばかり希有な顔色。

其處を尋ねて來たと云ふ目當の邸を、誰の住居、などと聞いたり、用があるのは裏門だ、と取留めのない事を云つたが、此の水の如き秋の朝、聲も透通る三千枝の胸に、——昨夜は知らぬ事、

——何の蟠も濁もない。

彼は實に、柳ヶ下の淺茅生に、小柳橋のある處、其の裏門に用があつて來たのであつた。

惟ふに、三千枝は、もつと早く、——朝の時間の事ではなしに——日を、月を、心を、身を、此處へ運ばなければならぬのであつた。

何を隠さう、彼が這度、二度目の參宮を思立つて、苦しい中を伊勢へ抜けたのも、半分以上は此處あるが爲なのである。

見よ、彼處に——柳がある、水がある、橋がある、鎖したる門がある。……月青く、山白く、

草の錦に玉を刻んで、蟲の聲々露を散らして、尊き旭日影に燦然として黄金を鏤むる。

其處に、三千枝の思出があつた、奇蹟があつた、戀があつた、而して藝術があつたのである。

### 三年前

#### 三十三

雖然、爾時は、薄のかはりに菜種が咲いた、蓼、露草が、葦、鼓子花。宮川堤の八重の盛りで、橋の欄干に胡蝶の舞ふ、春や、遅い頃であつた。

指折り、かゝなふるまでも無い。此時より三年の以前、三千枝は初度の參宮で——二度めに奈良へ旅行した、其の歸途の事である。一親友から紹介されて、初對面で山田の資産家、其の大福屋を訪ふと、身體は瘦せたが、客を好む、太腹の宅兵衛は、當家の店頭へ腰も掛けさせず、下へも置かず、まあく先づ、と腕車を二臺、自分がついて、三千枝を妙見町の別荘に導いた。

茶の後へ直ぐに酒で、扱て先生、内宮、外宮、月讀宮、いづれ御參拜は知れました儀で、處で折角のお立寄。何よりの御土産に、大々神樂を奏げませう、が、當日も此れ頓て晩景、社務所へ申入れまするにも時刻が遅い。其は明日の事として……彌次郎兵衛御宿と云ふ藤屋も今は代がは

り。油屋のお紺の部屋を見物も道者過ぎます。お泊は却つて二見が可い。其處で日の出を御一覽、鳥羽街道を朝霞、春風に宙乗りで、日和山へ御案内と……言通り。山は萌黄に野は紅、水は白く、蝶は黄なる、新雙六の繪の上を、賽を振る苦勞もなしに、振袖に包まれて白粉の中を轉がるやうに、あれ〜と云ふ歡待振。

「私に何の徳があつて……いや、仕事はまだ未熟です。」

と女の妓が取巻く中で、生酔が眞面目に成るまで。

三千枝は先年、修學旅行の夏、奈良の旅店で、晝飯をかなじんだ懷中から、歸りがけに京の四條で買つて乗つた、十五の梨を、辨當がはりに函根以東まで食續けて、蒼く成つた當時を思ふと、今や見晴しの大路に塵埃の立つのは、荔枝を乗せた騎馬かと疑ふ。

既に爾時から、大宅に荷ふ處は少くは無かつたのである。

其の年、伊勢を發つて歸る日の事であつた。

今度来た時は最う他に轉任した、土地の中學の校長に義理で訪ねなければ成らない遠縁の男があつたを、つい延々に過したが、行かすには濟まないわけで、夜汽車で經つと云ふ日の午後。

件の繪雙六の中から抜けて行く身には、恰も吉原の朝歸りが、根岸に神官の伯父があるやうな心持。學校へ車を着けて、校長室へ通されて、櫻の木造の巖丈な椅子に對向ひに成ると、すぐ其

の椅子に太鼓が入つてトトンと糶上りさうな宿醉もの。運動場の櫻の影が、廊下へほんのり映るのさへ、ぱつと眞紅な燈に見えて、生徒の行交ふのが伊勢音頭の姿に紛ふ。這個二日酔の木彫家が、素面の然も教育家と話の合はう道理が無い。

口數よりは冷水を重ねた、茶碗の方が多かつた。

「あゝ、美味い。」

と云ふと、校長は苦切つて、

「伊勢の水は甘いか、君は螢のやうだ。」

と冷かに笑つた。

### 三十四

「君は螢のやうだ。」

と云つた……其の言葉と、女子教育を不可なりとする輩は、洋燈が危いと言つて、行燈を點けるやうなものだ、と校長が窪んだ目を光らして、得意らしく茶色の頰髯を動かしたのだけ覺えて居る。大方は三千枝が酔に乗じて、新道あたりの無教育な風説をした爲であつたらう。……自分では何を饒舌つたか、よくは知らないで、酔覺の水を煽りつけて飲んだばかりか、右の螢

で、一杯頭から浴びせられたやうな、然も不快な思で、椅子の凭へ確と手を掛けて衝と立つて學校を出たが、青煉瓦の屋根を離れた、あなたの空は、しつとりと霞を染めた花の雲。  
車夫に問へば、宮川べりの櫻堤の花に候。

「一廻り廻つて行くぜ。」

此の日大宅は、三千枝が歸るまでを、先んじて新道の戸田屋で持つ事に成つて居た。

春の日は永けれど、汽車の時間は慌しい。頃刻も早く落合つて晩食を共にと、云ふのであつたが、櫻堤の道草は、土産話の座興であらう、其處此處道しるべをしてくれた、其の人の志につけても、抜掛けの見物、一つも多く名所を見るのは、大宅を喜ばす功に成ると、車ながら堤を抜けた。……

また隅田とは趣かはつて、宮川の流に散る櫻は、媚かしいよりも清らかであつた。

暮れもやらぬが、日は遅し。……賑かな人出さへ、塵埃の立つまでではない。浅緑二本三本、花の中なる柳靜に、霞を澄す青い水。色白く、酔を拂つた時、三千枝は——こゝに名を聞いた——其の小柳橋を渡つたのである。

俣は近路を取つたと思しく、堤の花の中を、畝々と潛つて、一廻りして衝と橋に掛るや、向う袂の緑の影か、菜の花も寂寞して居た。……

其處を過ぎる時、三千枝は廣い花園を抜けて、柳の廊下を渡ると思つた。

後で聞いても、ついしか然うした験は無いと云ふ。……三千枝は橋の欄干に、づらりと雪洞の並んだのを見たと思する。まだ點れはしなかつたが、夜櫻の風情を添ゆる町の催よ、と頷いて通つたのである。が、但其の雪洞の形は、菱形に枠を透彫で、嚴島の渡殿を思ふ、清水の廻廊を思ふ、奈良の御堂を思ふ、宮、寺に掛けた燈籠の一種に似て居たことを忘れない。

水が揺れて、渡越せば、颯と額に掛る、橋袂の其の柳を抜けたが、

「あゝ！車夫。」

と慌しく呼び留めて、

「一寸待て！彼處。」と母衣越しに振向いた。

丁と柳の芽の薄ら青い下に、雛壇のやうに見えて、一枚地に敷いた緋の毛氈か、知らず、紅の店を開いて、木の彫刻物の數を並べた。

骨かと思ふ、白い棒の如きが、ばら／＼とある。

此に屹と目を着けた、三千枝の瞳に清い工人の輝があつた。

腕車を引返した處は、橋から小半町通越した——三千枝は今も覚えて居る——丁ど此の餅屋の前から。

と、腕車を下りると、柳の下なる毛氈一枚の大道店へ、はじめから蹲み込んで、腕を組んで、熟と視た。

故と腕車を戻したくらる。——一瞥を與へて過ぎようとは初手から思はない熱心さで。

店に並べたもの、と云ふのは、熟視ても見當の着きかねる、一種不可思議な作品。玩弄とも見

えれば棚飾、置物の類にや、禁厭の御符とも言はば言はる。夕顔に目鼻を描いたらしくもあり、

唐黍を削つた面にも似た、をかしいと思へば薄氣味が悪く、道化た、と見れば底に威嚴がある。

大きいのは一尺どまり、七寸、五寸ぐらるまで、品數凡そ三十許。いづれも白木で、古びも着

かず、埃にも塗れず研出したやうに眞新しい。

不殘同じ形である、……更に雛の首だけを揃へたと云つても可い。近い處は、國、郡、町、朝

顔の山の村、菊の谷蔭の里に見受ける、あの、(おしやもじ様。)と云ふ、軒に掛けた本尊に顔を刻

んだものと言ふと一番分る。中窪みの、しゃくれたのではなく、鼻筋の通つた瓜核顔。が、頤の

下は直ぐに柄で、杓子の手に肖如である。眉は目は口は、壁の樂書、惡戯のへまむし入道。消炭

で塗つたか、釘の尖で突いたか、と思ふ粗雜さで、人間の先祖は一錢猿と云ふ作り方。其の癖、

何となく、瞳は清しく、口許は尋常に、髻髻として藤長けた面影であつた。

(お雛様かな。)

折から舊の彌生なり、三千枝は初め然う思つた。

が、見る中に又……陰氣な薄暗い影が射し、柳の色に凄味が添つて、譬へば其の雛に仇なす、

平親王一類の首を並べたとも言はれよう。

神か、鬼か、魔か、人形か。

鎖されたる堂、朽ちたる祠、落葉の中、薄の奥、世には名も知れず姿も消えた、神靈と鬼氣と

がある。……亡びたる勇士、虐げられたる美女、祟りなす蛇、其は鬼。忠臣、孝子、烈女、節婦

の、其は神。數ふるに違はない。

草深き野中の森のつまつ社

こや花薄穂に出づる神

夫木集にありぞとよ。

今眼前思出す……三千枝は其の目口刻める人の首を、深く、暗く、且幽に、美しく、由緒あ

るものと見た。

勿論、其の品を開いたばかりで、橋の袂にも、町家の軒にも、立違つたと思ふばかりの人影も



見當らなかつた。

「此は何にするものだい。」

賣人さへあれば一言で分る筈。はじめから誰も居ないのであつた。……

三千枝は而して、爰に此を賣るのは、頭巾被た翁でもなく、手甲かけた娘でもない。山伏か、出家か、尼か。就中、最も相應しいのは下げ髪で緋の袴穿いた、神巫か神おろしの類のものよと思つたのである。

三十六

「欲しいな、此は一つ是非欲しいぞ。」

然りながら、三千枝が其の中から一個手に取つて見惚れたのは、怪しい人形の首の如き其の品では無かつた。

三十ばかり同じ首の並んだ間に、二ツ交つて、片袖づ、兩袖の木彫があつた。鑿の牙は、同じ手に成つたらしく、見るに優劣は無いが、穂に出づる神か、影に立つ魔か、差覗く鬼か。恚う數多く揃つた白い首は、格子に一ツづ、目鼻の着く古御所の妖怪、枕頭を轉がる生首、上に成り下に成り見るく、盥の如き顔と成つて、蒼白い額、鐵漿つけた齒を露出に、けらけらなどと遣りさ

うで、活けるが如き名作と思ふにつけても不氣味で成らぬ。

ト其の袖形した彫刻物は、偏に床しく可憐いものであつた。然も其の刀の使ひぶりは、鋭きこと弦月の如く、柔かなること蝶の如しで、天衣無縫と云ふのであらう。刻める線は、霞を羽二重に縫つたやうな、一つは内へ搔込んで、色香を、思を、恩愛を、胸に乳に鳩尾に包んだ袖。一つはなよやかに外に開いて、情を、戀を、誘ふ手に、優しく靡いた袖であつた。花の雲は、薄緑なる柳の葉越に、春の夢の模様を染めて、白木を削つた兩袖に、仄に色を宿したのである。

衣兜にも袂の底にも、鼻紙の中にも入る。が、片帆を沖に視むる如く、尾上の霞を見る如く、三日月を仰ぐが如く、其の遠さ、遙けさ幽さの計り知られぬ思がある。――

手に取ると、鶴の羽を軽く据ゑる心地がした。

「買ひたい、是非買はう。」

と向したが、――前にも言つた、――露店の主らしいものは愚かな事、誰も居らぬ。……柳の中の薄明りは、花の堤を抜けた目に、月夜の幻を見る様で、驚いたのは、其處に腕車を置棄てたま、車夫の影も見えなかつたのである。

ト正面一帯、右の土堀で、恰も露店の眞後に、隧道の口の如き馬蹄形の銅張の、づつんと重さうな潜門があつて、其が半ば開いた蔭に、小隠れた立姿、半身を見せた美しい女がある。

ふと目を着けると、見られたと思ふ振で、ちらりと動いて、肩から隠れさうになる黒髪と、雪なす佛を慌しく目で追つて、

「一寸。」

と呼んで急に留めた。

女は、呼ばれて、胸を引きさまに片袖で襟を隠して、ふつくりとある銀杏返しの前髪を、俯向いて立留まつた。柱を楯の眉柔しく、染めた脛の色香こぼれて、濃く成る睫毛は言はぬ應答であつた。

「失禮ですが……此の店のものは居ないのでせうか。」

爾時、清い目で會釋をすると、

「如何でございますか、先刻から誰も見えないのでございますよ。」

「はあ、先刻から。」

錢湯へ行つた女房のやうに、(先刻から。)と聞いて直ぐに歸る、と見當の着く代ものでない。

「弱つたな……其は困りましたな。」

と袖鑑で、其の片袖にも映りさうな、女の艶麗さを且つ瞻る。……

三十七

「……貴方、那樣にお望みでございますならお持ち遊ばしては如何でございます。店を擴げたなりで参つたんでございますもの、最う直きに戻りませう。私は此處に見て居まして、賣ります人が見えますと、其の次第を申します。ですから大事ございせんよ。」

と初々しいが、判然と女が言ふ。

三千枝が、自分旅のものであること、中學へ人を訪ねた歸途の事、其の日の夜汽車で山田を發つ事、やがて時間の迫る事、而して、大宅が既に戸田屋に待構へて居る事——唯腕車を留めたのさへ不意の隙取りである處へ、ほどの知れない露店の主人の歸るまでは待兼ねる。……品物は斷つて買ひたし、定店ならば人傳にも頼まれよう。岸の陽炎の處定めず、遁水に紫雲英の色を染めたやうな毛氈の一枚店は、浮草ほどの根も持たず、間も無く消えさうな日脚である——待つには待たれず、持つては歸れず、然ればとて下へも置きたくない。掌の玉とも思ふ由。思入つて三千枝が途方に暮れたのを見て取つた時であつた。

女は頼母しく然う云つた。

見も知らぬ旅の青年のために、然うした優しい心づくしを、不審るだけの餘裕もなく、三千枝

は思掛けぬ便宜を得て、只管一議もなく其の言に絶つた。

處で價値である。其の作の手に際よりすれば、持合せた懐中の、十ウの上を十ウ合せても十分と  
は決して思はぬ。とすれば到底買受ける力はない。

雖然、一山百錢と云ふ店つき、然も番をする雀も無しに路傍に置放しの賣物である。主が居て  
價値を問へば、精々荒物屋にあり來りの杓子に、件の目鼻。お刺があつても、眉と口を添へた程  
に相違あるまい。……

と見計らつて、兎に角、價を預けようとする、女が其は困ると云ふ。斷て其は困ると云つた。  
「幾金ですか、私には分りませんもの。お金子をお預け遊ばすのなら、私は存じませんから。」  
強ひて推返せば、其のま、植込へ隠れさうな、裏門を小櫛の棲。女に杖を返されては、殆ど取  
着く島が無い。

其處で此から行く先と、大宅の名を繰返して、

「いづれ更めてお禮をします。」

神風に、鳥のまぐれて渡つた如き、自分の名を名告るより、後を任せる氣の——又此れほどの  
事は確に引受けてくれるに疑は無いと信じて、——山田の金満の名を、清しい女の目に映して、  
而して顔を見合せた。

容色は類多からじ。

見返つて柳を離れる。……女は柱に雪なす手して、顔を上げて見送つて、緑の風の後れ毛を、  
細く押へながら、——俯向いて、熟と露店を賸めた。

二三度俚の上で振返つたが、其切り面は上げなかつた、其の時の風情を夢にも忘れぬ。

美しい人の然うした姿は、男の爲に、ものの身代りに立つ、思定めた氣組が見えて、三千枝の  
負債を引受けて果すまでは、露店の主の歸來が遅いと、柳と共に黄昏れて、朧夜に迷うても、花  
の曙を待明す面影が色に出たのであつた。

三千枝はキリくと胸に響いた。暢氣なのは車夫で。

「お花見頭で一杯引掛けて居ましたで、婆様が餅屋で茶あ飲んで來ましたでな、はい。」

三十八

「何でございますな、先生、新町、新道の綺麗どころ——これでも、別嬪」と莞爾々と胸しな  
がら、

「先づは美しいのが揃つた處で、地ものの掘出しを御吹聴は。……」

非ず、掘出しでも、吹聴でも、然うした意味ではない、と三千枝が眞顔で辯解しても——座に

妓を揃へて戸田屋で待構へて、既にとろ酔だつた其日、點燈頃の——宅兵衛一向に受着けず。

「な、先生、些と其は阿漕でございませう。否さ、罪な次第で。何さ、殺生な事。」とお押へ、お押へで推着ける。

年増の藝妓が又心得顔で、

「もし、柳様。」

などと言ふ、人の悪さ。

「貴客、おあけなさいまし、あれさ、お盃洗へちやございませぬ、其の潛門でござりませぬ。」

と強ひつける。

目ざされるのは、唯一人で、對手は女中交りに十八九人。金屏風の陣幕を切つて、緋と友染の草摺長に、鬢の九枚鍔、金簪の前立物。翡翠の星兜を晃々と輝かし、花の枝の打物取つて、透もあらせず媚めき蒐れば、巳の時ばかりの酒合戦に、刻限の午を立直す力なく、我が名の太矢を蓑の如く折掛けて、三千枝は意氣地も無く酔潰れた。

「大福さん、しかし大切な事です、其の、其の娘に……」

「柳様、御執心、」

「御心中。」

と哄と囁す。

「先生、先生其の御用事をお兼ねなすつて、一層最う二三日御逗留の事ですな。

直ぐに御家へお泊りが可うございます。」

「飛でもない事を、」

と其でも岸破と起上つた——本性違はず、自分の都合にも、人への會釋にも、最早や切詰めた日取りなのであつた。

然も、懐にした、木彫の片袖は、話の性根でありながら、何故か、然うした、酒と繪の漂ぶ席には、明白に持出すべき品では無いやうな氣が頻で、確と、身にも心にも秘めて持つた。

大福屋は車を聯ねて、一座の藝妓をつらりと率ゐて、夜櫻の巷を停車場へ見送つたのである。三千枝は車の上で、ふらくとして、頭の中には燦と無數の赤い提灯が點れるやうな心持で居ながら、町が變ること、辻へ曲ることに、時々、青い影が颯と映つた。霞が水で分る、如く、座敷へ月が映す如く、松明に露の注ぐが如く。

其處に、青柳があり、橋があつて女がイむ。あの美人が立つ。黄昏る、緋の毛氈を贖めて、倂清く立ち暮す——濡れた其の水晶のやうな瞳に映つて、夥多の顔が、フト貝蔽の貝かと並ぶ。

此の景色が、描ける如く、刻むが如く、鏤り成す狀に、衝と來ては映つて、消えて、又衝と來

ては映つたのである。

其の娘の然うした姿は、露店の主に負債を拂はないで、不思議な袖を手に入れた、我がための身代りである。犠牲である。

三千枝は爾時、美しい身代りや、と神都の春の錦の上に、白の糸を以て、すらくくと曲水を刺繍した、と思ひく、現々。

三十九

肌身離さず爰に在焉。

海に龍宮を想ふが如く、月に桂の片袖は、鑿、小刀の跡も見えない、羽衣の羽一枚。蒼空から雪を降らしたやうな素材の彫刻でありながら、目を重ねて見れば見るほど、血ある如く、肉ある如く、花に薫のある如く、其處とも分かず、木目を透して、底に潜んで、……其夜の趣、錦に銀の刺繍が、髣髴として露れて、馥郁として、温かに、或は玲瓏として涼しい。

三千枝は只管に思惑ふ。

世にげに、恁計りの名刀ありや？ もし、それ、目に刻んで忘れない、我身代りの美しい女の影が、瞳に映つて、倒に袖面に宿るにあらずや？

孰れにもせよ、忘れぬ人の面影である、可懐しき伊勢の姿である。

山田の大福屋の音信を聞けば、……扱、其後、所々聞合せ、等閑ならず、始終心掛け候へども云々……とあつて、——第一宮川べりの其別荘儀は、種々怪しき風説有之、怪しからずと申す仔細にはござなく候へども、舊弊至極、何か祟りありと申傳へ、人棲まぬ館にて、不斷別荘守一人ばかり候趣、然やうに妙齡の美しき女の御目に留り候段、不可思議千萬に存し候。尤も日は忘れ候へども、其年其月あたり別荘守の心得にて、鬱屈したる邪氣を拂ひ候。自然の禁厭にも相成るべきかと、櫻時分大庭の花盛り見事なる折から、諸人の縦覧を許し候ことござ候よし。其の節、随分人出入りござ候だん、或は當時花見に参り合せ候婦人の一人かと存し候次第、右の別荘守申居り候事、次手を求めて承り及び候のみ。

先生にも一方ならず御懸念、全く御尤、某とても其の節の大失體、おわびかたぐ、何とぞ御心の通じ候やういたしたく、種々手を廻し、八方奔走仕候へども、聊かも手掛りのなきに困じ果て申候。

偏に御再遊を仰ぎ候——頓首。

——宅兵衛——

恚うした意味を幾度も繰返された。三千枝は漫に、玉の緒さへ揺がぬわけには行かなく成つた。其の結果である。

神の都に、ひとへに神を求むる心で、謹んで其の片袖を捧げて再び来た。何は措いても、負債を果すべき義務がある。

三年越、家に、道に、ともすれば銀河の如く、颯と一條清らかな水の末に、一本の柳の蔭に、麗やかな女の黄昏れてイむのを、日中とも言はず、夜半とも言はず、幻に見るのであつたが。

御裳川の裳に近く、其の袖に包まる、身と成ると、南無三寶、着いた晩に大福屋が、やあ、と煽いで、扇を揚げて、——新町へ、新町へ！……

四十

「まあ、お可懐い、柳さん。」

と、新町ではまだ其の時の事を覚えて居る藝妓があつて座に侍した。其は然し無事だつたが、三年以前には見えなかつた、水際立つた一人、其の中に、呀、尋ねる天女が天降つて、中年増に

成つたか、と三千枝の驚いたくらゐ、蹴出被の水色が、金屏風の繪の芙蓉に擲んで、素足の雪が羅を透いた、婀娜ものこそお玉であつた。

三千枝は初めて見たのである。

「……柳さん、」

と外さぬ手練、速に渾名を覚えて、派手に笑つて呼掛けて、

「些とお靡きなさいまし。」

で、小用に立つた廊下の風に、そよくと纏れた袖。月影膚に染み透る、二の腕が背に掛る。

……

事爰に及んでや——と堅く出直るまでもない。三千枝は神を求むる以前に、禁斷の果實を味つたのであつた。

以來、神聖なる、あの、柳の下の一大事を、お玉に——柳さん——と洒落て呼ばれて、素面の時でも、

「應。」

と返事をするやうな、先生、青さも念入りな緑の色濃き、當夏よりのそまり方であるから、忘るゝとも無しに、宮川堤は等閑に成つて、あらうことか——今夜茲に来て、別荘の主を尋ね、小

柳橋の名を聞いたのは——大福屋に客となつて、やがて半年。  
「あゝ、濟まない！」

が、既に晩矣。

當人の心、魂、それは兎に角、木彫の片袖は空蟬の藻脱けとも成らず、落しもしないで、身を離さぬ。

然し、膚に添へた其の袖は、親の位牌を懐中にして遊ぶと同じで、お玉の膝を枕の時など、時懐劍に觸れたやうに冷りとして肝に應へた。

敢て、色戀に就いてではない。

果さない負債である、爲遂げない製作である。まだ出来ない仕事である。森の御堂の本尊である。……

不思議な袖を不思議な名作を思ふにつけても、手は鈍る、心は沮む。己を恥ぢて、餘りと云へば及難きに、はじめは模範として學ぼうとしたのが、中頃は喧嘩腰で、

「何の、大道店のがらくたが！……」

と思ふ、其のがらくたの眞似も出来ない。のみならず、言はうやうなきは、其を身に代へて與へた娘に、第一借を未だ返さない。……

此を負債の随一として、大福屋の借は又莫大な上に、御堂を一つ背負つて居る。……茶屋にも借れば揚屋にも借りる。ホテルに借りて、お玉に借りた、負けた借りたが幾干ほどやら。

茶代も未だ置かないのに、餅屋の媼さんの優しいも借のやうで、莞爾されるのも借のやうで、返事をされるも借だ、とすると、伊勢中が借に成つて、あゝ、空を行く雁の聲。

いや、洒落處か、「彼處に……」

と大藤の別荘を指さされて、小柳橋の名を教へられた時、最う目が眩んだ、——草の錦に白銀の水が柳の下。

三千枝は頭を抱へてドンと倒れた、「お媼さん、後生だから、休ましてくれ、少し。……餅は竹の皮に包んどいて貰はう、其奴を辨當に持つて、仕事に行くんだ。」

### 粉蝶黄蜂

#### 四十一

「やあ、研屋の姉ぢやねえか、お前、妙な處に店を出したな。」

橋の袂の柳の下で、薰の高い巻蓑を喫しながら、片手懐手でぞろりと立つて、恚う聲を掛け

たのは服部銅三郎である。

這個實業家は、店と云つた。……其處に、薄筵の一枚仕切で、土塀の裏門を小楯に取つて、樹の幹の方へ少し横向に端然と坐つて、姉さん被の手拭が包ましかで奥床しい。小さな臺で、楊枝を削るのは果してお米で。

賣物の小楊枝、楊枝の束を、散るや柳の絮よと並べた。中に小綺麗な風呂敷あり、——心づくしは此でも知れる——其上に、あの、歌仙、大津繪の小人形。桔梗の狩衣、桂の撫子、刈萱の墨染衣、薄紫は藤袴。日向に残る蟲の音に、旅のあはれを知顔に、お米の棲を力草、絶らる、身が葛蔓の柳を便る風情である。

唯、薄のやうな雲の上を、颯と通つた渡鳥、影の幽に遙なもの、此の人形の魂めく。

お米は仰いで目を背けた。

銅三郎、じろりと視て、

「何うしたよ、姉え、うむ。」

と舌たるく、億劫さうに片手を出して、指環をギラリの、願撫でのニタリもの。

お米は目迎へた會釋のみ。で、姉さん被に眉を隠して、餘念なく白魚の白きを削る。

願をだふりと銅三郎、肥つた咽喉で獨で頷き、

「恥かしいか、……極が悪いか。俺に見られて、はッはッはッ。いや、姉え、何も恥かしいも極りの悪いもあるものぢやない。俺は其處が不便なのだ、な。

蟋蟀箱の茅屋でも、お前、内に坐つて居れば、研屋どのが娘子よ……まだ、まあ、荷を擔いで戸外を賣つて歩行間は可い、此ぢや大道の土下座ぢやねえか。

可哀相によ、何か、親仁はがッくと五位驚よ。お前は内に居て内職をただけでは追着かなく成つたんだな。

可哀相によ——俺ら嘘だと思つたい。……頼みてえ物もあり、相談してえ事もありよ。……其後三四回もお前の小屋へな、自分も出向く、使つてる奴も遣つたけれど、何時も門の戸が閉つてら。がた／＼遣ると揺ぶれる、づか／＼歩行けば町内地震だ。

何した知らんと氣に懸けて居た處よ、昨夜何だ、彼だ。……俺が目を掛けて遣る、按摩で(鵜)と云ふ坊主よ。其奴がお前、話の次手に、お前が此處に出て居ると言ふぢやねえか。

眞個か。

はて、其奴が事實とすると、大なり、小なり、たとひ假初にもしろ服部が酒の酌ウさした姉が、大道に打坐つたと成つては、何は掛け、俺の估券に係る次第だ。

見て遣らう。が、眞個に橋の詰へ出て居るか。故々車を軋らせるんだ。服部自身に駕を旋らす



次第だから、貴様、他の事とは違ふ。法螺を吹くと唯は置かねえぞ、と威かしや、お旦那には唯は置かれたくございやせんやすでございやす、と小鼻をヒコく遣りやがる。は、は、は、それにも弱つた。これにも祝儀よ。」

四十二

銅三郎は憚らず人形の上へ、パツ／＼と卷苘の灰を散らして、

「俺も氣に成るからな、例より此でも早起だ。俵で橋向うまで駈けさしたつけが、まさかお前、地面に筵と云ふものに逢ひに来たと成つちや、奴等にも外聞だに因つて、つツと馬場先に控へさせてな、親の精進に餠餅を食ふと云つた面で、御足勞に及んだらうぢやねえか。仇や疎に思つてくれめえ。」

と頭から一呑みにした、自身の圖體。

お米は手拭を屏風にして、片頬に後毛を見せたばかり、振向きもしないで楊枝を削る。

「真個だ、仇や疎に思ひなはん、え、おい、姉さん、姉え。」

「はい、難有う存じます。」

「難有いか、何有、禮を云ふのは未だ早え、此からだ。うむ、此から其の難有がる相談をして遣

らうと云ふのだ。時に、」

と裾開けに蹲む時、裏摺れに例の甲斐絹の股引をシュツと鳴らす。

「何うして、お前、又恚う落魄れたよ。吃の親仁が砥石も乾上つたと云ふ次第かい。」と、じろりと覗く。

お米は指を外らして、遮るやうに鬢の毛を一寸拂つた。

「否、同じ事でございます。相變らずなんですから、」

「相變つて居るぢやねえか。何が同じ事があるものか。恚うして大道へ出てるが何うだい。」

「貴下、家に坐つて居りましては、澤山商ひがございませんで。」

銅三郎は皆まで言はせず。

「それ見ねえ、立行かなく成つたんぢやねえか。俺ら其が不便だと云ふ事よ。……相談して遣る。な、俺が一番小指程の力を入れて見ねえ、此の破筵あ、立處に緋縮緬の帆になつて、寶船の宙乗だ。」

よ！心配しなはん。後とも言はず、晝飯を高時繪で食はして遣らう。こんな大道店は引剥つて打棄んねえ。

あれ、横を向く、は、は、は、可愛い女だ。

とお米の打背いた頸脚に、魂を背筋へ打込み、溶けさうな目色をしたが、ふと街道へ眉を擧めた。

「ちよツ氣色の悪い。柳の下に蹲んでりや、馬の尻を見せやがら。馬士め、向うへ寄つて通りやがれ。

うむ、姉え。拾上げたと成りや其の服装でも構はねえ。俵は橋向うに待たせてあるから、乗せて遣らう。行先は俺が指圖だ、黙つて歩行びな。

但し筵だけは打棄んなよ、如何にとも見ともねえから。

何しろ、こんな處ぢや、身に染みて話も出来ねえ、さあ、おい、早く店を片附けるんだ。尤も打棄らかして行つたつて構はねえかな。うむ、姉え、何うしたんだ。」

お米は、ちやんと向直つて、前垂を折つて手を支いた。

「難有う存じますが、まだ店を開けましたばかりでございます。此から商もしなければ成りません。何うぞ……あの、御免なすつて下さいまし。」

柳も紅い日當りに、六歌仙も大津繪も、揃つてお辭儀の影法師。

宮川堤を鬮賣る聲、秋空澄みて遙なり。

四十三

判然更まつて斷辭を云ふと、其の意を得ない顔色で呆れたやうに瞻つたが、銅三郎横を向いて唾を吐いて、

「馬鹿な、分らない婦ぢやねえか。え、分らねえな。其のお前何だぜ、商賣か、此でも商賣なら商賣よ。……其のお前、此何だ、こんな商賣はさしたくないから、爲ねえでも立行くやうに、可いか、お前ばかりぢやねえよ、吃の親仁も困らねえやうに相談をして遣ると云つてるんだぜ。

え、姉え。」

お米は正的に、すつと鼻筋の通つた面を上げて、

「ですが、あの、此が家業なんでございますから。

「家業と云や、夜鷹だつて家業だい、へッ。

と吐出す、吃逆留と云ふ投げ舌。

「何しろ分らねえ、口で言つたんぢや何うも通じねえで焦つてえ。が、其處がお前の身上さ、は、は、は、多寡が恠うだ。此處にありつたけの代ものを捌いたえは、今日は遊んでも仔細はなからう、然だらう。よう。」と推して言ふ。

「え、」

と外したさに、お米は又打背く。

「可、總仕舞にして遣らあ。然うすりや寸白の起つた夜鷹ぢやなし柳の下に筵あ敷いて坐つても居られめえ。自然とそれ空身で袖を抱いて立つ處を、直ぐに俺が玉の輿だ。もの事は仕切が肝要、第一早解のする奴よ。」

「さあ、筵ぐるみめて幾金だ、……幾金だよ、おい幾金だツてんだぜ。」

お米は、其の氣でもなく品物を見廻したが、あちこち困じた目を外らしたのである。

「私には、あの、一寸分りかねますんです。濟みません。」

「うゝ、うゝ。突包みぢや大束で勘定が仕切れねえか。無理あねえ、な。お前、そんな了簡で、それ一月分の小遣だ、と百圓紙幣を掴ましたら、何處へ何う振撒くだらう、疾く其のまごつく様子が見てえものだ。」

いや、そりや追つてのことよ。一所に勘定が出来ねえなら、一に一加すの二と行かう。吝な樗蒲一のやうだがな。處で此の小楊枝の包は……と、スイ〜赤蜻蛉の影法師を交せて、柳の枯葉まで算盤珠に當つた處で、

と黄金の指環で縷つて、

「たかが知れてら。處で待ちなよ。」

と手を控へて、フンと鼻息の嵐を與れたは人形である。ト秋風よりは身に沁みたか、颯と色が褪せた風情で、ごしや〜と小町も業平も一團

「……時にお前、妙なものを賣るぢやねえか。え、？大道で楊枝を商ひながら姉様ごっこでもありやしめえ、賣りもんだらう、あゝ？」

「は……い。」

「何だい、こりや、有平糖の乾物のやうな、駄菓子屋の落雁見たいな木偶坊は？」

何處の國の生れであらう、尻上りな聲で、(木偶坊。)と云つた。

いや、人形同士、コト〜と肩を揺り、カタ〜と袖を鳴らして、磨は有平糖だ、と憤然とすれば、みづからは落雁さ、とツンとひざる。木偶坊とは愚僧が事か、と泣坊主はベソを搔く。ものは言はぬが、動きはしないが、むら〜と成る影法師が、お米の露の瞳に宿る。

四十四

お米は袖で庇ふやうに、膝をすらしつつ前へ出た。

「此は何でございます、頼まりましたのでございます。」

「頼まれて、」

と尻上り。顔を指の尖で突き上げながら、

「販賣をするんだな、うむ、然うか。」

「はい。」と言はない次第には行かなかつた、お米は併し、（頼まれて販賣をするか、）と聞かれて、  
恚う答へるのは、何故か作人にも濟まないし、自分でも不心服な気がしたのであるが。

「專賣特許出願中、廣告がはりと任り、大廉價を持ちまして大道御披露に及ぶと云ふ奴だ、よくある奴だな。」

とコツ／＼指の肚で突き廻す、と中でも氣の弱い華奢なのは、ぶる／＼と震ひ戦く、歌仙の恐  
慌察すべく、浮世連の憤懣想ふに堪へたり。

其を否とも留兼ねる……

「否、廣告代りだの、御披露だの、そんなものではありません。」と髪の艶ほど明瞭した聲。胸細く  
着て居た半纏の襟を開ると、色は褪せたが紅絹が覗く。今めかないのが尙床しく、秋の雲に冷く  
冴えて、膚の透くより媚かしい。裏を引いて然り氣なく、人形の上に蔽うて、銅三郎の手を遮つ  
たは、裳に情人を忍ばせた、裯襦袢の意氣がある。

ト松明の火の如く瞳を射られた、銅三郎は、半纏の裏の其の紅に、魂を奪はれて、我を忘れた

顔であつた。

「愚圖々々しねえで、」

急に前後を胸しながら、

「片を附けて早く行かうぜ。な、姉え。さ、買ふ物は買ふと、此の木偶坊は幾金なんだ。……問  
ふにも及ぶめえが、まあ極りは極りよ。」

お米は惱しげに差俯向いた、……嵐待つ間の静さである。

「焦つてえ、幾金だてんだい。」

「あの、お氣の毒様なんですよ。」

と顔も上げず、打案する手を胸に置くのが、眞白に半纏の其の紅絹にむる。

「何が氣の毒だい。」

「貴方、少々お價値が張りますんです。」

「價値が張る。」

と口を曲めて、金齒を剝いた。

「は、は、は、いや、笑ひごとぢやねえ。娘子の言ふ事なんぞ、蟋蟀が、鳴くほども氣にするや  
うな男ではねえがな。恚う、些と前後を見て口を利きなよ。」

品物の値を問ふのに高いとは何だ。何だ、高いとは。」

「あら、まあ私は。」

と怯えたやうに胸の手を筵に落す。

「否、憤つて言ふのぢやねえ。人を見ねえ、人を見ねえ。そりや商賣だ。進退をするも可愛い奴よ。お前だから憎くはねえがな、餘りと云へば見境がねえ。」

俺に向つて、お價値が張る、は、は、は。」

「否、然う云ふ次第ではありません。」

此までも皆様が仰有いました。

大道店で私のやうなものが賣りますのに較べて、と申すんでございます。

「分つた、分つた。が、矢張りお價値が張るんだらう。面白い、さあ、うんと張れ、突張んな。」

と又ニタリ。

「お前が反るほど山に積むぜ、すばりと出すわ、癪を起すな、は、は、は。」

四十五

銅三郎は大口開いて、頭から一呑みに笑掛けたが、お米の被つた手拭が、兜の如く、かつしと

支へて、思はず其の金齒を閉ぢた。

少時黙つて、唇を引曲げて、

「仰向けに反らずば前のめりに叩頭かな。どつちでも可い、身悶えして、手足をばたくさせろほどの金子の多寡を言つて見ねえ。……木偶坊のやうに、と云ひてえが、木偶坊の方はそれ、動かしや動くだ。そりや、轉かせば轉ける。」

と搔廻はすと、包み果てないお米の半纏の蔭に、粉蝶黄蜂狼藉として怪からぬ風情哉。鬼が小町に凭れ掛りや、瓢箪が鯨を壓へりや、馬の僧正が銀猫と同じ法衣の袖を契る。

「な、おい木偶坊の上を越して、お前柔らかな身體の癖に、絹張のしんし見たいだ。ピンと澄まして居られちや焦つたくつて堪らねえ。一言で極る事に、さあ、幾金だ。負つた、負つた。……此方で負つたい。おい、幾金だ、幾金だ、幾金だ。」

と焦れ氣味に握りたさうな手の指を突張らして、人形を掬ふが如く、掌で煽立てる。

お米は得堪へない様子で、半纏の襟を、白く壓へて、胸を捻ぢつつ横さまに顔を引いたが、衝と座を開いて又筵の上に兩手を支いた。

「折角でございますけれど……」

「何だ。」

折角と聞いただけで、銅三郎の聲が變つた。  
爾時、悪怩れた色もなく、

「何ですか、申兼ねますんですけれども……」

「けれどもとは何だい、何を申兼ねるんだ、故障があるやうで變ぢやねえか。」

「え、此は、あの、」

「断乎として断るのを、さすがに一寸言浚む。……」

「少々、差上げ兼ねますのでございますよ。」

「差上げ兼ねる、……賣らねえのか。」

「はい。」

「お前、今賣物だと言つたぢやねえか、……言つた……な。ぢや賣られねえのぢやねえ、賣れねえのだな。俺に限つて賣れねえのだな、然うか、確に然うか。」

ドスを切つて、

「判然言へ、判然！……」

「否、貴方に限つて差上げられませんと、何も然う云ふ次第ではありません。」

「無きや何うした。」

「悪くお取遊ばさないで下さいまし。……人形は、……それは賣りますために、買つて頂きたいので、恚うやつて店を出して居りますんですが、頼まれました方に、くれぐれも言ひつけられて居りますんですよ。貴方——何うぞ御婦人ばかり願つて、殿方にはお賣り申さないやうにして欲しいと仰有つてです——それですから、實に折角でございますが。」

「姉え、姉え。」

銅三郎底力を入れた調子をツツンと響かせ、沈んで呼んだ。

「馬鹿も休みく言へ……ふん。」

と冷かに鼻で笑ひ、

「まあ可い、まあ可い！ ゆつくり土性骨に應へるやうに言つて聞かせる事がある。が、姉え、面を出しねえ、おい、顔を見せろい。これ、男一匹だ。苟も天下の紳士とあるべきものが、故々ホテルから出向いたんだ。其の頬被は、そりや何だ、無禮だ、不躰だ、生意氣だ、手拭を取つて挨拶しろ、取らねえか、取らねえと手が掛るぜ。」

お米は、ものも言ひあへず、すらりと手拭を取つて、確乎と皓齒に啣へた。みだれ苦しき後毛に、果敢ないばかり襟清し。

三千枝はハツと夢かと思ふ——餅屋の窓に、爪立つて、縫つて、伸上つて。……

此より前、三千枝は樂其の中にも何にもない、肱を曲げて枕として、心も膚も懷中も漫ろ寒い寂い朝。枕頭の老樹の姿を、媼に示現遊ばした觀世音よと御足の許に、野宿で倒れた投出しの棄身と成つて、つい、とろく、と我を忘れた。

蹄も響かず、轡も鳴らず、馬あり、天井から、ほかりと出た如く、俄然として、ヒ、ン高嘶。寝耳を打つて驚いてむつくと起る。

と、馬がけろりとして、ぼつくぼく。てくくと馬士が通りすがつて、  
「媼様よ。」

「お、」

と云ふ、餅屋の媼は、襖を一重、納戸の突當り正面の破障子を開けて、上が、お佛壇の下の押入から、枕を出して捻くつて居た處で。

「お日和で結構ぢやの。」

「霧が上つて朝熊が近いで、追着け、こりや雨だんべい。」

「疾う行つて戻らつしやい。」

「はア、出精で遣りますべい。」

がつんと留めた馬の脚を、ドウと擧げさせ、てくりと行く。

「やあ、お媼さん。」

と三千枝は其の枕を視て居て、痛入つて手で壓へた。

「邪魔をした、向うの別荘の事やなんか、聞きたいと思つたが、……又來よう。」

「まあ、旦那様。」

と枕を抱へて、こそく納戸から膝行出す。

「申戯ぢやない、頓て午だ。」

三千枝は立ちながら時計を見た。

「茶代は置いたよ、餅のも一所だ。こりや折角だから持つて歸る。」

「これな、貴客様、包みますものなりと、」

「手巾があります、然やうなら。」

と、ふいと出て、ト柳に向つて、薄日を颯と面に浴ぶるや、駭然として夢かと思つた。

此から、寂しいが、散る其の葉隠れに、幹に凭れて、裏門に對して、日の暮れるまでも熟と三年越の物思ひに耽らうとする、小柳橋の柳の下に、姿容こそ春と秋、董を桔梗に咲替へたが、同じ由縁の紫一本。

ちら／＼行交ふ雲を分けて、俤に立つと同時に、眉を壓して眼を射たのは、其の美女の膝のあたり、彩を散らした木の葉人形。

間は半町隔つたが、我が手に成つた木彫である。

其の黄なるは虎の如く、青きは龍の如く、黒きは鷲の如く、黄金の鯨、銀麒麟、然も大さ車輪の如く、白き風を颯と捲いて、總毛立つまで、衝と影を濃く作人の胸に衝當つた。

「あ。」

と思はず、聲を放つて、三千枝は、錦葉の渦に似た、色ある辻風に吹しらまされた體に見えて、一步、はつと退いて凝視たのであつた。

場所を思へ、事情を思へ。此の彫刻家の心を察せよ。

渠は其の日其の時の小遣にも窮する餘り、内證で研屋の親仁に委ねた、歌仙と大津繪人形の殆ど毎日、其以來、若干の金子に替へらるゝのを、吃の才覺とばかり浮々と思つて過ぎた。

現在、こゝに餅を買つた衣兜の中さへ、一切小賣人の勞働である。

其の賣子が、あれ／＼三年前に同じ處で、主の知れない片袖を我に與ふるために、身代りと成つた其の美しい娘に肖如。

四十七

虹は消えた。

三千枝が足も空に渡つて近着かうとした、錦は偶と中斷えて、白銀の其の刺繡は、露と成つて消えたのである。

目に黒雲の遮るばかり、三千枝は其の娘の前に立ちはだかる、銅三郎を見たのであるから。

無慚なる哉、伊勢中、借金だらけの、お玉が所謂此の柳先生は、就中、銅三郎に少なからぬ負債があつた。……蓋し茶屋小屋の立替や、まだ濟まさない驕りっこ。朝熊の茸狩にぞろりと出掛けた割前の不足の如き、神田八丁堀の櫛面屋が、大阪中立賣の邊栗屋と古市に出會つた式の、輕少なものでない。

方々は、骨牌と申すものを御承知の事、と恐察する。

「先生、此で目當がなくツちや、弓を射て的のないのも同然でございませ。尤も曲物の底を抜いて、金紙、銀紙を貼る奴です。プツリと最中を抉つた處で、白癡が日蝕を拜む器械だ。生命に別



條はありやしません。金子と生命は釣替ですから。そんな危険な事は手前だつて眞平です。點  
取の勘定ばかり、一寸一圓てツた處が適合でございませうぜ。」

お玉が又大の好物。好きより此の方が稼業で居る。

雨の流連、蟲の夜更、晩飯の後の運動だ、と四五人一座の時もあり、三人三鼎の時もあり、打  
つほどに、けるほどに、から花の紙が積つて舞臺の雪ぐらるに重なる時、一度、總メの多寡を見  
よう。で、お玉が横櫛の立膝で、パチ〜と算盤を弾くと、銅三郎が四角に坐つて煙管で讀んだ  
假綴の覺帳。

柳先生は、暢氣な顔して、柱に凭れて、床の間の花を見て居た。

「決算報告。」

と銅三郎が調子を張つて、笑ひながら居直つた。

此の實業家に對して、三千枝が支拂ふべき義務ある金額、驚く可からず、約七百圓。

「大分、こりや嵩張りしましたな。」

ともの忘れをしたやうに、銅三郎は眞顔で云つた。

お玉が、すりツこけさうな媚めいた友染の手で、横ざまに三千枝の、ぐたりとして居る膝を叩  
いて、

「御覽なさいな、何時だつて出過ぎるからさ。かはり札を一枚しか持たないで、びきに居て見越  
すなんて、頃日ぢや、(柳ちゃん骨牌)ツて名が着いた位だよ。……一名四光望さ、一寸、些と此  
にこりると可いのよ。貴方、服部さんに借りただけの證書を書いてお上げなさい。」

「證書を書くかね。」

と三千枝はとぼんとして言つた。

「先生と私の間だ。何、それに及ぶものか。」

と傍見をしながら、天井を斜に睨んで、ものは極所、と云つた氣合で、灰吹をボンと敲く。

「ですがね、些とこりさせなくつちや、眞個の味が分りませんから。」

「眞劍お仕込の段恐入つた。聊か聞苦うございませうが、大きに其處もありますな。先生、如何で  
す、奥方があゝおつしやる。」

「ねえ、貴方、……まあ、眞面目に成つて、ほ、ほ。」

と肩を震はすやうにして底意なく笑つた。

三千枝は此に意解けて、

「書くとも、服部さん、是非一通。」

「面白い！」

と膝を進めて、  
「勿論、銀的金的の事さね。」

四十八

「先生、過般の服部さんのは何うするの。」  
「服部さんのツて、何だい。」

とまでは一向平気で、枕許の急須の茶の、宵越しに成つたほどにも氣にしなかつた。が、續いて言つたお玉の一言に、今呑んだ酔覺の冷たい甘露が俄に毒に變じて、ヒヤリと肝尖へ觸れたやうに思つた。

「那個さ、證書の金子でさあね。」

「證書の金子？」

と、郡内一尺上へ上つて、肩を聳かしながら、汗ばんだやうなお玉の酔つた顔を屹と見て、

「那個は串戲ぢやないのか。證書と云つても、別に證券印紙を貼つた次第ぢやなし。」

「印紙だなんと云ふと、三百代言じみるわね。……串戲は串戲だけれど、お嬢さんが押繪をしたり、鶴を折るんぢやありませんわ。……大の男がお花見をしたんだもの、大川ツて事はそりやな

いのさ。あ、酔つた。」

とすぼりと肩を引込めて、お玉は枕に俯向に成る。

三千枝は、ドキ／＼と胸が轟き、我ながら腑効ない、手にした巻蓑が戰いて、

「ぢや、服部が何とか云つたか。」

と覺えず鋭い言をしたが、心着いて、強ひて落着いて、

「え、……催促をしたのかい。」

お玉は、うと／＼現らしい。

「ねえ、お玉。」

「そりや、彼の人とは別に何とも言やしませんやね。」

「然うだらう。」

と慌てて（然うだらう。）にして了つた。三千枝は漸と腑に落ちて、服部が恭しく刺を妙見町の

我が假住居——大宅の別業——へ通じた以來、美術、工藝を口に、先生と稱て、藝術家で交際

つて、三千枝が囊中の乏しきを知つて、然も聊も敬意を失はない銅三郎を、更めて堅く信じた。

が、實は信ぜむと欲したのである。信しながら、當座の氣休めに過ぎない、と自分でも心着く。

額も擡げず。

「催促をしないたつて、打棄つちや置けないね。それが證據にはね、服部さんの負けた分は、あの人皆に正金で拂ひましたもの。そりや當前さあね、拂ふのは……第一私が貰つたわ、勝つた分だけ、最う疾くに方なしたけれどよ。」  
と横顔を、袖裏の淺黄に白く澄して言ふ。

「え、。」

「頂戴！」

と透通るやうな腕を投げて、蓑を持つ三千枝の手首を丁と取つた。……發奮でぐい、と男を壓すと、ばつたりと鬢を外して、袖の亂れた肱枕。顔を見て莞爾しつ、

「女房が盜賊しやしまし……そんなに驚く事は無いわ。私の道樂ぐらゐる先から知つてゐるぢやありませんか。確乎なさいなね。」

とパクリと吹かすと、煙が近いので、婀娜に聳んで、そして恍惚と目を瞑る。

三千枝はドンと膝で起きて、

「服部と私とは、そんな中ぢやないんだぜ。」

と強く言つた、心の裡は……あはれ（お前との中。）はと云ひたいのであつた。お前の口から、然うした冷かな言は聞きたくない、と言ふのであつた。

四十九

お玉は懶さうな目で見上げた、生際艶な燈の影。

「でも、何の中だつて、金錢は他人ですよ。」

「お玉！」

と呼んだ聲が鋭い。

「何よ。」

と一向他愛がなかつた。

「お前とも他人だな。」

「まあ、……」

「私には金子がないんだ。」

と、ぐいと襟を合せて居直つたが、それは寢衣の縞ほども、筋の立つた言分ではなかつたのである。

「まあ、怒つて。一寸、何うするの？……貴方は。」

と其のまゝ立ちさうにした膝に手を置く。

「稼いで返さう、一晚でも早い方がいい。」

「雖然、それさへ、見え透いた拗ね方で、三千枝は我ながら扱て立つ瀬は無い。」

「可い加減になさいよ、小兒らしい。一體何だと思つて居るのさ、……お玉と云ふ相談對手が恠う遣つて一所に居て、話をしてるんぢやありませんか。何の千圓たらずの證書ぐらゐる、事と科に因りや、一味徒黨の連判状とか云ふものだつて、私が此の手で、捲上げて焼いて見せます。」

と寝ながら、菴蓐の吸殻をポイと棄てる、と見當を構はず疊へ落ちた。

三千枝がしだらなく拾つたり。

「ですが、貴方は先生ぢやありませんか。借りた金を拂はないなんて、それも人によりけりよ。那な人と云ふものは、そりや金びらは切るけれど、其處は、貴方なんかとは了簡が違ひますからね。どんな處で、どんな又蔭口を利かうも知れませんが。可厭ぢやありませんか。私だつて肩身が狭い、……餘り廣い肩身でもないけれど。」

と禪のやうに雪の二の腕、燈に胸も透過つて、心も讀めるばかりに見える。其の言葉に、銅三郎を蔑む意味の明かに籠つたのを、三千枝は半ば嬉しかつた。

はじめから、彼は殆んど、直覺的に、はた何ものか暗示さるゝ如く、過去の因縁でもあるやうに、お玉と銅三郎とは一種隱約の間に、互に相許しつつあるらしい疑惑を禁じ得ないで居たので。

が、其の際の三千枝の心は、銅三郎を蔑まれるより、自分の底はれるより、寧ろ唯一言、此の婦の口から然うした借金は拂ふに及ばない、と言つてもらひたかつたのである。

勢、恠の如くんば、七百有餘の金子は、當の對手の銅三郎よりもお玉に對して拂はなければならぬ情實であるから。

併しお玉は、徹頭徹尾、其の義務を果さないでも差支へないものとは言はなかつた。

とすると、詮ずる處、もし其の金子に就いて故障を言へば、渠は銅三郎の蔑まれるより、より多くお玉のために蔑まれねば成らない行掛りと成つた。

「何の千圓たらず。」

と頓て躍然として奮起したものの、いたましましや、柳先生、當夜の會計も覺束ない。

「……しかし弱つた。」

「ですから、大福屋さんにおつしやいなね。右から左ぢやありませんか。」

三千枝は聞いて急込んで、

「お玉、お玉さん、おい。」

「私は眠い。柳さん……」